印西市天神台遺跡

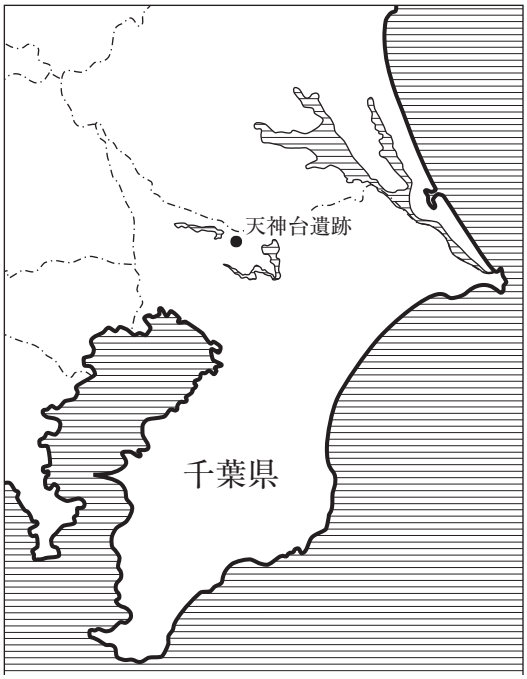
― 主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成28年12月

千葉県教育委員会

印西市天神台遺跡

— 主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序　　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業に伴って実施した印西市天神台遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査で、縄文時代、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代にかけての大集落の一部が検出されました。周辺の調査事例と合わせ、当地域の集落形成の様相を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成28年12月

千 葉 県 教 育 委 員 会
文化財課長　永 沼 律 朗

凡　　例

1　本書は、千葉県印旛土木事務所による主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　　天神台遺跡（１）～（５）　　印西市大森 2,233－1 ほか　　（遺跡コード 231－021）

3　発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は、平成 23 年度と平成 24 年度に千葉県印旛土木事務所の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（平成 24 年度から公益財団法人）が実施した。平成 25 年度以降は千葉県県土整備部の依頼を受け千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。年度毎の調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者は、第１章第１節に記した。

4　本書の執筆は、第１章と天神台遺跡（１）～（４）について主に主任上席文化財主事 鳴田浩司が担当し、その他と全体の編集を上席文化財主事 黒沢 崇が担当した。なお、天神台遺跡（５）の遺構・遺物について文化財主事 會田成美、縄文土器について文化財主事 松浦 誠の協力を得た。

5　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、印西市教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、千葉県印旛土木事務所ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

6　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

　　第１図　印西市発行　1/2,500　　印西市地形図 平成８年を編集

　　第３図　国土地理院発行　1/25,000　地形図「小林」「龍ヶ崎」平成 22 年を編集

7　本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　土玉の計測表に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 2007 年版』に基づいている。

9　図版１の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 44 年撮影のものを使用した。

10　遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンなどの用例は以下のとおりである。挿図中の「K」は撹乱の略である。

山砂・粘土　　焼　土　　柱あたり痕・黒色処理

赤　彩　　須恵器断面　　硬化面範囲

本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１　事業の経緯と経過……1
　　２　調査の方法と概要……3
　第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡……5
第２章　調査の成果……11
　第１節　旧石器時代……11
　第２節　縄文時代……12
　　１　竪穴住居跡……12
　　２　土　坑……12
　　３　遺構外出土遺物……16
　第３節　弥生時代・古墳時代……17
　　１　弥生時代……17
　　２　古墳時代……24
　第４節　奈良・平安時代以降……26
　　１　竪穴住居跡……26
　　２　掘立柱建物跡・ピット群……48
　　３　土　坑……48
　　４　溝状遺構……52
　　５　遺構外出土遺物……52
第３章　総　括……54
　第１節　時代毎の成果概要……54
　第２節　遺構の分布と遺物の検討……58

報告書抄録……巻末

表 目 次

第１表　遺構一覧表……10
第２表　土玉計測表……47
第３表　天神台遺跡など調査履歴一覧表……57
第４表　奈良・平安時代土器種類別重量表……61

挿図目次

第１図　事業範囲及び調査遺跡位置……２
第２図　調査地点と確認調査位置……４
第３図　事業路線図と周辺の遺跡……６
第４図　上層遺構分布図……９
第５図　下層基本土層……11
第６図　石器出土地点と出土遺物……11
第７図　（１）SI－001（１）……13
第８図　（１）SI－001（２）……14
第９図　土坑＜縄文時代＞……15
第10図　遺構外出土遺物＜縄文時代＞……16
第11図　（２）SI－001……17
第12図　（３）SI－002……18
第13図　（４）SI－001……19
第14図　（４）SI－002（１）……21
第15図　（４）SI－002（２）……22
第16図　（５）SI－002……23
第17図　（３）SI－003……25
第18図　（５）SI－003……25
第19図　（１）SI－002……26
第20図　（２）SI－002・003……28
第21図　（２）SI－002 遺物（１）……30
第22図　（２）SI－002 遺物（２）……32
第23図　（２）SI－003 遺物……34
第24図　（２）SI－004……35
第25図　（２）SI－005……36
第26図　（３）SI－001……38
第27図　（３）SI－004……39
第28図　（４）SI－003……40
第29図　（４）SI－004……41
第30図　（５）SI－001（１）……43
第31図　（５）SI－001（２）……44
第32図　（５）SI－001（３）……45
第33図　（５）SI－001（４）……46
第34図　（４）SB－001・002……49
第35図　（５）ピット群……50
第36図　土坑＜奈良・平安時代以降＞……51
第37図　溝状遺構＜奈良・平安時代以降＞……53
第38図　遺構外出土遺物＜奈良・平安時代＞……53
第39図　隣接調査地点合成図……55
第40図　周辺調査地点と成果……56
第41図　印旛沼周辺の古墳と集落分布……59
第42図　時期別竪穴住居跡軒数比較……60
第43図　出土土器重量比率……61

図版目次

図版１　航空写真（S= 約 1/10,000）
図版２　調査前･確認調査･旧石器･竪穴住居跡（１）
図版３　竪穴住居跡（２）
図版４　竪穴住居跡（３）
図版５　竪穴住居跡（４）
図版６　竪穴住居跡（５）・掘立柱建物跡（１）
図版７　掘立柱建物跡（２）・ピット・土坑（１）
図版８　土坑（２）・溝
図版９　旧石器・縄文時代遺物（１）
図版10　縄文時代遺物（２）
図版11　弥生時代遺物
図版12　古墳・奈良・平安時代遺物（１）
図版13　奈良・平安時代遺物（２）
図版14　奈良・平安時代遺物（３）
図版15　奈良・平安時代遺物（４）
図版16　奈良・平安時代遺物（５）
図版17　奈良・平安時代遺物（６）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　事業の経緯と経過　（第１図）

印西市は千葉県央部の北端に位置し、河川交通が主たる交通手段だった近世から近代にかけては利根川中流域の物的･人的交通路の要衝であった。昭和以降鉄道整備をきっかけとして、河川交通から鉄道輸送･道路交通による物流が大きく変化したのに伴い、船荷の揚げ下ろしをする河岸としての機能が薄れる一方で、既存の道路網が整備されはじめた。

主要地方道千葉竜ヶ崎線は千葉市稲毛区穴川から八千代市、印西市、我孫子市を通り、利根川を越えて茨城県竜ヶ崎市までの総延長 38km の道路である。千葉ニュータウンなどの開発に伴い、近年は交通量が増加してきており、千葉県県土整備部道路整備課は千葉竜ヶ崎線の道路改良事業として、印西市大森から東泉新田地区の工事を計画した。この工事の実施にあたり、千葉県印旛地域整備センター（現 千葉県印旛土木事務所）から平成 20 年４月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査などの結果を踏まえ、平成 20 年７月に工事予定路線内には現地踏査の実施できない箇所を除いて、天神台遺跡ほか６か所に遺跡が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなった。

天神台遺跡の工事予定路線内の発掘調査及び整理作業は、千葉県印旛土木事務所からの委託を受けて、平成 23 年度から財団法人千葉県教育振興財団（現 公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施した。平成 25 年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が依頼を受けて実施し、この度、天神台遺跡の（１）～（５）地点についての発掘調査報告書を刊行することとなった。なお、今回報告する地点の南側部分の発掘調査は未了である。先に同事業路線内の発掘調査が終了した東泉新田南遺跡の一部・曽谷窪遺跡については、平成 16 年と平成 23 年に発掘調査報告書[1)]が刊行されている。

各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

発掘調査

○平成 23 年度【財団法人千葉県教育振興財団】

調査研究部長　及川淳一　　北部調査事務所長　野口行雄

天神台遺跡（１）　担当者　上席研究員　糸川道行
期　間　平成 23 年８月１日～平成 23 年９月 16 日
内　容　確認調査　上層 1,190㎡／ 1,627㎡　下層 36㎡／ 1,627㎡
本 調 査　上層　118㎡

天神台遺跡（２）　担当者　上席研究員　田島 新
期　間　平成 23 年 11 月 16 日～平成 23 年 12 月 21 日
内　容　確認調査　上層 148㎡／ 972㎡　　下層 44㎡／ 972㎡
本 調 査　上層 486㎡

○平成 24 年度【公益財団法人千葉県教育振興財団】

第１図　事業範囲及び調査遺跡位置

調査研究部長　関口達彦　　調査２課長　橋本勝雄

天神台遺跡（３）　担当者　主任上席文化財主事　四柳 隆

期　間　平成 24 年９月３日～平成 24 年９月 28 日

内　容　確認調査　上層 574㎡／ 574㎡　　下層 12㎡／ 574㎡

本 調 査　上層 574㎡

○平成 25 年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長　湯浅京子　　発掘調査班長　蜂屋孝之

天神台遺跡（４）　担当者　主任上席文化財主事　鳴田浩司

期　間　平成 25 年 10 月３日～平成 25 年 11 月 15 日

内　容　確認調査　上層 1,009㎡／ 1,009㎡　下層 20㎡／ 1,009㎡

本 調 査　上層　309㎡

○平成 27 年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長　永沼律朗　　発掘調査班長　蜂屋孝之

天神台遺跡（５）　担当者　上席文化財主事　黒沢 崇

期　間　平成 27 年９月１日～平成 27 年 10 月２日

内　容　確認調査　上層 647.9㎡／ 647.9㎡　下層 12㎡／ 647.9㎡

本 調 査　上層　250㎡

整理作業

○平成 23 年度【財団法人千葉県教育振興財団】

調査研究部長　及川淳一　北部調査事務所長　野口行雄

天神台遺跡（１）（２）　担当者　上席研究員　田島 新

内　容　記録整理から実測・トレースの一部まで

○平成 26 年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長　永沼律朗　　発掘調査班長　蜂屋孝之

天神台遺跡（１）～（４）担当者　主任上席文化財主事　鳴田浩司

内　容　天神台遺跡（１）（２）：実測・トレース・挿図・原稿執筆の一部

天神台遺跡（３）（４）：記録整理からトレース・挿図・原稿執筆の一部

○平成 28 年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長　永沼律朗　　発掘調査班長　田井知二

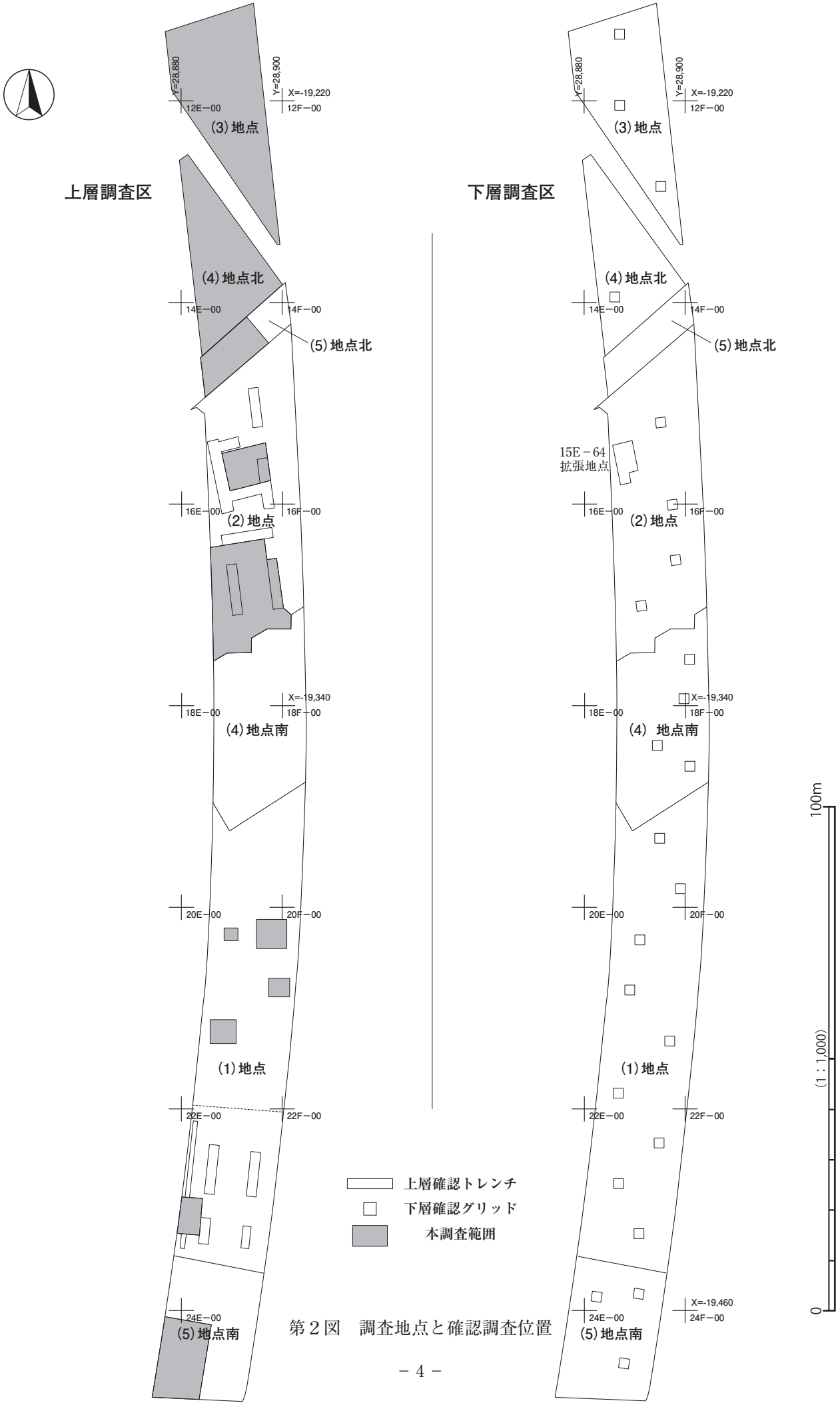
天神台遺跡（１）～（５）担当者　上席文化財主事　黒沢 崇

内　容　天神台遺跡（１）～（４）：トレース・挿図・原稿執筆の一部から報告書刊行

天神台遺跡（５）：記録整理から報告書刊行

２　調査の方法と概要（第２図）

調査では、まず天神台遺跡の北に位置する曽谷窪遺跡を含めた事業地内の遺跡範囲全体を覆うように公共座標（日本測地系第Ⅸ座標系）に基づく 20 m × 20 mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッド名は方眼の起点（座標：X＝－19,000、Y＝28,800）から東方向へＡ、Ｂ、Ｃ…、南方向へ１、２、３…



第２図　調査地点と確認調査位置

と振った。大グリッドを２ｍ×２ｍに百分割し、北西隅を 00、南東隅を 99 として小グリッドとし、大・小グリッドを組み合せ、17E－36 というように表記した。なお、遺跡のほぼ中央にあたる 17E－38 は、日本測地系第Ⅸ座標系では　X＝－19,326、Y＝28,896 で、ＪＧＤ 2000 系変換値[2)] ではX＝－18,971.0381、Y＝28,602.4989、北緯 35° 49′ 42.92450″、東経 140° 08′ 59.67410″となる。

発掘調査

平成 23 年度から 25 年度及び平成 27 年度にかけて（１）地点から（５）地点の発掘調査を実施した。

（１）地点の上層調査では、隣接地の印西市教育委員会による調査成果から、調査対象範囲の北側の大半を表土除去して遺構確認を開始したが、当初予想していたほど遺構が検出されなかったため、表土除去をしていない南側の調査対象範囲は、確認トレンチを設定して調査した。遺構の密度は希薄であり、検出遺構周辺のみ本調査を実施した。（２）地点の調査ではその調査結果を考慮して、当初から確認トレンチを設定して遺構の確認調査を行い、遺構検出地点を中心に本調査を実施した。（３）地点の調査では周辺の調査成果から遺構の広範囲にわたる検出が見込まれたため全面確認調査とした結果、全域で遺構を検出し、全面本調査となった。（４）地点は大きく２地点に分かれ、それぞれ全面表土除去して確認調査を行った。北調査区では全域で遺構を検出し、全面本調査範囲となった。南調査区はほとんど撹乱されて遺構が少なく、本調査は一部分である。（５）地点は、（２）地点と（４）地点の間にある現道の下の北調査区と南端の南調査区の２か所である。調査対象範囲全体を表土除去し、遺構の確認された周辺のみ本調査を実施した。全体で、上層の本調査面積は対象総面積 4,829.9㎡に対して 1,737㎡である。

下層については、（１）地点の調査から（５）地点の調査に至るまで、全体で対象面積の約 2.5％にあたる 124㎡の確認調査を実施した。そのうち（２）地点の調査でⅢ層下部から石器が２点出土したため周辺を拡張したものの、さらなる遺物の出土がなく、確認調査で終了した。

なお、記録作成方法は、（３）地点の調査については遺構実測支援システムコンピュータを使用したデジタル機器による遺構平面図・断面図、遺物分布図を作成した。それ以外の地点の調査では従来どおり平板測量などの手実測により図面作成を行った。記録写真については、基本的に６×７モノクロ、35mm モノクロ、カラーリバーサルフィルムで撮影し、補足的にデジタルカメラを使用した。

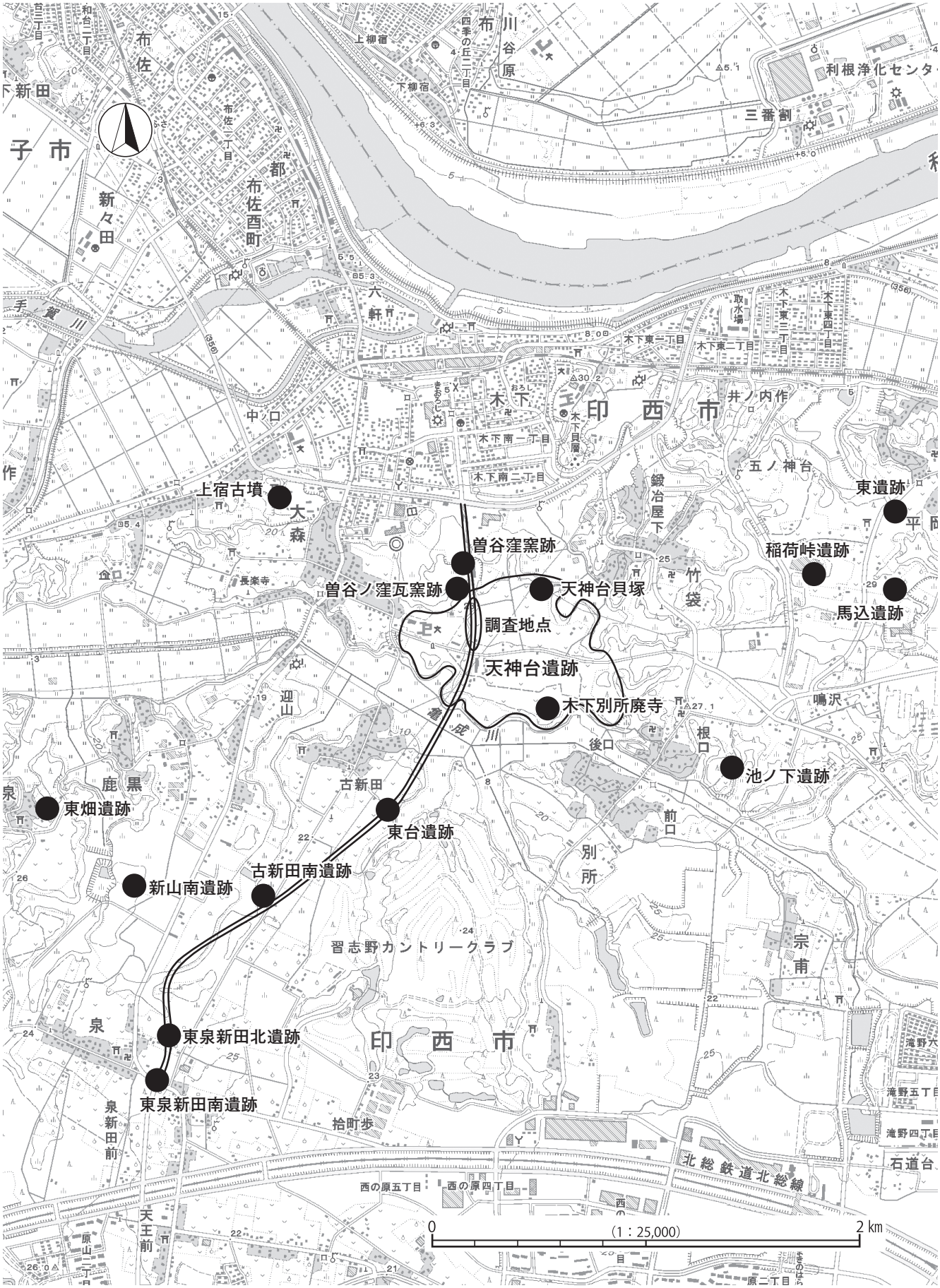
整理作業

平成 23 年度に（１）と（２）地点の基礎整理などを行ったが、本格的な整理作業は（４）地点調査終了後、平成 26 年度から開始した。調査では遺構種類ごとにそれぞれの地点で 001 から遺構番号を付けており、SI－001（竪穴住居跡）が各地点１軒ずつで計５軒存在する。これらを区別するため、本報告ではそれぞれの遺構番号の前に括弧付けで地点番号を付した。例えば（１）地点調査分の SI－001 は（１）SI－001、（２）地点調査分の SI－001 は（２）SI－001 と呼称することとした。

整理作業は調査図面・写真の記録整理から開始し、出土遺物の水洗・注記、接合作業と実測を実施した。併行して、現場図面の鉛筆トレース・修正を行い、挿図原図を作成した。挿図は従来どおりのペントレースにより作成し、写真図版は遺構・遺物ともデジタルデータで編集した。その後、原稿執筆・編集・校正作業をへて、この度報告書刊行となった。また、編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡（第３図）

今回調査を実施した天神台遺跡は印西市大森に位置する。印西市は千葉県央部の北端にあって、北端を



第３図　事業路線図と周辺の遺跡

利根川によって茨城県と境を接する。利根川に面した北側の地域は江戸時代の面影を残しているが、南側の内陸部はここ数十年の間に開発が著しく進展し、東京のベッドタウンとして発展を遂げている。平成22年に旧印西市が中心となり印旛村、本埜村と合併し、新印西市の市域は増大した。現在、西方は我孫子市、柏市、白井市、南方は八千代市、佐倉市、酒々井町、東方は栄町、成田市に接する。利根川に面する印西市木下地区は古代・中世においては、香取の海に面して、また、近世以降は利根川本流の物流を担う主要河岸として、常陸国方面や銚子から関宿方面への水上交通の要衝として繁栄した。天神台遺跡の所在する大森地区は木下地区の南側に隣接し、利根川本流と手賀沼に流れ込む亀成川に南北から複雑に開析された谷津をもつ標高24 m前後の台地上に広く展開する。今回の調査地点は遺跡のほぼ中央部にあたり、北側が利根川を遠望できる谷津の傾斜面に接する。西側から入り込む小さな谷津を境として同台地の北側は曽谷窪遺跡となる。南側には広く谷津田が広がっている。

ここでは周辺遺跡について時代毎に調査事例[3)]を中心に概観する。

旧石器時代

特に調査事例が他の時代に比較して多くないが、旧石器時代の代表的な遺跡として、天神台遺跡から西南西方向2 kmに位置する新山南遺跡（泉北側第3遺跡）が挙げられる。標高22 m～25 mの台地上で、Ⅸ層中部から上部にかけて検出された大型の環状ブロック群をはじめとした5枚の文化層、計16か所の石器集中が検出されている。この隣接遺跡でも旧石器時代の遺物が多量に出土している。

縄文時代

本遺跡の調査で縄文時代早期の炉穴、中期の竪穴住居跡をはじめ後・晩期の集落が検出された経歴をもつように縄文時代の遺跡は周辺に数多く分布している。同台地上の北側で隣接する曽谷窪遺跡でも早期の炉穴が検出されている。本遺跡北東端に位置する天神台貝塚はヤマトシジミを主体とする貝塚で、中期及び後・晩期の地点貝層が調査されている。西側に位置する東畑遺跡では、縄文時代の遺物、特に後・晩期を主体とした土器が多量に出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代前期から中期にかけての遺跡の検出例は乏しいが、後期になると遺跡数が増加し、さらに古墳時代前期にまでかかる遺跡は、亀成川流域に多く確認されている。曽谷窪遺跡では附加条縄文などが施された甕を多く出土した弥生時代後期の集落跡が検出されている。

古墳時代終末期から奈良・平安時代

当該期の遺跡も周辺に多く分布する。墳丘は失われ規模や墳形が不明であるが、終末期古墳の上宿古墳が所在する。栄町龍角寺古墳群の岩屋古墳と同様な貝化石を多量に含む切石の横穴式石室を主体部とする。印旛沼周辺の終末期古墳と密接な関連をもち、当地域で権力をふるった首長の墓と推定される。先に紹介した曽谷窪遺跡では当該期の竪穴住居跡が斜面部から検出されている。7世紀後半に創建されたと考えられる栄町龍角寺と同じ山田寺系の瓦が出土した木下別所廃寺が同台地上の南東方向400 mに、その瓦を供給した曽谷ノ窪瓦窯跡が同台地北側斜面に展開する。その他、鉄鉢形土器を伴って瓦塔2基が出土した8世紀後半から9世紀初めにかけての集落遺跡である馬込遺跡があり、この地域には仏教関連遺跡が集中している。また、「下総国埴生郡酢取郷車持□□暦二年正月十四」という長文の墨書土器を含む多量の墨書土器・線刻土器が出土した7世紀末から9世紀後葉の集落である池ノ下遺跡や、7世紀末から9世紀にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された稲荷峠遺跡、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけ

ての集落遺跡で、掘立柱建物跡が多く検出された東遺跡など、一般集落ではなく拠点的性格を持った遺跡も数多い。

注１）今回の千葉竜ヶ崎線事業で先に刊行された発掘調査報告書は以下の２冊である。

2004 『主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書－印西市東泉新田南遺跡－』
（財）千葉県文化財センター調査報告第 494 集

2011 『印西市曽谷窪遺跡－総合交付金（住基）委託（埋蔵文化財調査）報告書－』
（財）千葉県教育振興財団調査報告第 661 集

２）座標の数値は「ＷＥＢ版ＴＫＹ２ＪＤ　Ver.1.3.80」に拠る。

３）周辺の遺跡については下記文献を参考にした。

【天神台遺跡】

1987 『天神台遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 13 集

1991 『天神台・ヤジダ遺跡発掘調査報告書　木下線延長（１期）工事に伴う埋蔵文化財調査』
（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 50 集

1994 『（財）印旛郡市文化財センター年報 10 －平成５年度－』

1997 『（財）印旛郡市文化財センター年報 12 －平成７年度－』

2000 『天神台遺跡－印西市道 08 － 166 号線埋蔵文化財調査－』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 160 集

2001 『印西市内遺跡発掘調査報告書－平成 11 年度・平成 12 年度－天神台遺跡（第８地点）』印西市教育委員会

2003 『印西市内遺跡発掘調査報告書－平成 14 年度－天神台遺跡（第９地点）』印西市教育委員会

2004 『天神台遺跡（第 11 地点）発掘調査報告書－不特定遺跡発掘調査助成事業－』印西市教育委員会

2004 『平成 15 年度印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会（第 13 地点）

2014 『平成 17 年度～平成 24 年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会（第 14 地点・15 地点）

【曽谷窪遺跡・瓦窯跡】

1980 『曾谷ノ窪瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会　曾谷ノ窪瓦窯跡調査会

1995 『曽谷窪遺跡発掘調査報告書－印西町大森地区土取及び整地工事に伴う埋蔵文化財調査－』
（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 96 集

2002 『曽谷ノ窪瓦窯跡（第２地点）－印西市曽谷窪地区埋立事業に伴う埋蔵文化財調査－』
（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 187 集

2011 『印西市曽谷窪遺跡－総合交付金（住基）委託（埋蔵文化財調査）報告書－』（財）千葉県教育振興財団調査報告第 661 集

【木下別所廃寺】

1974 佐藤克己・高木博彦「木下廃寺の古瓦」『ふさ』第５・６合併号　ふさの会

1978 『木下別所廃寺跡第一次発掘調査概報』千葉県教育委員会　木下別所廃寺跡調査会

1979 『木下別所廃寺跡第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会　木下別所廃寺跡調査会

1993 岡本東三「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について－その分布の意味するもの－」『千葉史学』第 22 号

1993 小出紳夫・西川修一・山路直充「千葉県印西町木下別所廃寺の鐙瓦」『古代』第 96 号

1998 「73　木下別所廃寺」『千葉県の歴史　資料編　考古３（奈良・平安時代）』千葉県

2003 阿部有花・小牧美知枝「印西市の古瓦－木下別所廃寺出土瓦の検討－」『研究紀要３』（財）印旛郡市文化財センター

【そ　の　他】

1961 金子浩昌「天神台貝塚」『印旛手賀』 早稲田大学考古学研究室報告第８冊

1974 高木博彦「印西町大森上宿古墳」『ふさ』第５・６合併号　ふさの会

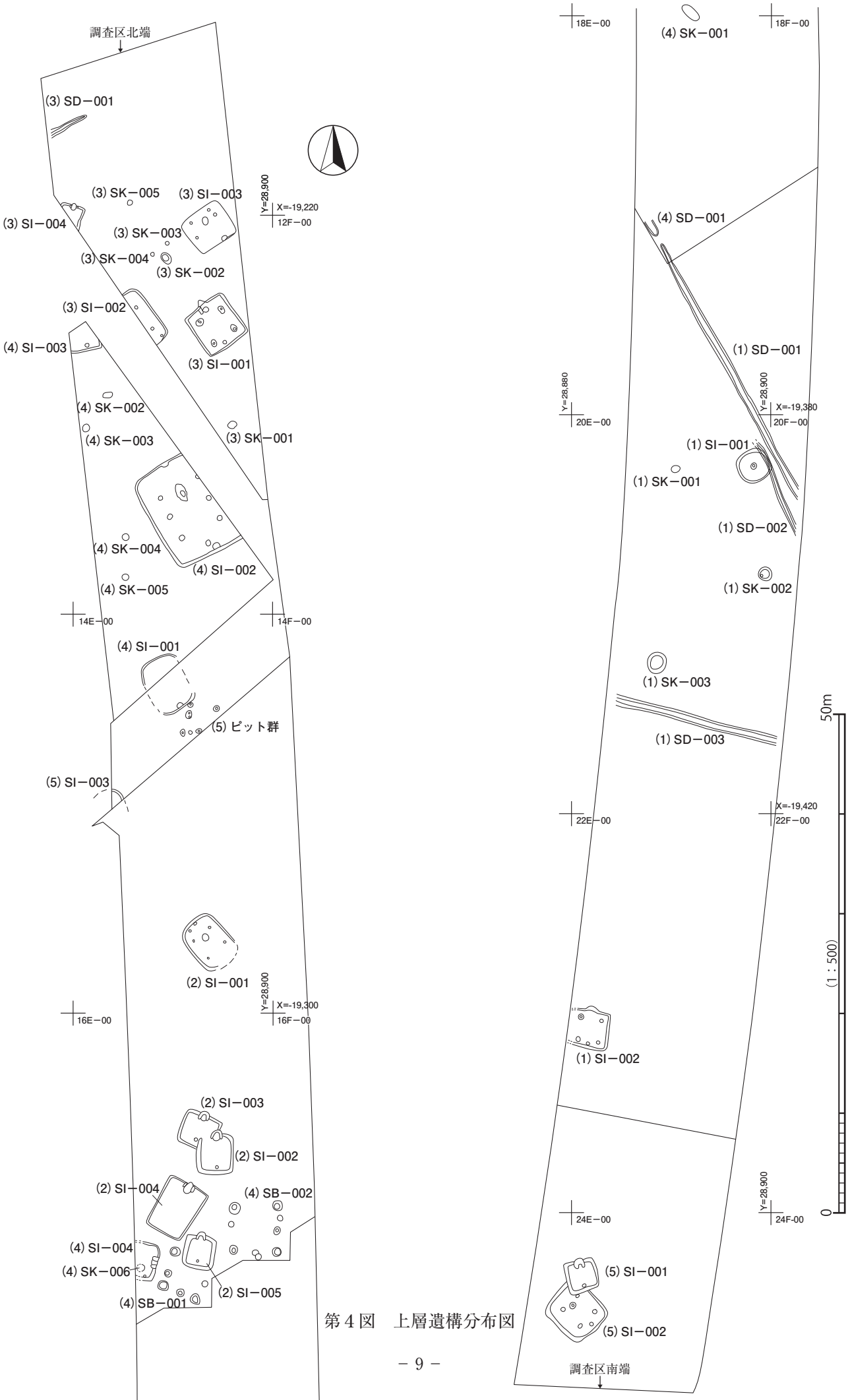
1999 『東遺跡（第２地点）馬込遺跡Ⅱ－印西市道 00 － 109 号線埋蔵文化財調査 （馬込地区）排水整備事業に伴う埋蔵文化財調査－』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 153 集

2004 『印西市馬込遺跡－（仮称）平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書－』（財）千葉県文化財センター調査報告第 495 集

2006 『東畑遺跡－印西市道 09 － 009 号線埋蔵文化財調査』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 238 集

2008 『池ノ下遺跡－印西市道 00 － 031 号線池ノ下遺跡埋蔵文化財調査委託－』
（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 260 集

2011 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅢ－印西市泉北側第３遺跡（下層）－』
（財）千葉県教育振興財団調査報告第 650 集


調査区北端
(3) SD−001
(3) SK−005
(3) SI−003
(3) SI−004
(3) SK−003
(3) SK−004
(3) SK−002
(3) SI−002
(4) SI−003
(3) SI−001
(4) SK−002
(4) SK−003
(3) SK−001
(4) SK−004
(4) SI−002
(4) SK−005
(4) SI−001
(5) ピット群
(5) SI−003
(2) SI−001
(2) SI−003
(2) SI−002
(2) SI−004
(4) SB−002
(4) SI−004
(4) SK−006
(2) SI−005
(4) SB−001
Y=28,900
X=-19,220
12F−00
14E−00
14F−00
16E−00
X=-19,300
16F−00
18E−00
18F−00
(4) SK−001
(4) SD−001
(1) SD−001
Y=28,880
20E−00
X=-19,380
20F−00
(1) SI−001
(1) SK−001
(1) SD−002
(1) SK−002
(1) SK−003
(1) SD−003
22E−00
X=-19,420
22F−00
(1) SI−002
24E−00
24F-00
(5) SI−001
(5) SI−002
調査区南端
50m
(1 : 500)
0

第４図　上層遺構分布図

第１表　遺構一覧表

地　点	遺構№	種　類	時　期	位置（主グリッド）	備　　考
（１）地点	（１）SI－001	竪穴住居跡	縄文時代	20E－39	
	（１）SI－002	竪穴住居跡	奈良・平安時代	23E－11	
	（１）SK－001	土坑	縄文時代	20E－25	
	（１）SK－002	土坑	縄文時代	20F－80	
	（１）SK－003	土坑	縄文時代	21E－24	
	（１）SD－001	溝状遺構	奈良・平安時代以降	19E～20F	
	（１）SD－002	溝状遺構	奈良・平安時代以降	20E	
	（１）SD－003	溝状遺構	奈良・平安時代以降	21E	
（２）地点	（２）SI－001	竪穴住居跡	弥生時代	15E－77	
	（２）SI－002	竪穴住居跡	奈良・平安時代	16E－77	
	（２）SI－003	竪穴住居跡	奈良・平安時代	16E－56	
	（２）SI－004	竪穴住居跡	奈良・平安時代	17E－05	
	（２）SI－005	竪穴住居跡	奈良・平安時代	17E－26	
（３）地点	（３）SI－001	竪穴住居跡	奈良・平安時代	12E－57	
	（３）SI－002	竪穴住居跡	弥生時代	12E－53	第８地点１号住居と第９地点５号住居と同遺構
	（３）SI－003	竪穴住居跡	古墳時代	12E－17	
	（３）SI－004	竪穴住居跡	奈良・平安時代	12E－00	第８地点６号住居と同遺構
	（３）SK－001	土坑	奈良・平安時代	13E－08	
	（３）SK－002	土坑	奈良・平安時代	12E－24	
	（３）SK－003	土坑	奈良・平安時代	12E－14	
	（３）SK－004	土坑	奈良・平安時代	12E－24	
	（３）SK－005	土坑	奈良・平安時代	11E－92	
	（３）SD－001	溝状遺構	奈良・平安時代	11D～11E	第８地点２号溝と同遺構
（４）地点	（４）SI－001	竪穴住居跡	弥生時代	14E－34	
	（４）SI－002	竪穴住居跡	弥生時代	13E－56	第９地点６号住居と同遺構
	（４）SI－003	竪穴住居跡	奈良・平安時代	12E－60	第９地点７号住居と同遺構
	（４）SI－004	竪穴住居跡	奈良・平安時代	17E－23	
	（４）SK－001	土坑	縄文時代	18E－06	
	（４）SK－002	土坑	奈良・平安時代	12E－81	
	（４）SK－003	土坑	奈良・平安時代	13E－00	
	（４）SK－004	土坑	奈良・平安時代	13E－62	
	（４）SK－005	土坑	奈良・平安時代	13E－82	
	（４）SK－006	土坑	奈良・平安時代	17E－23	
	（４）SB－001	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	17E－36	
	（４）SB－002	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	17E－09	
	（４）SD－001	溝状遺構	奈良・平安時代以降	19E	
（５）地点	（５）SI－001	竪穴住居跡	奈良・平安時代	24E－30	
	（５）SI－002	竪穴住居跡	弥生時代	24E－50	
	（５）SI－003	竪穴住居跡	古墳時代前期？	14E－92	
	（５）ピット群	ピット	奈良・平安時代	14E－55	P1～P6

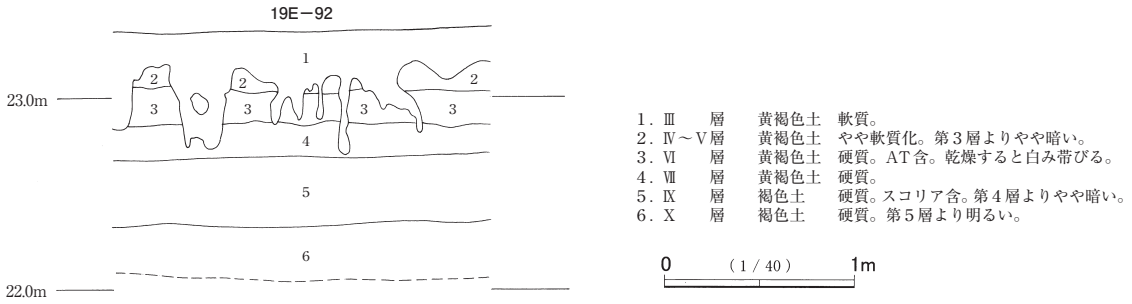
第２章　調査の成果

第１節　旧石器時代（第５・６図、図版２・９）

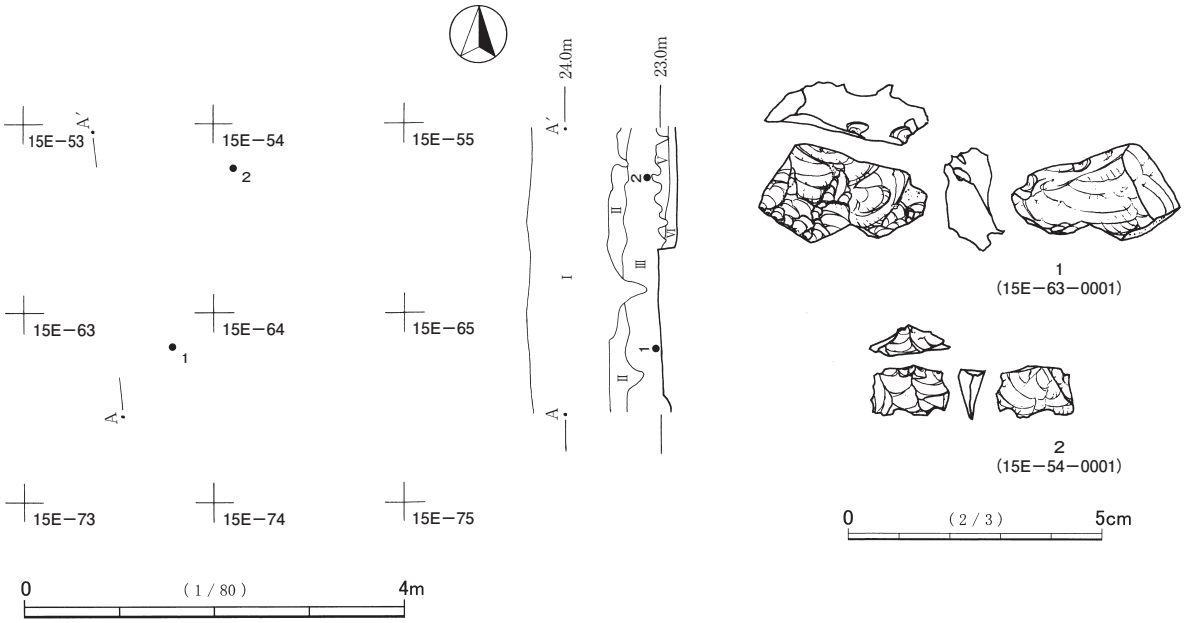
旧石器時代（下層）の標準土層として（４）調査区の19E－92の土層柱状図を掲載した。Ⅵ層（AT層）は白みを帯び比較的分層が容易であったが、全体的に第２黒色帯が極めて不明瞭であった。

下層については調査対象面積4,829.9㎡に対し約2.5％にあたる124㎡の確認調査を実施した。その中で（２）地点の15E－54･63グリッドから剥片石器が２点出土した。Ⅲ層下部からの出土で、周辺を拡張したが、追加出土はなく、確認調査で終了した。

１は栃木県高原山産黒曜石の２次加工のある剥片で、長さ1.9cm、幅3.2cm、厚さ0.8cm、重量４ｇである。２も同じ石材の剥片で、長さ0.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量0.45ｇである。遺物相からいずれも立川ロームⅣ層下部～Ⅴ層に対比される。



第５図　下層基本土層



第６図　石器出土地点と出土遺物

第２節　縄文時代

１　竪穴住居跡

（１）SI－001（第７・８図、図版２・９）　20E－39 グリッド周辺に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は上端直径が 3.5 m、深さは 50cm である。南東側は撹乱の影響を大きく受けている。調査中に土層断面観察ベルトの位置を変更したため、断面図が一部実測できていない。ほぼ中央に炉を付設し、規模は、径約 65cm、深さ 45cm で２段となっている。炉の周縁、同心円状に床の硬化面が広がる。床面は多少の凸凹があるが、ほぼ平坦で、北側がやや高い。炉の際は床面より高く、その周囲はややくぼむ。柱穴は検出されない。床面近くから覆土上面まで多くの遺物が出土したが､特に南東側覆土中と北側床面に目立つ。

１はほぼ完形の器台である。受け面は平坦で外周に向かってやや高くなる。脚部は下部がやや広がる末広形で、接地面には摩耗した痕がみられる。直径約４cm の大型の孔が脚部をめぐるように５つ配されている。そのうち２つの間に、直径約２cm の小型の孔が上下に２つ並んで配される。また、表面の調整は丁寧であるのに対し、内面の調整は粗雑である。住居北壁際の床面直上から出土している。２はほぼ完形の深鉢である。口縁部には隆帯による楕円の区画文がめぐり、区画内には縄文が充填される。この隆帯の先を口縁部に被せることで、６単位の突起を持つ口縁形をなしている。頸部から胴部にかけてはＲＬの縄文を地文とし、２本一対の沈線を懸垂させ、沈線間の縄文は磨消される。３は深鉢の口縁部である。４単位の波状口縁形をなし、波頂部は内傾する。沈線による円形の意匠が、波頂部の形に添うように二重に施される。沈線間や地文にはＲＬの縄文が施され、幅広の磨消し縄文帯が懸垂する。床面直上から出土している。１～３は加曽利Ｅ３式に属すると考えられる。４は扁平な楕円形の石で、石材は安山岩である。全体的に研磨の痕がみられ、再利用した可能性が考えられる。重量は 1,726.2 ｇである。５は床面近くから出土しているが、平面的には撹乱部分に近い。鉄分のような付着物や形状から金床石状で、混入した可能性がある。断面は三角形である。石材はハンレイ岩、重量は 9,210 ｇである。６は凹み石である。全体的に研磨の痕がみられ、再利用した可能性がある。石材はハンレイ岩、重量は 3,097 ｇである。７・８は、磨石である。７は部分的に研磨した痕がみられる。石材は砂岩、重量は 153.9 ｇである。８は大型で、全面摩滅してなめらかである。石材は安山岩、重量は 2,300 ｇである。

２　土　坑

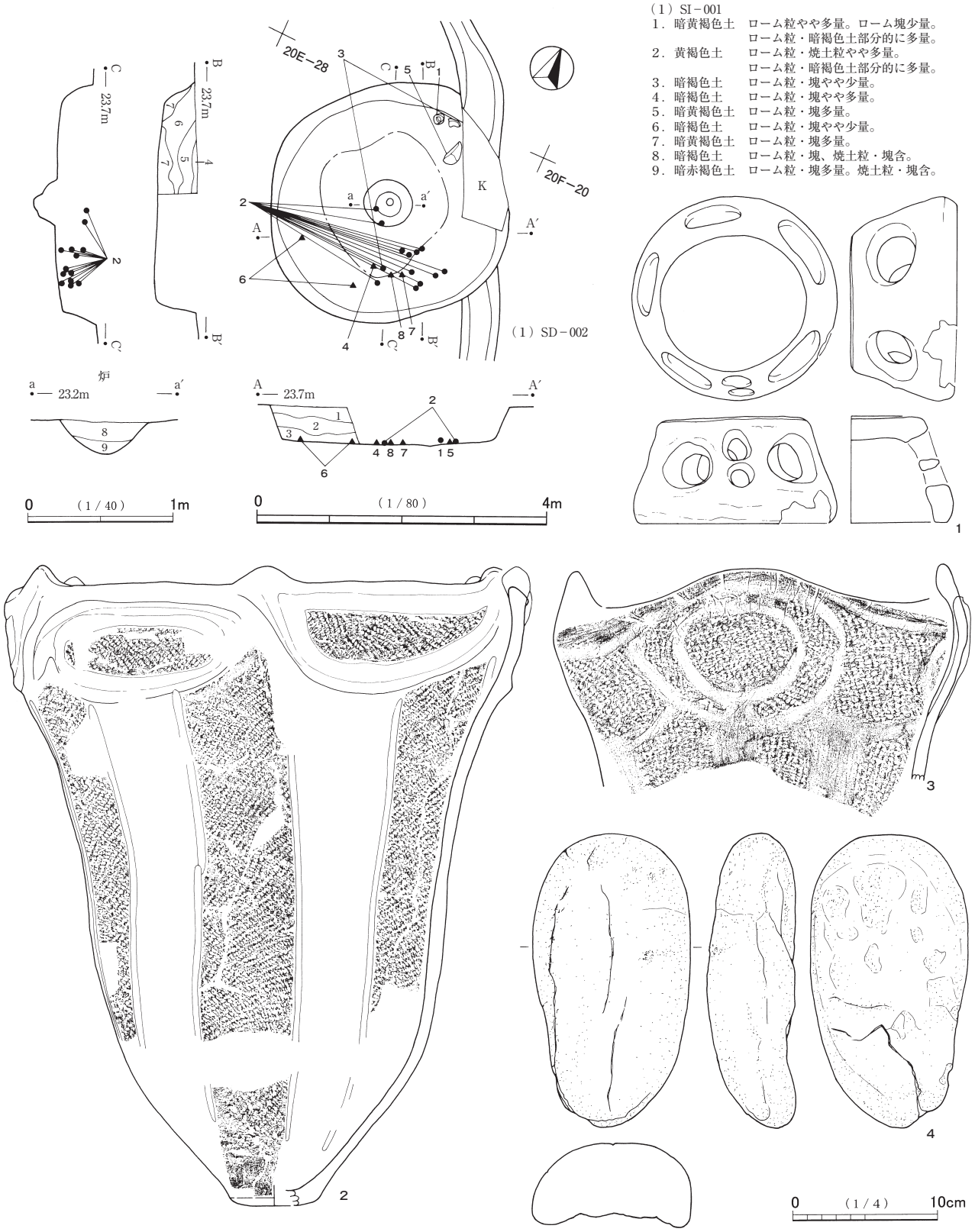
（１）SK－001（第９図、図版７・９）　20E－25 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形、長軸方位はＮ－90°－Ｅ、規模は長軸 87cm、短軸 60cm である。確認面からの深さは 20cm ～ 30cm、底面は比較的平らで、東方向に緩やかに傾斜している。西端から伏せた状態の深鉢の上半部が出土した。底部まで完形で埋まっていた可能性もある。

１は、深鉢の口縁部から頸部にかけて残存するものである。４単位の突起を持つ口縁形をなし、口唇部は無文である。口縁部には微隆起による孤線文がめぐり、胴部文様帯とつながるとみられる。時期は加曽利Ｅ４式に属する。

（１）SK－002（第９図、図版７・10）　20F－80 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は上端約 1.3 m、下端 1.0 mである。底面は平らで、深さは確認面から 65cm である。南西端の床面には幅 24cm × 42cm、深さ 10cm の小ピットが掘られている。覆土には多量のロームが含まれる。

１～７は胴部の破片である。縄文を地文とし、沈線間は磨消される。加曽利Ｅ３式と考えられる。

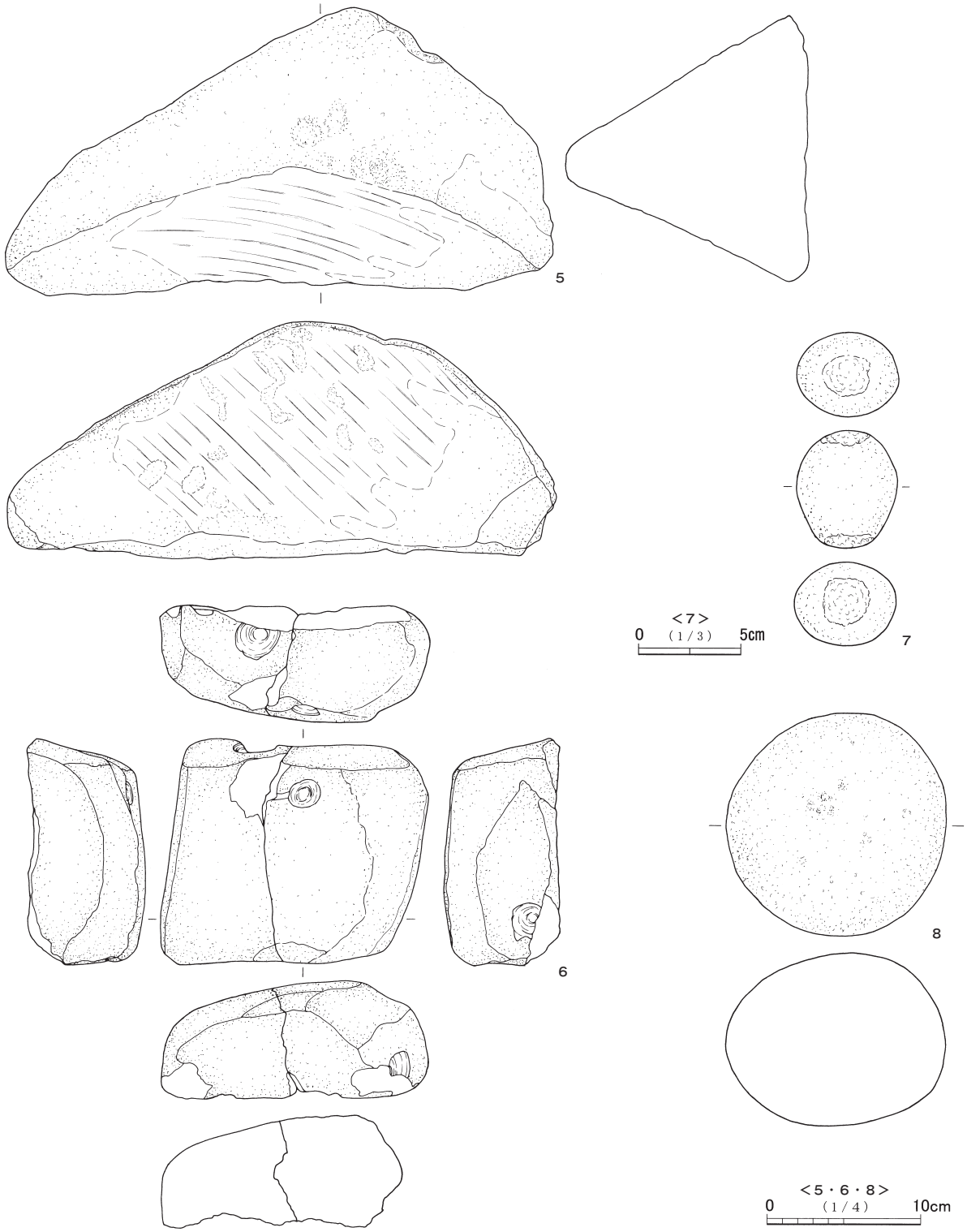
（1）SK－003（第９図、図版７・10）　21E－24 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は上端 1.96 m× 2.11 m、下端 1.26 m× 1.34 mである。底面は平らで、深さは確認面から 1.24 mである。壁は底面から約 40cm の高さのところで、若干すぼまる。覆土には多量のロームが含まれる。



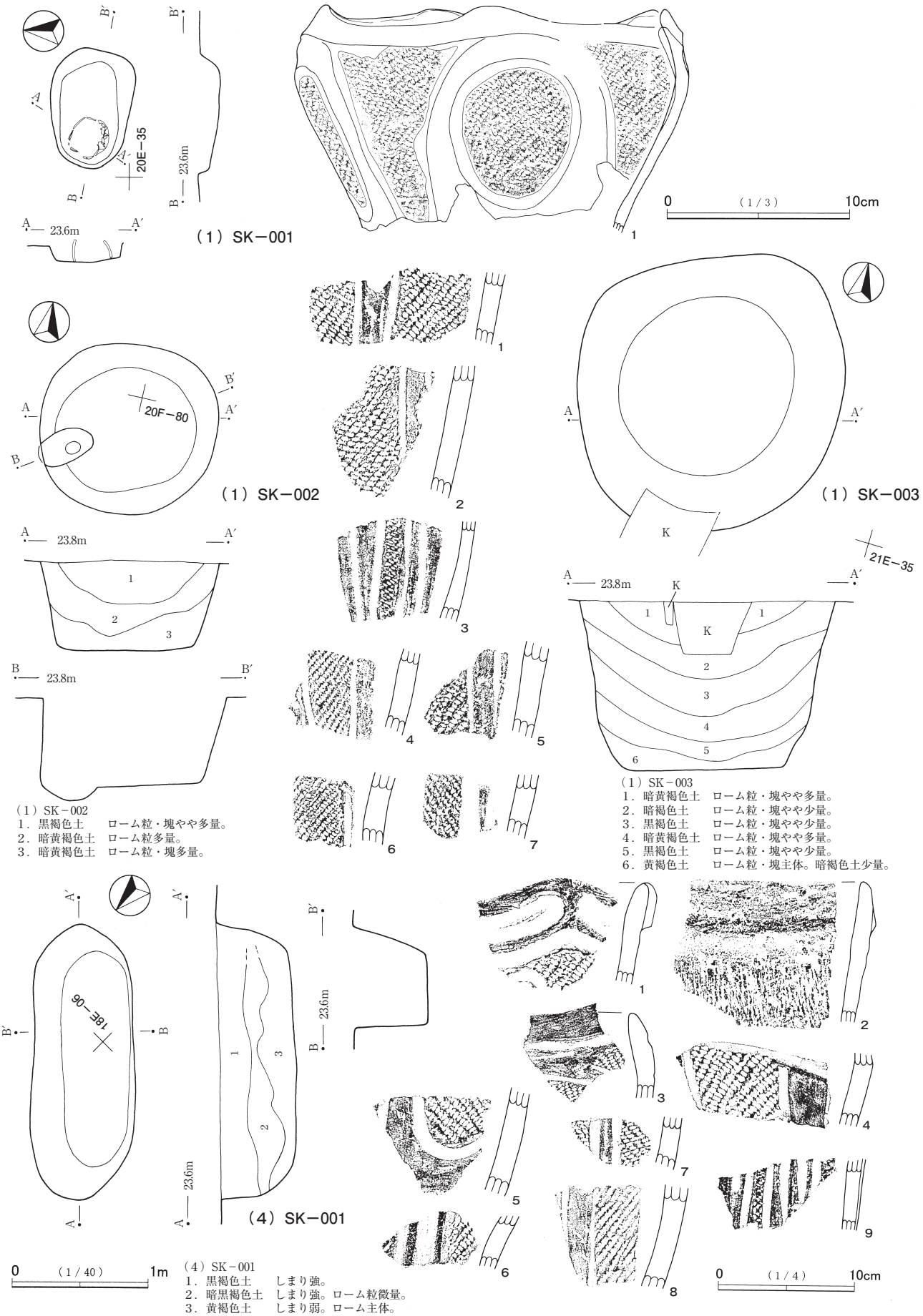
第７図　（1）SI－001（1）

１～３は口縁部および頸部の破片である。１は波状口縁を呈し、隆帯によって意匠が施されている。２は無文の口縁部を折り返しており、胴部は櫛状工具による条線が付けられる。４～９は胴部の破片である。垂下する沈線間に磨消しや隆帯が施される。

（４）SK－001（第９図、図版８） 18E－06 グリッド周辺に位置する。平面形態は北西から南東方向に長



第８図 （１）SI－001（２）

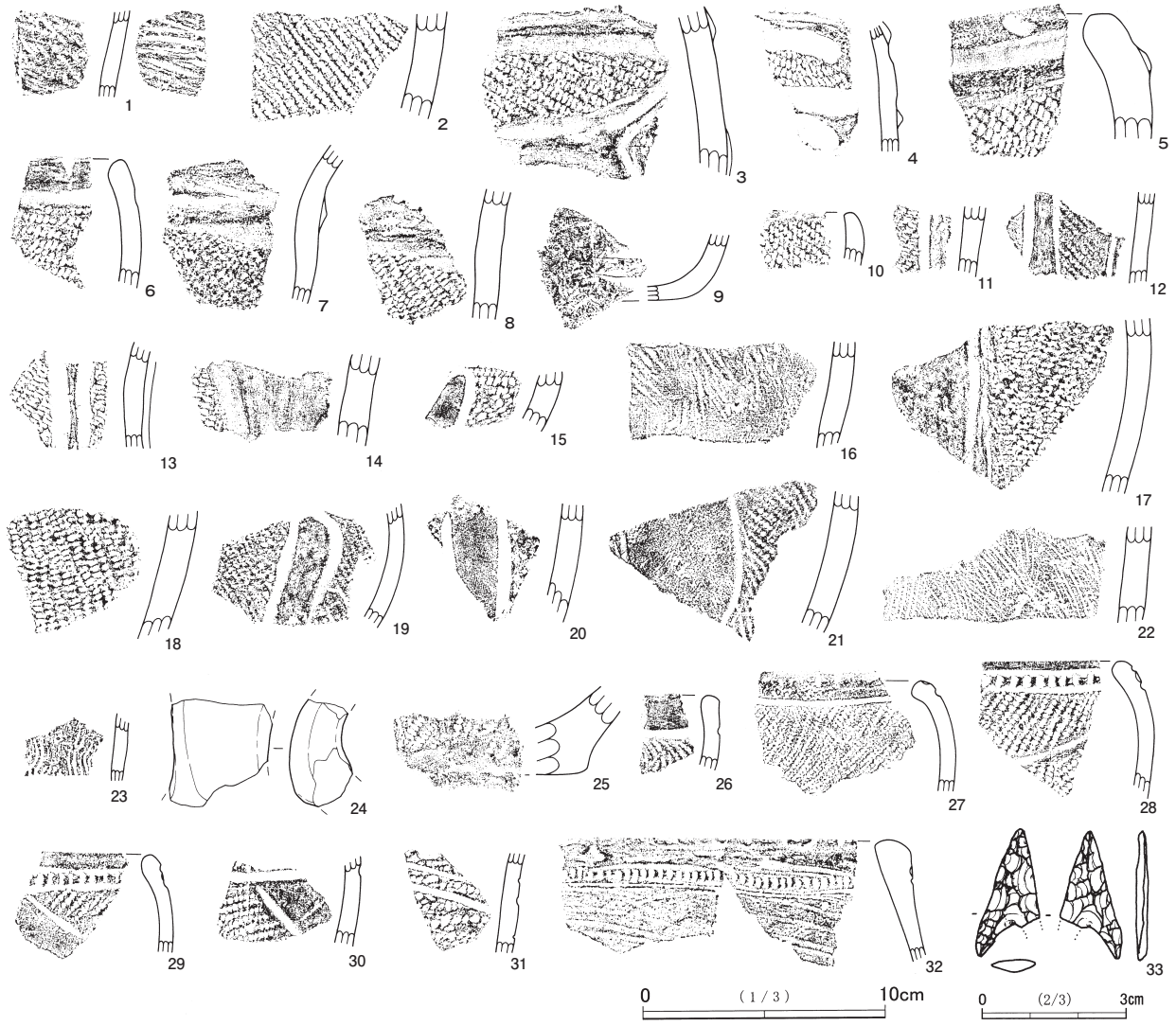

（1）SK－001
20E－35
23.6m
0 （1／3） 10cm
（1）SK－002
20F－80
23.8m
（1）SK－003
21E－35
K
（1）SK－002
1．黒褐色土　ローム粒・塊やや多量。
2．暗黄褐色土　ローム粒多量。
3．暗黄褐色土　ローム粒・塊多量。
（1）SK－003
1．暗黄褐色土　ローム粒・塊やや多量。
2．暗褐色土　ローム粒・塊やや少量。
3．黒褐色土　ローム粒・塊やや少量。
4．暗黄褐色土　ローム粒・塊やや多量。
5．黒褐色土　ローム粒・塊やや少量。
6．黄褐色土　ローム粒・塊主体。暗褐色土少量。
18E－06
23.6m
（4）SK－001
0 （1／40） 1m
0 （1／4） 10cm
（4）SK－001
1．黒褐色土　しまり強。
2．暗黒褐色土　しまり強。ローム粒微量。
3．黄褐色土　しまり弱。ローム主体。

第９図　土坑＜縄文時代＞

い楕円形である。長軸の方位はＮ－43°－Ｗ、規模は上端で長軸 2.0 m、短軸 74cm、深さ 57cm である。覆土最下層はローム主体、最上層はしまりの強い黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

3　遺構外出土遺物（第 10 図、図版 10）

1 は早期後半の条痕文系の土器で、裏面に貝殻の腹部を用いた条痕文が施される。2 は胎土に雲母を含む縄文地文の土器で、阿玉台Ⅳ式と考えられる。3 ～ 25 は加曽利Ｅ3 式を主体とする時期と考えられる。3 ～ 8 は口縁部から頸部の破片である。隆帯や沈線による意匠が施される。9 は底部は破片である。10 ～ 20 は胴部の破片で、垂下する沈線間に磨消しが施される。22・23 は条線が施文される。24 は口縁の把手部分である。25 は底部破片で、下位まで LR 縄文が施される。26 ～ 31 は加曽利Ｂ式に属すると考えられる。26 ～ 30 は内湾する口縁付近の破片である。31 は胴部破片で粗い縄文を地文に沈線が施される。32 は口唇部が肥厚する紐線文の口縁破片で、安行式に属すると考えられる。33 は流紋岩製の石鏃である。凹基無茎鏃で、片脚を欠損している。長さ 25mm、幅 13mm、厚さ 3 mm、重量 0.5 g である。



第10図　遺構外出土遺物＜縄文時代＞

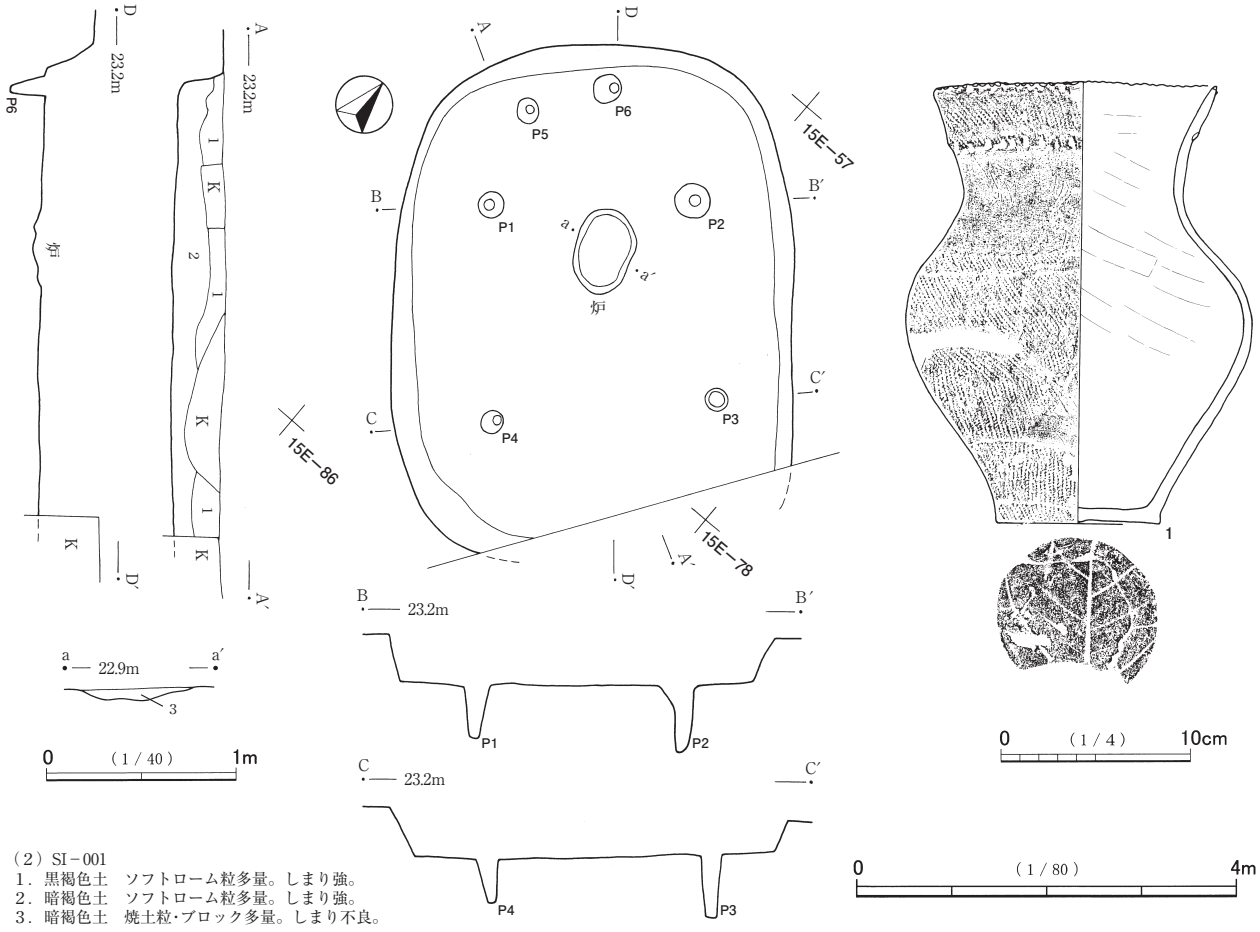
第３節　弥生時代・古墳時代

当該期の遺構は竪穴住居跡７軒で、分布は奈良・平安時代の遺構とほぼ重なり、南北に長い調査対象範囲の北半分に集中する。時期は弥生時代後期のものが主体である。古墳時代前期の竪穴住居跡は２軒であるが、その内の１軒（（５）SI－003）は部分的な調査のため時期は確実ではない。なお、印西市教育委員会が事前に調査した同一遺構については、図面上で合成した平面図を作成し掲載している。

１　弥生時代

（２）SI－001（第 11 図、図版２・11）　15E－77 グリッド周辺に位置する。南東側隅が大きく撹乱されて遺存しない。平面形は隅丸方形で、主軸方位はＮ － 39° － Ｗ、規模は推定主軸長 5.0 m、幅 3.8 m、深さは約 50cm である。床面は平坦で、周溝はめぐらない。壁はどの位置もしっかりと立ち上がる。４本の主柱穴と北西壁際に２基の小規模なピット（P5：深さ 21cm、P6：深さ 35cm）が検出された。主柱穴 P1 は直径 27cm、深さ 55cm、P2 は直径 40cm、深さ 72cm、P3 は直径 22cm、深さ 66cm、P4 は直径 23cm、深さ 45cm である。P1 と P2 の中心間の距離は 2.15 m、P2 と P3 の中心間の距離は 2.12 m である。床面中央やや北側に偏った位置に炉が付設される。炉の平面は楕円形で、規模は長軸 90cm、短軸 60cm、床面からの深さ約７cm で、底面は平坦である。炉の覆土には多量の焼土が含まれ、炉の底部は赤褐色に強く被熱している。

遺物の出土は少なく、実測した個体以外はほとんど接合できなかった。弥生時代後期の甕の胴部破片が主体であるが、縄文土器と土師器が数片含まれる。



（２）SI－001
1．黒褐色土　ソフトローム粒多量。しまり強。
2．暗褐色土　ソフトローム粒多量。しまり強。
3．暗褐色土　焼土粒･ブロック多量。しまり不良。

第11図　（２）SI－001

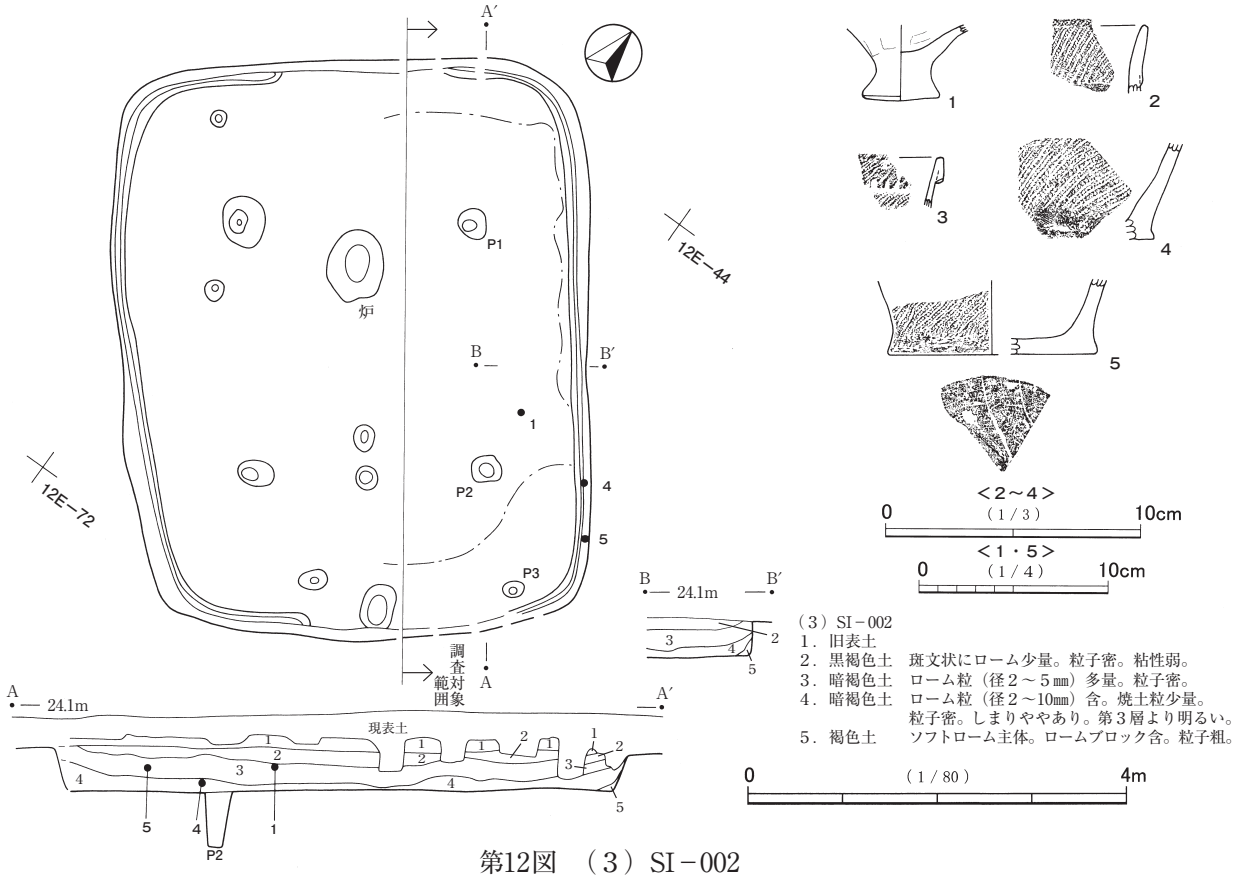
１は住居跡覆土中から出土した甕形土器で、約 80％の遺存である。頸部は緩やかに外反し、肩部が張る形状である。口径 14.8cm、底径 8.6cm である。口縁部は折り返しの二重口縁で、附加条縄文が施文される。口縁部下端は半円形の細い棒状工具、口唇部は縄文原体による刻みが施される。貼り瘤はみられない。頸部は丁寧なナデによる無文帯で、胴部は附加条縄文が底部ぎりぎりまで施される。内面は丁寧なナデ調整である。底面には木葉痕がみられる。胎土には白色微砂粒がやや目立ち、焼成は良好である。色調は内外面ともオリーブ褐色である。

（３）SI－002（第 12 図、図版３・11）＜印西市：第８地点１号住居・第９地点５号竪穴住居跡＞

12E－53 グリッド周辺に位置する。今回は約 1/4 の部分的な調査であったが、残りの部分はすでに２回にわたり印西市教育委員会により発掘調査されている。平面形は隅丸方形で、主軸は N － 37° － W、規模は主軸長 5.9 m、幅 4.84 m、確認面からの深さ 46cm である。全体で４本の主柱穴のほかに小ピット６基、南東壁沿いに入口ピットが１基検出された。周溝は一部を除いて、ほぼめぐる。また、今回の調査区では床面に広範囲の硬化面が確認された。炉は中央やや北西寄りに付設される。

遺物の出土は少量で、ほとんど接合できない小破片である。弥生時代後期の附加条縄文の個体片が目立ち、無文土器も一定数出土した。印西市教育委員会分の調査区でも無文の壺形土器が出土している。

１は高坏または台付甕のミニチュアである。脚部は内実につくられる。底径 4.1cm である。内外面とも被熱による剥離が著しい。胎土に白色微砂粒が目立ち、色調はにぶい褐色である。２・３は甕の口縁部破片で、附加条縄文の施された折り返しの二重口縁である。口唇部にも縄文が施文され、３には折り返しの下端部端に棒状工具による刻みが施される。４・５は甕の底部片で、外面に附加条縄文が施される。４の胎土には白色微砂粒が多量に含まれる。内面にはススが付着する。５は復元底径 11.0cm で、底面には、木葉痕を残す。被熱により内面が剥落している。色調はにぶい黄褐色である。

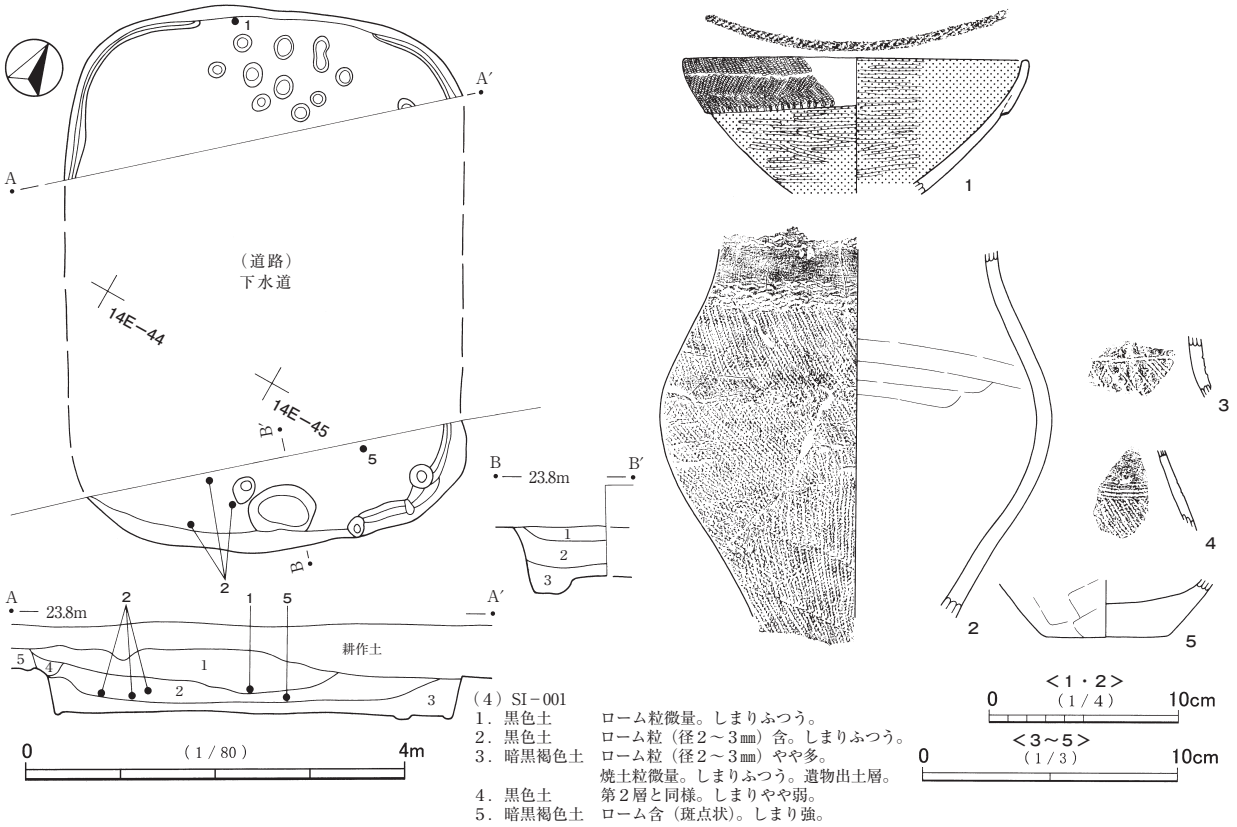


第12図　（３）SI－002

（4）SI−001（第13図、図版4・11） 14E−34グリッド周辺に位置する。（4）と（5）地点の調査で竪穴住居跡北端と南端部分を調査した。中央部の大半は下水道管埋設のため深く広く掘削されており調査不能の状態であった。遺構番号は（4）SI−001とし、年度が変わって（5）地点での調査でも同番号のままとした。平面形は隅丸方形で、主軸はN − 58° − W、規模は主軸長5.42 m、推定幅4.1 m、深さは確認面から35cm ～ 40cmである。壁面の立ち上がりはしっかりとしている。周溝は浅く、存在しない部分もある。調査範囲内では柱穴、炉跡は検出されなかった。床面には浅く小さなピット状の落ち込み（直径15cm ～ 30cm、深さ5 cm）が複数検出された。また、床面全体はロームブロックを主体としたしっかりした貼床である。住居跡覆土は黒色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

調査範囲が狭いため遺物量は総じて少ない。ほとんどが弥生時代後期と考えられる細かい縄文が施文された破片で、土師器・須恵器小破片が数点混じる。

1は内外面とも赤彩された鉢形土器の破片である。口唇部にLR縄文、折り返し口縁部に羽状縄文、下端に連続刻みが施される。他は内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキ調整である。胎土には白色針状物質を含む、各種微砂粒が多量にみられる。2は甕形土器の頸部から胴部約50％の破片である。胴部中位が強く張る形状である。肩部にススが多く付着する。頸部は中央部を除いてS字結節文が多条施文される。胴部には細かい附加条縄文が下位ほど重複して施文される。内面は横方向の強いヘラナデが主体である。胎土には各種微砂粒が微量含まれ、雲母細粒もみられる。3・4は薄手の小破片である。胎土に白色微砂粒が目立つ。3は細沈線による斜格子文、4は横方向の沈線の下に附加条縄文が施される。5は底部破片である。底面、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。被熱のためか器面が赤黒い色調である。



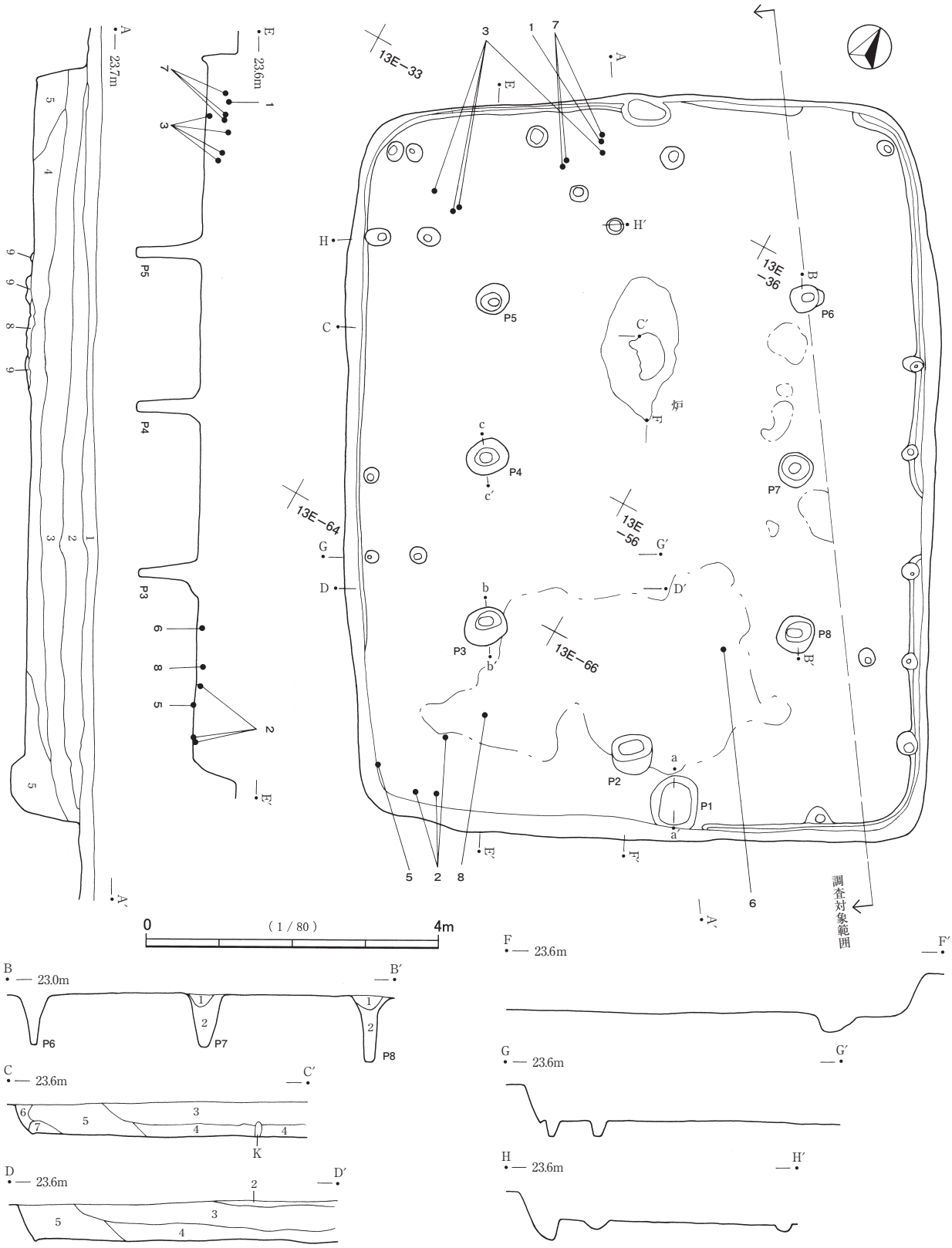
第13図　（4）SI−001

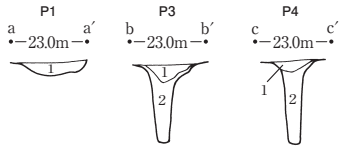
（4）SI−002（第 14・15 図、図版５・11）＜印西市：第９地点６号竪穴住居跡＞

13E−56 グリッド周辺に位置する。今回の調査は竪穴の南西側のほぼ８割で、残り２割は印西市教育委員会が平成 14 年に発掘調査を実施している。平面形は隅丸方形で、主軸はＮ − 8° − E、主軸長 9.9 m、幅 7.72 m、深さは確認面から 70cm ～ 75cm、床面積は 74.12㎡の巨大な竪穴である。中央やや北寄りに大形の炉跡がある。規模は、赤褐色に被熱した炉中心部で 63cm × 50cm、周辺の被熱によりボロボロになった範囲は 1.97 m × 1.06 mで、深さは周囲の床面から最大で約 10cm である。主柱穴は６本で、住居長軸に平行して３本×２列に配置される。長軸方向の間隔は等間隔で、深さ・掘り方もほぼ同じ規格である。それぞれの柱穴の平面形は短軸方向に長い長方形であり、板状に加工した柱材を使用していた可能性がある。壁周溝に沿うように内側に浅いピットが連続する。壁周溝は掘り込みが浅く不明瞭で、確認できない部分もある。南側に出入口ピットを設けており、その周辺の床は広範囲に硬化し、同様な硬化面が炉跡東側に点在する。覆土は黒色土が主体である。

遺物は、北側で覆土中層から、南側で床面直上からの出土が多いが、規模の割に遺物量は少量である。ほとんどが細かい縄文のある弥生時代後期の土器片で、結節文や羽状構成の文様がみられる。印西市教育委員会の発掘部分では無文土器片が含まれており、古墳時代前期の可能性が示唆されていたが、出土位置は高く、今回調査範囲内では古墳時代前期の資料はハケ目の施された甕破片が数点で、無文土器も少ない。

１は甕の上半部で、口径 17.9cm である。口縁は折り返しの二重口縁で、細かい RL 縄文が施文される。口縁端部も面取り状に同縄文が施される。頸部は広く無文帯となり、肩部から胴部は口縁部と同じ RL 縄文が広く横位に施文される。内面はヘラナデ調整である。色調はにぶい橙色で、焼成は良好である。胎土には白色微砂粒が微量含まれる。器厚は薄く、器面はややざらつく。２は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、接合はしなかったが、同一個体を図上復元した。口縁は折り返しの二重口縁で、復元口径 17.5cm である。口縁部と端部は RL 縄文が施文される。折り返し口縁の下端部は棒状工具による連続刻み、頸部は縦方向のヘラミガキ調整による無文帯としている。胴部は横位３条のＳ字状結節文の下に RL 縄文が施文される。内面はヘラナデおよびヘラミガキ調整である。胎土には各種微砂粒が少量含まれる。器厚は薄手で外面はススが付着し、色調は黒褐色を呈する。３は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、復元口径 18.0cm である。口縁部が胴部径より大きく開きながら立ち上がる。口唇部は縄文原体押圧による刻みが施される。口縁部は横位の RL 縄文の上に棒状工具で２段の横位連続刺突文と６cm 間隔で低い貼り瘤状の突起が付けられる。頸部の無文帯をはさみ、胴部は口縁部と同様の文様が全体に施文される。内外面とも器面がざらつき、外面にはススが付着する。胎土には白色微砂粒が微量含まれる。４～６は甕の底部片と思われる。底径は４が 6.2cm、５が 4.5cm、６が 6.5cm である。５・６の外面には附加条縄文が施文される。いずれも底面には木葉痕が残る。７は大型の壺の破片である。胎土に１mm ～２mm の白色砂粒や石英粒が極多量に含まれ、内面が著しく剥離している。口縁端部は遺存しないが、口縁部は横方向の RL（直前段反撚）縄文が施文され、その上に棒状工具による連続刺突文が１条めぐる。一部貼り瘤状の突起がみられる。その下は無文帯になり、最もくびれる頸部にも横方向の RL（直前段反撚）縄文帯、その下にまた無文帯をはさんで肩部にも横方向の RL（直前段反撚）縄文が施文される。８は底部片で、底径は 12.4cm である。底面に木葉痕がみられる。胎土には白色砂粒・石英粒が極多量含まれ、内面はボロボロで、強く被熱している。これらの特徴は７の壺破片に酷似するが、器面の RL 縄文の節がやや大きく、鮮明に施文されているため同一個体とは断定できない。





（4）SI−002

1．明褐色土　表土。
2．暗褐色土　明褐色土含。ローム粒（径1～3㎜）少量。炭化粒子・焼土粒子微量。
3．黒褐色土　ローム粒（径1～3㎜）・炭化粒子・焼土粒子微量。
4．暗褐色土　ローム粒（径1～5㎜）・炭化粒子・焼土粒子微量。
5．淡暗褐色土　ローム粒（径1～5㎜）多量。
6．暗褐色土　褐色土中量。ローム粒（径1㎜）少量。
7．淡暗褐色土　ローム粒・ローム塊（径1～2㎝）含。しまり強。
8．暗黒褐色土　焼土粒・塊含。しまりあり。
9．暗黄褐色土　ローム粒・黒褐色土含。部分的に被熱。

(P1)
1．褐色土　ローム粒（径1～2㎜）多量。しまり弱。

(P3)・(P4)
1．褐色土　ローム粒（径1～2㎜）多量。しまり弱。
2．黄褐色土　ローム粒主体。しまり弱。

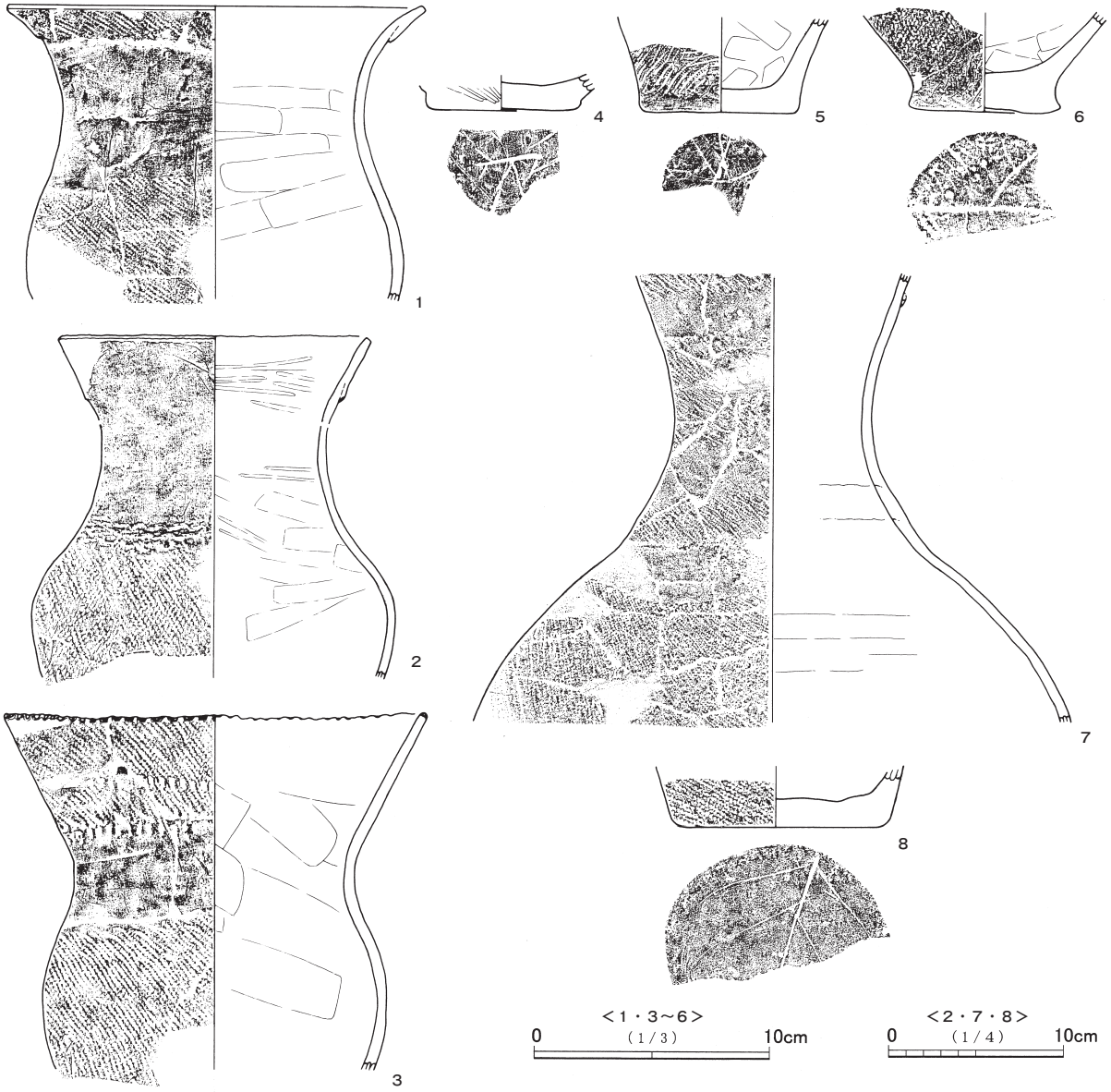
(P7)・(P8)
1．黒褐色土　ローム粒少量。
2．黄褐色土　ローム主体。しまり弱。

第14図　（4）SI−002（1）

（5）SI−002（第16図、図版6・11） 24E−50グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、主軸はN−45°−W、規模は主軸長4.9m、幅4.25m、床面までの深さ76cmである。周溝については確認できなかった。主柱穴は4本で、しっかりと深く掘り込まれる。壁際には小ピットが検出されたが、掘り込みは浅い。P5（深さ22cm）は位置的に出入口ピットと考えられる。壁はどの位置も明瞭でしっかりと立ち上がる。住居跡覆土は全体的にソフトローム粒を含み、部分的に焼土が多く含まれ、壁際にはロームブロックが目立つ。特に竪穴の中央やや北西寄りは第3層の下部のレベルで焼土がまとまって堆積していた。炉跡は竪穴中央より北西側に付設される。規模は長軸55cm、短軸50cm、床面からの深さ24cm、底面は平坦である。炉の覆土には多量の焼土が含まれる。

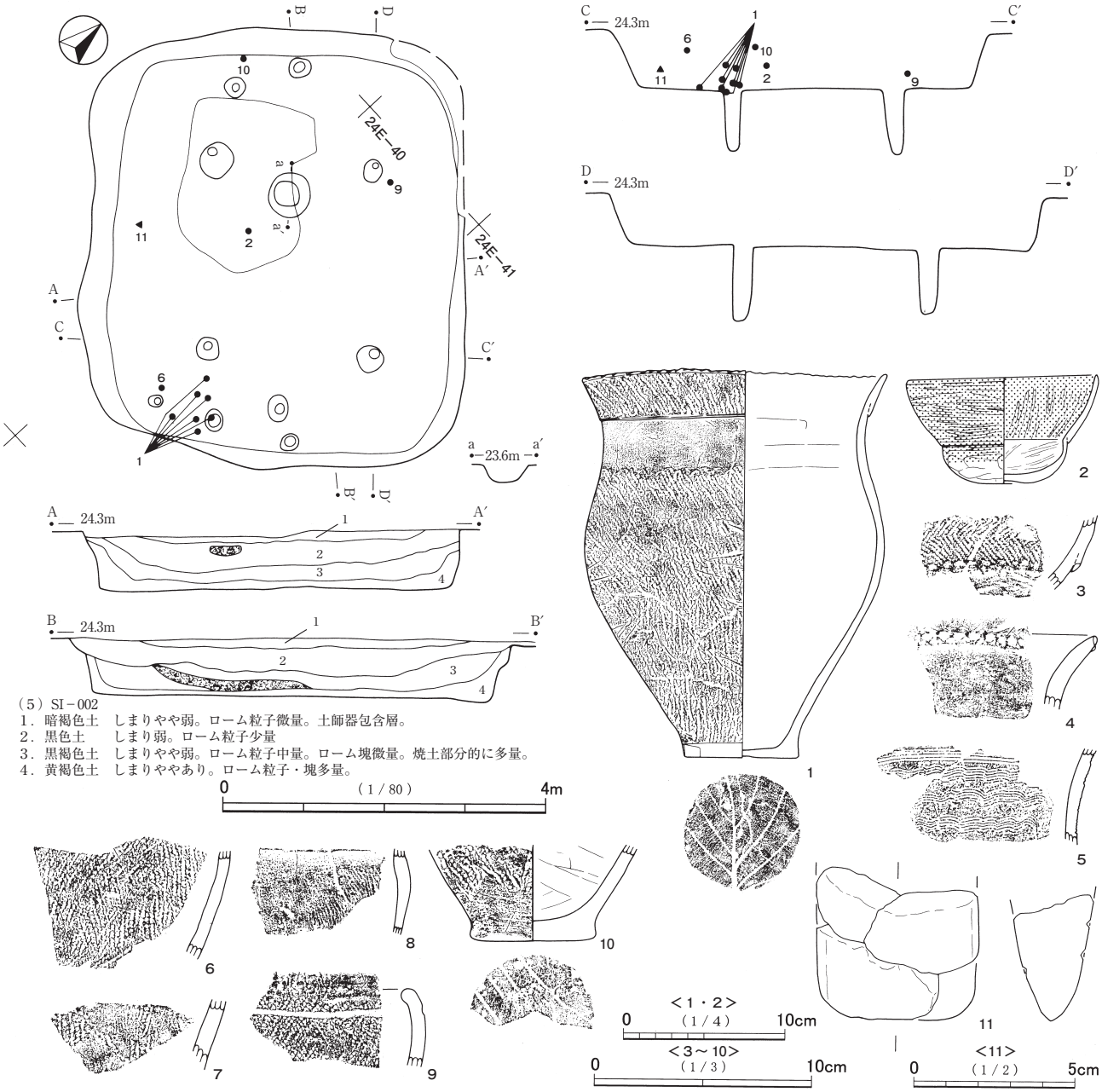
遺構の遺存はよく、掘り込みは深かったが、遺物量は少量である。まとまって出土した1と2以外は小破片で、接合もほとんどできないものである。ほとんどが附加条縄文の施された胴部破片である。わずかにS字結節文の施文された小破片も確認できる。

1は甕形土器である。遺存は良好で、口縁部を一部欠く。口唇部は縄文原体による斜め方向の刻みが施



第15図 （4）SI−002（2）

される。口縁部は折り返しの二重口縁である。口縁部と胴部以下は附加条縄文が施文され、頸部は無文帯である。内面は丁寧なナデ調整である。外面の特に肩部に多くススが付着する。２は口縁が大きく、緩やかに内湾し、胴部以下の占める割合が少ない坩形土器である。口縁部は内外面ともに赤彩される。口縁部と内面は丁寧なミガキ、胴部外面はヘラケズリ後ミガキ調整である。底面は中央部がくぼむ。薄手で焼成は良好である。覆土中層の焼土層上面の出土で、時期の下る資料である。３から９は破片資料である。３は口縁破片で、内外面ともに赤彩される。壺か鉢の破片かと考えられる。口縁は折り返しの二重口縁で、口縁部は羽状縄文、口縁部下端には縄文原体の先端で連続刺突文が施文される。内面が横方向のヘラミガキが施される。焼成はやや不良である。４は甕形土器の口縁部である。口唇部に刻みが施される。５は甕形土器の肩部破片と考えられる。胎土に白色微粒子が目立つ。５条１セットの櫛歯状工具による波状文が施文される。（５）SI－001 の覆土中の出土であるが、（５）SI－002 からの流れ込みと考えた。６は甕形



第16図　（５）SI－002

土器の胴部下位部分の破片と考えられる。文様は重複して施文されるが、細かい縄文の節はまばらに施文されてみえる部分があり、直前段反撚の縄文かもしれない。胎土には白色微砂粒が目立つ。７は甕形土器の底部付近の破片である。まばらな縄文が確認できる。焼成は良好で硬質である。色調はやや白みを帯びる。８はハケ目の施された甕の肩部破片である。胎土が白く石英粒子が多量に含まれ、他に比べ明らかに異質で、東海産の可能性がある。９は口縁がやや内湾する鉢の口縁破片である。他の遺物と質感が異なり、器面がざらつく。口縁から体部はLR縄文、口縁部には横位の浅い沈線がめぐる。内面は丁寧な横方向のヘラミガキ調整である。縄文時代後期の混入と考えられる。10は底部破片である。縄文が施文される。胎土に砂粒が多量に含まれる。色調は白みを帯びる。底面に木葉痕がみられる。11は砂岩製の磨製石斧の刃部破片である。かなり風化し出土当初は１点で青みの強い色調であったが、現状では３分割され、器面は剥落し、青白い色調となっている。

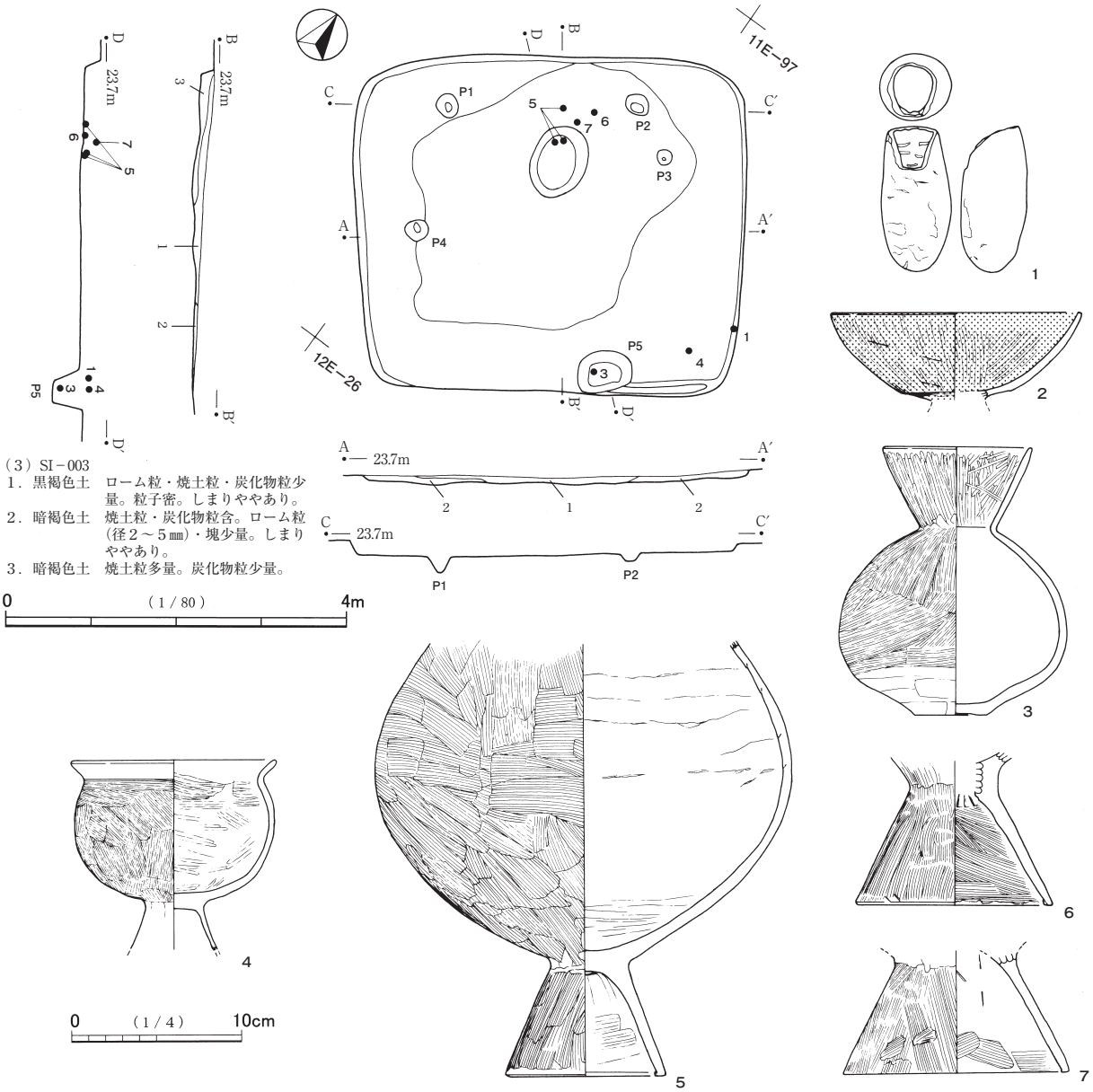
２　古墳時代

（３）SI－003（第17図、図版４・12）　12E－17グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸方形、主軸方位N－35°－W、規模は主軸長3.84 m、幅4.45 mである。遺構確認面から床面まで非常に浅く、最も深い北西側壁は20cm弱で、浅い南東側では壁の立ち上がりはほとんど確認できなかった。周溝は東側コーナー付近で一部検出された。柱穴状のピットは４本で、うち北西側壁面に平行するP1とP2が主柱穴と思われる。炉は住居中央より北西側に偏って付設される。炉跡の規模は長軸85cm、短軸62cmの楕円形である。炉跡を中心に硬化面が広がっている。南側壁面には浅く大きなピット(P5)があり、貯蔵穴の可能性がある。

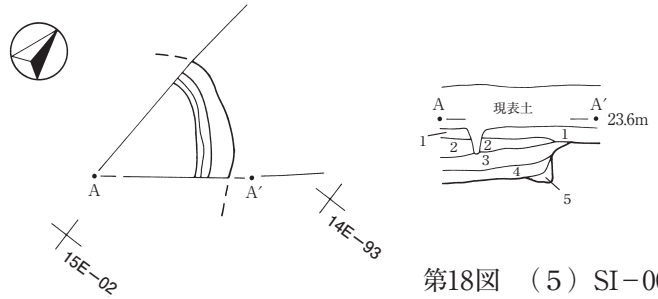
炉跡北側および貯蔵穴内から土器が出土した。１は小型の細長い袋状土器の完形品である。最大幅4.2cm、最大長8.4cm、開口部が径約３cm、下に切り開いて整形されている。下部は丸みを持ち自立はしない。内面には細い粘土紐接合痕が残るが、外面は丁寧なナデ調整である。色調は薄い褐色で、比較的硬質である。胎土は他の土器とほぼ同様である。特に使用痕は見当たらない。２は土師器高坏の坏部で、脚部との接合部で折れている。坏部下端に稜をもち、弱く内湾しながら立ち上がる。内外面とも丁寧なミガキ調整で、全面赤彩される。口径14.3cmである。内面は被熱のため器面が剥落気味である。３は貯蔵穴から出土した口縁端部がやや欠けるがほぼ完形の土師器坩形土器である。口縁は体部の大きさの割に短く直線的に開きながら立ち上がり、体部は下膨れ状の形態である。口径8.8cm、底径4.2cmである。口縁部内外面と胴部下半から底面は丁寧なヘラミガキ調整である。胴部上半はハケ目状の工具で弱くナデ調整が施される。焼成は良好で非常に丁寧な整形である。胎土には各種砂粒が含まれる。その中に白色針状物質が微量確認できる。４は土師器の小型台付甕で、台部はほとんど欠損している。口縁部は丸みを持って外反し、台部は緩やかに広がる。口縁部はヨコナデ、胴部は外面がヘラナデ、内面がハケ目状のヘラナデ、ミガキ調整である。器壁は薄手で、色調はにぶい黄橙色である。外面には全体的にススが付着する。復元口径は12.2cmである。胎土には微砂粒が微量含まれる。５は土師器台付甕で底部から肩部にかけての遺存である。底径9.4cmである。弱いハケ目状の調整が、外面全面に施される。胴部内面は横方向のヘラナデ調整が主体である。器厚は一定して薄い。色調は褐色、焼成は良好で硬質である。胎土には各種微砂粒が中量含まれる。６・７は土師器台付甕の台部である。６は底径11.4cmである。内外面ともハケ目調整、外面にわずかにススが付着する。７の復元底径は13.3cmである。外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラナデ調整である。色調はにぶい橙色で、焼成は良好で硬質である。

（5）SI−003（第 18 図、図版６）（５）地点の北側調査区の南西端の 14E−92 グリッド周辺で検出され、ごく一部の調査となった。全体の規模や形状は不明であるが、平面にやや丸みをもつため隅丸方形のコーナーに近い部分と推察される。確認面から床面までの深さは 40cm である。床面には周溝が検出された。

遺物は土器の小破片が 30 点ほどで、実測可能なものはない。１点の縄文土器を除き、薄手の土師器で、ハケ目のみられるものがあるため、古墳時代前期の可能性が高い。



第17図　（３）SI−003



（5）SI−003
1．黒色土　しまりやや弱。ローム粒子微量。
2．黒褐色土　しまりやや弱。ローム粒子少量。
3．黒褐色土　しまりやや弱。ローム粒子中量。
4．暗褐色土　しまりややあり。ローム粒子中量。
5．暗黄褐色土　しまりあり。ローム粒子多量。

0　（1／80）　2m

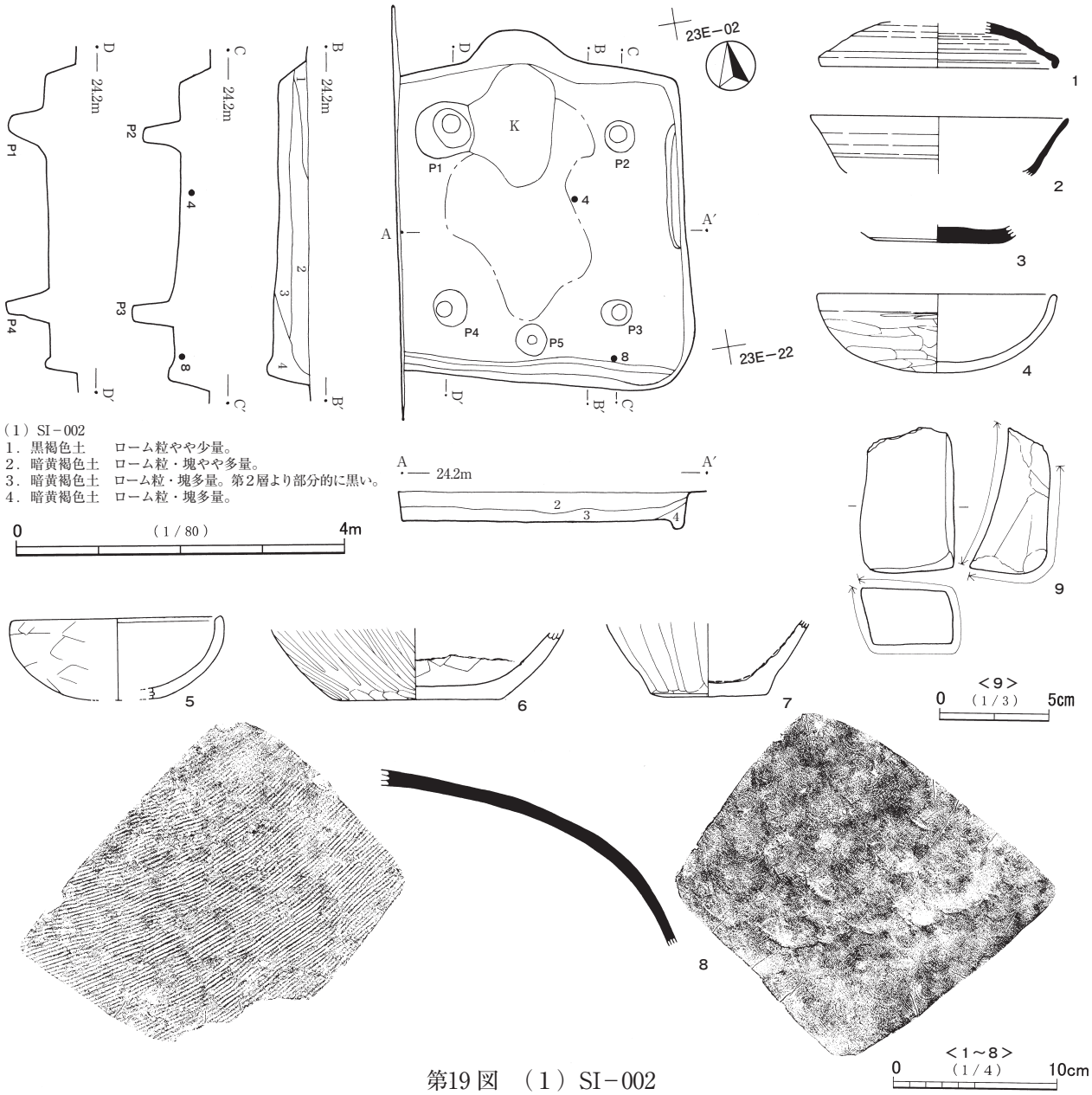
第18図　（５）SI−003

第４節　奈良・平安時代以降

南北に細長い調査区で、奈良・平安時代の遺構は、北側、中央および南側と大きく３地点に集中して分布する。北側の台地縁辺部で竪穴住居跡と掘立柱建物跡が、また、中央のわずか20ｍ四方の空間に竪穴住居跡と掘立柱建物跡が密集して検出された。南側は竪穴住居跡２軒に過ぎないが、台地先端ではないので、これより南にも竪穴住居跡が展開している可能性は高い。遺構は竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡２棟、ピット群１、土坑９基である。他に溝状遺構が４条検出されたが、時期の特定は困難である。遺物は土師器、須恵器を主体とし、土玉、瓦などの土製品と刀子などの鉄製品の破片が出土した。

１　竪穴住居跡

（１）SI－002（第19図、図版２・12）　23E－11グリッド周辺の事業地西端に位置するため、竪穴の西壁部分は調査対象範囲外である。平面形は方形で、主軸方位Ｎ－10°－Ｅ、規模は主軸長3.78ｍ、幅が推定3.7ｍ、深さは確認面から約40cmである。床面は全体的な後世の撹乱の影響で凸凹が生じているが、中央部分を中心に硬化面がみられる。カマド構築材はほとんど遺存せず、奥壁の掘り込みが北壁中央で確認でき



第19図　（１）SI－002

た。４本の主柱穴と南壁付近に出入口ピット（深さ 37cm）１基を検出した。主柱穴 P1 は幅 40cm、深さ 52cm、P2 は幅 30cm、深さ 50cm、P3 は幅 40cm、深さ 45cm、P4 は幅 63cm、深さ 45cm である。周溝は部分的に検出されたが、本来は全周していたものと考えられる。覆土はローム粒･塊が多く含まれるが、撹乱の影響もあり、人為的な埋め戻しかどうかは判然としない。

遺物の出土は少量で､実測個体を除くと 10 点ほどの土器片のみで､縄文時代中期の破片も３点含まれる。

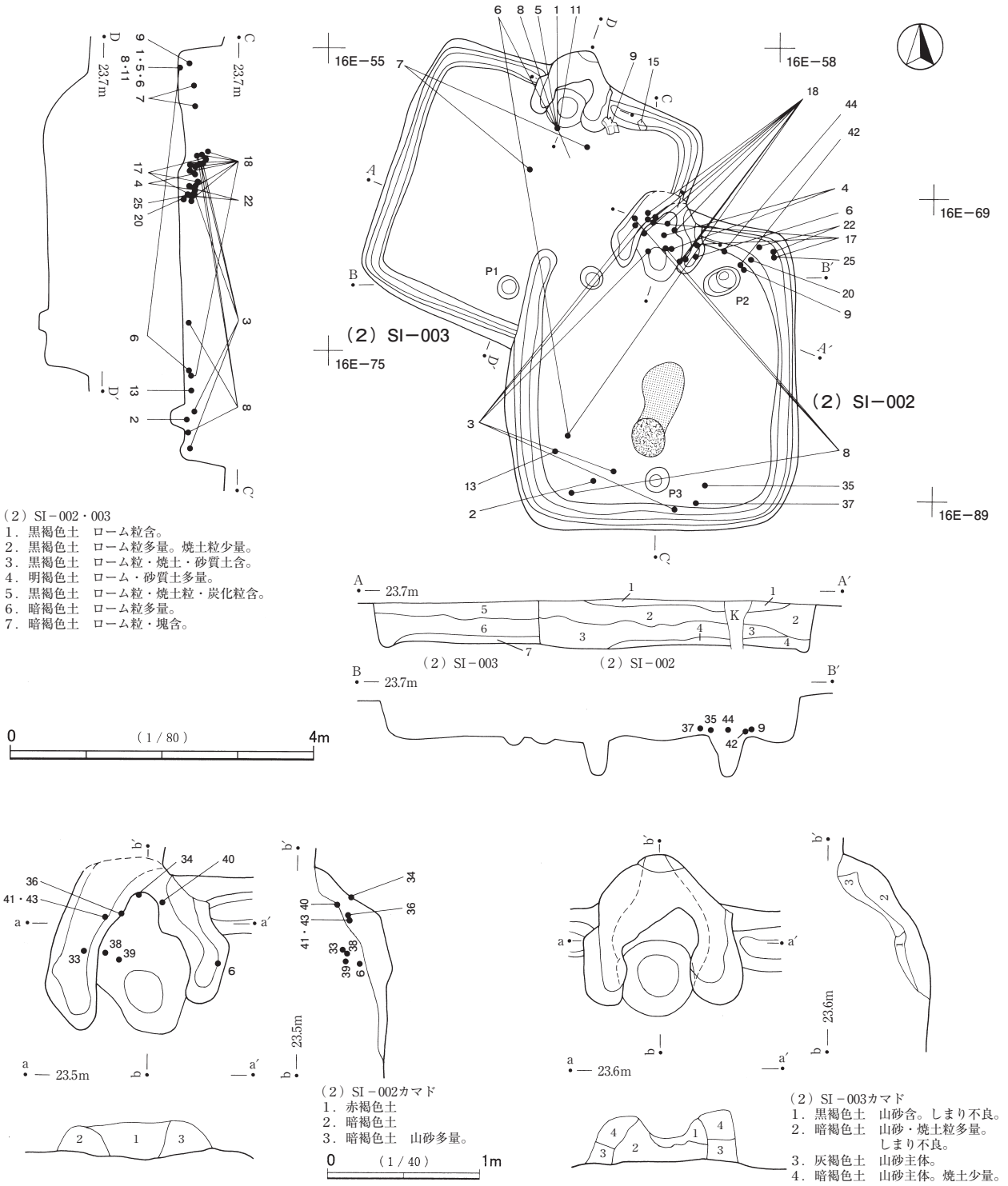
１は須恵器坏蓋の破片である。口縁部先端部が内側に垂直に折れ曲がる。口径は 14.1cm である。胎土は精緻で、断面の色調は白みを帯び、器面は薄い灰色である。焼成は良好で硬質である。２は薄手の須恵器坏の体部片である。胎土には白色砂粒が目立ち、雲母細粒は微量含まれる。復元口径は 15.7cm である。焼成はやや不良で、色調はにぶい黄褐色である。３は須恵器坏の底部片で、復元底径は 8.6cm である。焼成不良のため内外面とも器面が摩滅し、調整痕が不明瞭である。底面は一方向の手持ちヘラケズリ調整と考えられる。胎土には白色砂粒と雲母細粒が含まれる。４・５は丸底の土師器坏である。４は体部の一部が欠損するが本遺構では遺存が最も良好である。口径 14.5cm である。胎土中には各種微砂粒が多量に含まれる。外面は荒いヘラケズリ調整の痕跡が明瞭で､丸底に仕上げている。内面は横ナデが下位まで及ぶ。内外面とも被熱し、外面にやや変色した部分があり、本来は赤彩されていた可能性がある。口縁端部内面は使用のためか擦れている。５は口縁部が弱く内湾し、端部は内削ぎ状に面をもつ。全体の約 10％の遺存である。体部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はミガキと考えられる。被熱のため器面が黒みを帯びる。焼成はやや不良である。６は土師器の常陸型甕の底部である。底径は 10.1cm と大型品であると考えられる。外面は底部も含め特徴的なヘラミガキ調整である。内面には一部粘土紐接合痕を残し、ヘラナデ調整が施される。胎土中には白色･灰色大砂粒が目立ち､雲母細粒も含まれる。焼成は良好で､色調は黄褐色である。７は土師器甕の底部で、底径 7.0cm である。底部からの立ち上がりは比較的急で、細身の甕と考えられる。胎土には白色砂粒や石英粒を主体に各種砂粒が多量に含まれる。色調はにぶい黄褐色である。内面は被熱により著しく剥離し、外面は縦方向の粗いヘラケズリ調整である。底面も荒いヘラケズリで、平らではなく安定感がない。８は須恵器大甕の肩部片である。外面は平行叩き目、内面は同心円状の当て具痕がみられる。胎土には砂粒が少ない。焼成はやや不良で、若干軟質である。色調は外面が灰色、内面が薄い灰色である。９は凝灰岩製の砥石で図の上部先端が折れて欠損しており、その面を除きすべての面が摩滅している。最大長 6.5cm、最大幅 4.3cm、重量 117.1 g である。

（２）SI－002（第 20 ～ 22 図、第２表、図版３・12・13） 16E－77 グリッド周辺に位置する。（２）SI－003 と北西側で一部重複し、（２）SI－002 が新しく、（２）SI－003 が埋まってから構築されている。平面形は方形で主軸方位はほぼ南北、規模は主軸長 3.9 m、幅 3.67 m、確認面からの深さ約 53cm である。柱穴はカマドの両脇に１対、カマドと対面の壁寄りに出入口ピットが１基検出された。周溝は、遺構重複部で不明瞭になっているが､カマド部以外全周していたものと判断される。北壁中央にカマドが付設される。南寄りの床面上には被熱面と山砂の分布がみられた。覆土には多量のローム粒・塊が含まれる。

遺物は多量に出土したが、接合率は低く、完形に近く復元できたものは少ない。坏類はロクロ土師器破片が主体で、須恵器は非常に少ない。甕類は薄手の中型の破片が目立つ。須恵器甕は茶褐色系の須恵器が半数程度含まれる。

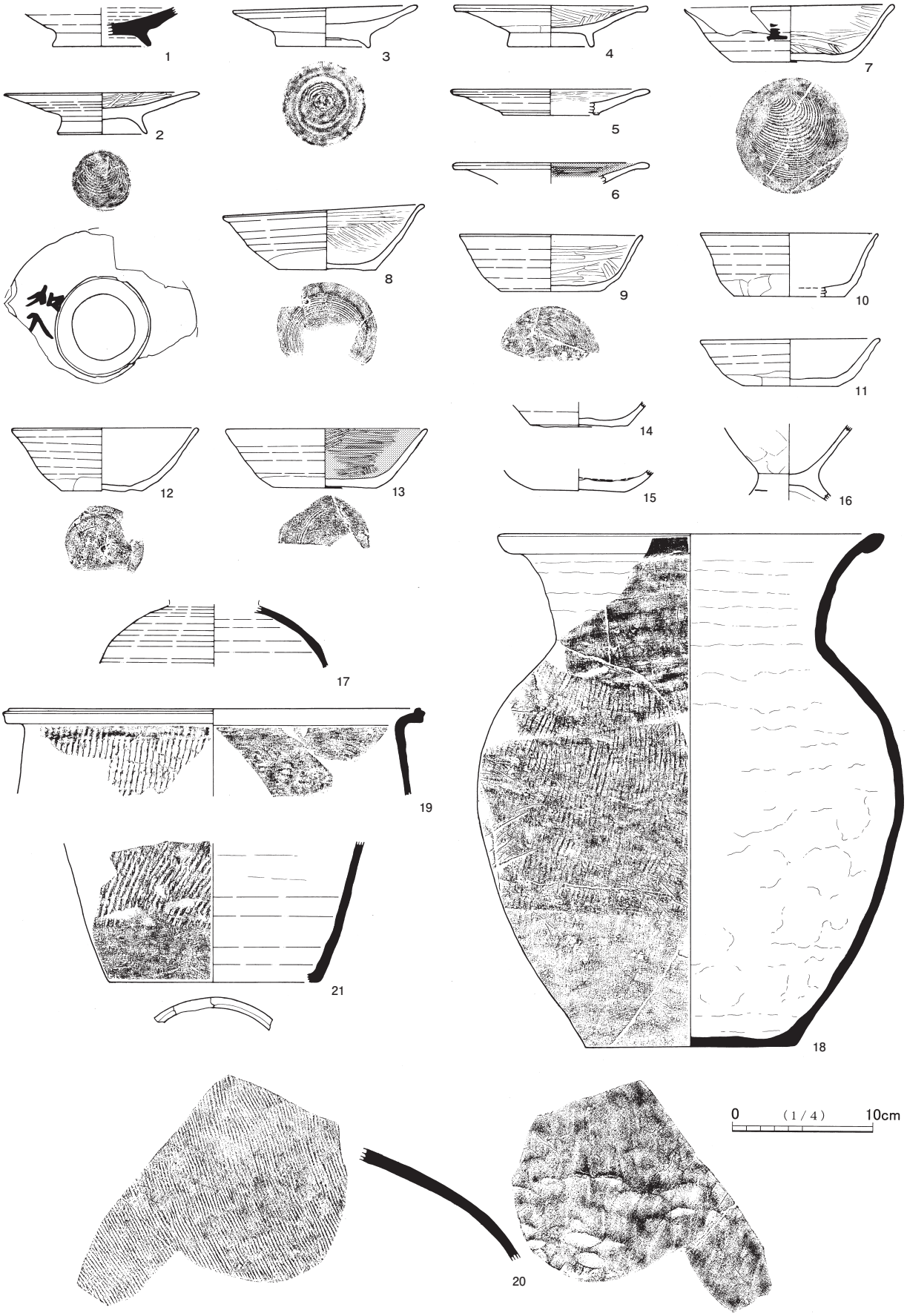
１は須恵器高台付坏の底部片で、復元高台径は 7.0cm である。胎土には多量の白色砂粒が含まれる。胎土は粗くつくりもやや粗雑な印象である。焼成はやや不良である。色調は薄い灰色である。２～５はロク

ロ整形の土師器高台付皿である。皿内面はすべてヘラミガキ調整である。２は全体の約５割の遺存で、復元口径 14.0cm である。底部は回転糸切り離し後立ち上がりをヘラケズリし、その上に高台を接合している。体部外面に墨書で薄く「加入」の文字が読み取れる。胎土には各種微砂粒が多量に含まれ、焼成は良好である。３は口縁部を一部欠き、約９割の遺存で、口径 13.2cm である。内面がボロボロに剥離している。胎土には各種微砂粒が多量含まれ、器面はざらつく。底部には回転糸切り離し後、短い高台を接合する。全体に被熱し、色調は橙色である。４は全体の６割の遺存である。底部には回転糸切り後、高台を接



第20図　（2）SI−002・003

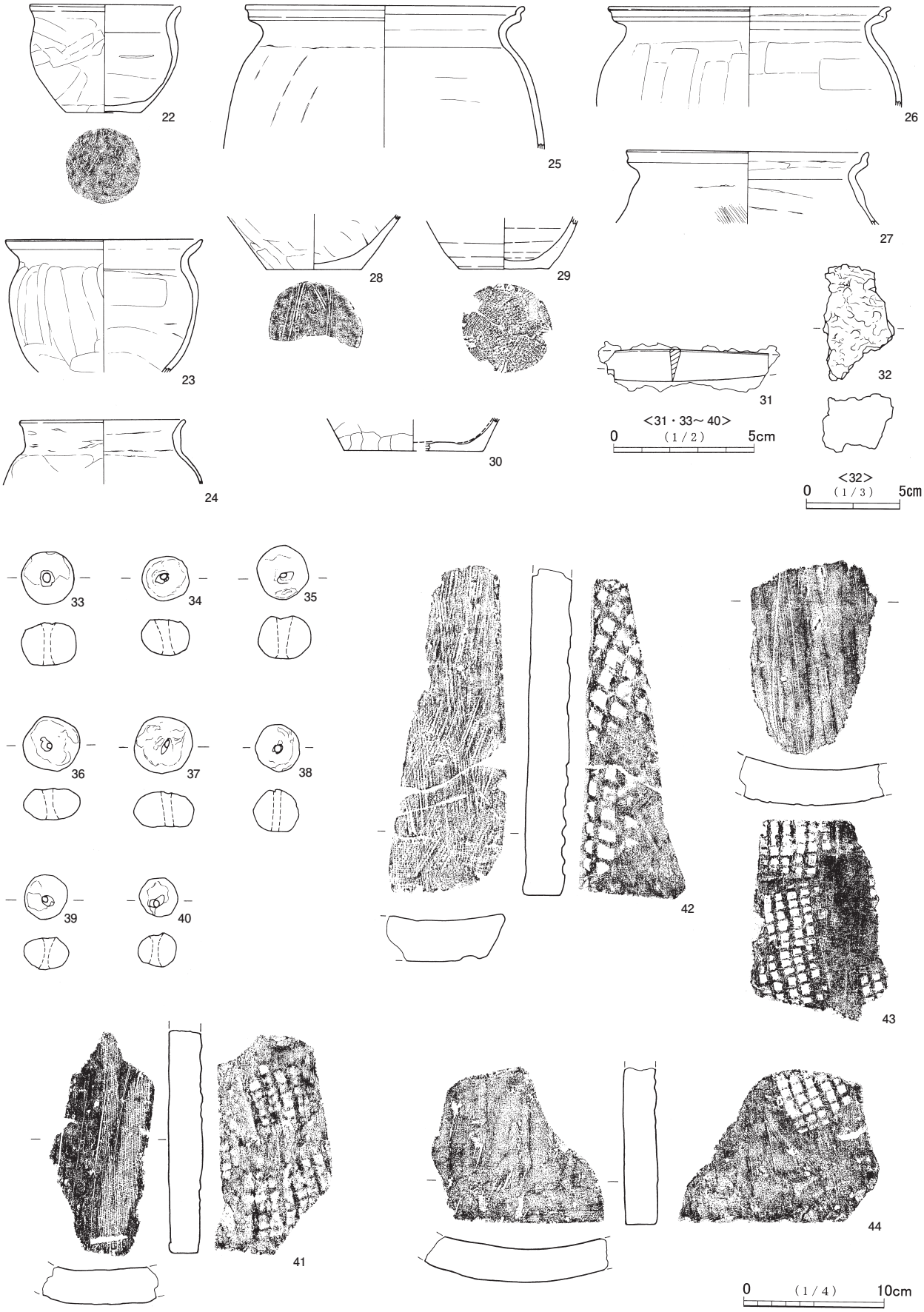
合する。器面は被熱のためかざらつく。胎土には各種微砂粒が含まれる。５は小破片で、法量は復元口径14.2cm、高台径6.8cmである。高台は２mmの高さである。胎土には白色微砂粒がやや目立つ。６は内面黒色処理された土師器皿の口縁部破片である。復元口径は13.6cmである。内面は丁寧なヘラミガキ調整である。７～15はロクロ整形の土師器坏である。７は全体の７割の遺存である。底径が大きく、口縁も大きく開く。口縁端部が少し肥厚する。法量は口径15.0cm、底径8.3cmである。底面は回転糸切り後、周囲と体部下端を回転ヘラケズリ調整している。内面はヘラミガキ調整である。体部外面に「主」と墨書される。胎土中には各種砂粒と赤褐色スコリア・雲母細粒が少量含まれる。焼成は良好で、硬質である。色調はにぶい橙色である。８は７割の遺存で、口径14.2cm、底径7.0cm、９は３割の遺存で、復元口径13.0cm、底径7.0cmである。８・９の底部切り離しや調整は７と同様で、胎土や色調も類似する。10の法量は復元口径12.6cm、底径6.8cmである。底面および体部下端は手持ちヘラケズリ調整である。内面は被熱により著しく荒れている。胎土には白色砂粒とスコリアが微量含まれる。11は７割の遺存で、口径12.8cm、底径6.8cmである。底面と体部下端は回転ヘラケズリ調整である。胎土中には赤褐色スコリアと金雲母微細粒が少量含まれる。全体的に丁寧なつくりである。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。12は全体の４割の遺存で、復元口径12.9cm、底径5.8cmである。底面は凹凸があり、底部切り離し後、体部下端を手持ちヘラケズリし、内面を含めて指でナデ調整している。胎土は７～９と同様である。焼成は良好で、色調は橙色である。13は接点がないため、図面上で破片を合成して作図した。復元口径は13.6cm、底径は7.6cmである。一部墨書がみられる。内面は丁寧なヘラミガキ調整で、炭素吸着による黒色処理がされる。外面は回転糸切り離し後手持ちヘラケズリ調整である。外面の色調はにぶい黄橙色で、器面がやや摩滅している。胎土中には各種微砂粒が微量含まれる。14・15は底部片で、14の復元底径は7.0cmである。焼成がやや不良で、器面が摩滅気味である。底部は回転糸切り離し後、周囲および体部下端を回転ヘラケズリ調整しているとみられる。胎土には雲母細粒など各種微砂粒が少量含まれる。15の底径は6.5cmである。底部および外面体部下端は手持ちヘラケズリ調整である。内面はミガキが施され、黒色処理されていた可能性がある。内外面とも被熱により器面が著しく剥離している。胎土には各種砂粒が少量含まれる。色調はにぶい橙色である。16は小型の高坏形土器の体部と脚部の接合部である。焼成が不良で調整は不明瞭である。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整と考えられる。胎土には各種微砂粒が多量に含まれる。被熱の影響のためか色調は外面が灰黄褐色、内面が橙色である。17は須恵器瓶類の肩部片である。外面には一面に厚く自然釉が付着する。胎土中には多量の鉄分が含まれ、点々と黒い吹き出しがみられる。胎土中には細かな気泡があるが、焼成は良好で、硬質である。18は茶褐色系の須恵器甕で、全体の約半分の遺存である。復元口径は27.4cm、底径14.9cmである。頸部が高く外反しながら立ち上がり、口縁は二重口縁である。肩部が張り、底部径は比較的大きい。口頸部はヨコナデであるが、外面は肩部から下に平行叩き目、下半部から底面にかけてはヘラケズリ調整である。内面は粘土紐接合痕や当て具痕がみられ、ナデ調整されている。胎土には細かい各種砂粒が含まれ、赤褐色スコリア粒も目立つ。焼成は良好である。色調は内外面ともにぶい黄褐色である。底部内面は器壁がボロボロになって脆い。19は須恵器甑の口縁部片で、復元口径は30.0cmである。口縁まで筒状に内面に当て具を添えながら、外面から平行叩き目で叩き粗い成形をした後、口縁部を折り曲げて屈曲を形つくり、最終的にヨコナデ調整している。胎土中には多量の白色砂粒が含まれ、雲母細粒もみられる。色調は灰色である。20は須恵器甕の胴部片である。外面は平行叩き目、内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。外面に釉はみられない。



第21図 （2）SI－002 遺物（1）

焼成はやや不良で、特に内面が摩滅している。胎土には白色微砂粒が含まれる。色調は薄い灰色である。21 は須恵器甑の底部片で、底面の孔をヘラで切り開けている。復元底径は 15.0cm である。外面は平行叩き目とヘラケズリ痕を残す。内面はナデ調整している。胎土・色調・調整痕が 19 と同様のため同一個体の可能性がある。22 ～ 24・28・29 は土師器小型甕である。22 の法量は口径 10.8cm、底径 5.4cm である。口縁端部がやや肥厚する。外面は頸部から下底面までヘラケズリ調整である。底面にヘラの先端か爪の先端を不規則に押しつけたような無数の圧痕がみられる。内面はヘラナデ調整である。胎土には各種砂粒が多量に含まれる。器壁は薄手で、焼成は良好である。色調は橙色である。23 の復元口径は 13.9cm である。胴部外面は上位が縦方向、下位が横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。胎土には各種微砂粒が多量に含まれ、特に白色微砂粒が目立つ。器面は砂っぽくざらつく。焼成は比較的良好である。24 の復元口径は 11.5cm である。口縁は直立気味に立ち上がり、端部が外反する。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。器壁は薄く仕上げられている。胎土には各種微砂粒が多量に含まれ、焼成はやや不良である。25 ～ 27 は常陸型土師器甕の口縁部片である。頸部を短く強く屈曲させ、口縁端部をつまみ出して外反させる形状である。25 は 19.8cm、26 は復元口径 20.0cm、27 は 17.1cm である。25 と 26 は同一個体の可能性が高い。胴部外面ともヘラケズリ後ナデ調整されていると考えられるがケズリ痕単位はほとんど確認できない。胎土中には多量の白色砂粒とわずかに雲母細粒が含まれる。焼成は良好で硬質、色調はにぶい黄橙色である。28・29 は底部片である。28 の復元底径は 6.8cm である。外面は底面を含めて雑なヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。胎土には各種微砂粒が中量含まれる。一部器面が剥落している。焼成は良好で、硬質である。29 の底径は 6.4cm である。外面は回転糸切り離し後無調整で、内面はナデ調整である。被熱し内外面とも器面が剥落している。胎土中にはやや大きめの白色砂粒が目立つ。30 は土師器甕の底部片で、復元底径 10.0cm である。外面はヘラケズリ調整される。内面は器面がボロボロに剥離している。胎土中には白色微砂粒が目立つ。焼成は良好で、硬質である。

31 は鉄製刀子の破片で、錆膨れのため関ははっきりとはしない。重量は 8.2 g である。32 は鉄滓の破片で、意図的に分割したようにみえる。大きさの割に 92.9 g と重い。33 ～ 40 は土玉である。平面形は円形で、39・40 はやや小型であるが、それ以外は径は約 2 cm である。側面形は円形に近いものからかなりつぶれたものまで様々である。孔は上部下部ともに細長く広いため両側穿孔と考えられるが、雑な穿孔である。35 は穿孔途中のような孔が別にある。36 は器面がはがれ気味で、赤く発色する。法量は第 2 表にまとめた。41 ～ 44 は瓦破片、すべて平瓦である。凸面にはいずれも正格子叩き目が残る。41 は広端面の一部のみ遺存する。ナデ調整で、1 本の筋がつく。凸面には焼けた砂が付着する。凹面は布目を一方向のヘラケズリで一部消している。胎土には各種砂粒が少量含まれる。色調は薄い灰色である。最大厚 24mm、重量 415.1 g である。42 は右側面と広端面の一部が遺存する。凹面は布目をヘラケズリで一部消している。右側面、広端面は一方向のヘラケズリ調整であるが、ケズリ痕のみられない部分もある。凸面の格子は他に比べ大きい。凸面、凹面、割れ面にも焼けた砂が付着する。胎土中には白色微砂粒が少量含まれる。色調は薄い灰褐色で、焼成はやや不良である。最大厚 30mm、重量 596.3 g である。43 は側面・端面までは遺存しない。凹面は 1 方向にヘラケズリ調整されている。胎土中には多量の白色砂粒が含まれる。色調は薄い褐色である。最大厚 28mm、重量 533.5 g である。44 はヘラケズリされた広端面の一部が遺存する。凸面は叩き後に一部ヘラケズリ、凹面はほとんど布目が残らなくなるほどヘラケズリ調整が施される。胎土中には各種砂粒が少量含まれる。色調は灰色である。最大厚 24mm、重量 463.1 g である。



第22図　（2）SI－002 遺物（2）

（2）SI−003（第20・23図、第2表、図版3・14） 16E−56グリッド周辺に位置する。（2）SI−002と重複し、南東コーナーが壊されている。平面形は方形で、主軸方位はN − 20° − E、規模は主軸長3.41 m、幅推定3.7 m、確認面からの深さ約53cmである。柱穴は出入口ピット1基のみ検出された。周溝は、重複部分で不明瞭になっているが、カマド下以外全周していたものと判断できる。カマドは北壁中央に付設され、袖部、煙道の位置など遺存は比較的良好である。覆土には多量のローム粒・塊が含まれている。

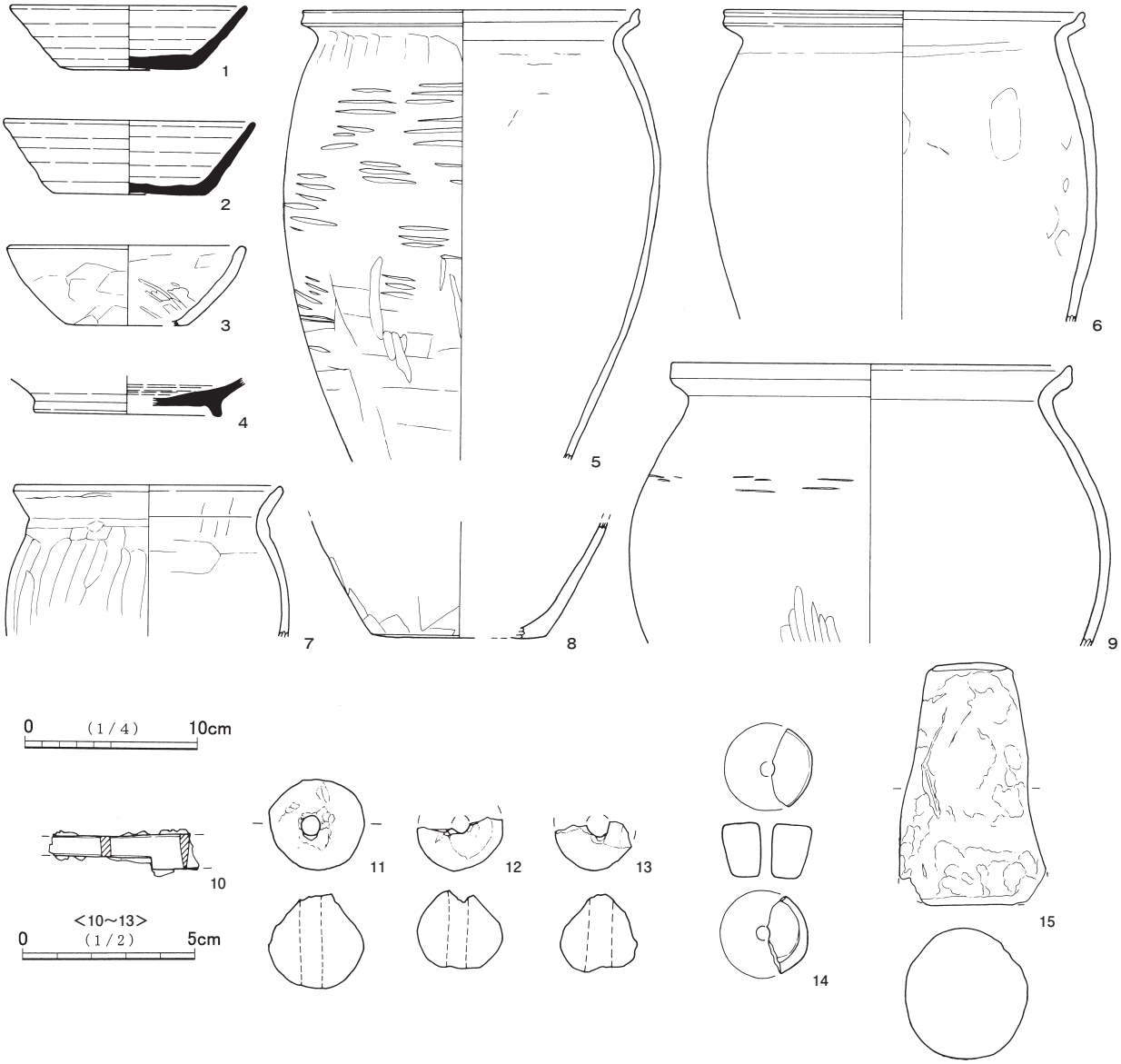
遺物の出土量は比較的多いが実測できた個体は多くない。土師器甕類破片が最も多いが、常陸産の破片が多い。断定できないがヘラケズリされた薄手の土器片も少量出土し、武蔵産の可能性がある。坏類は出土が少なく、ロクロ土師器片も含まれるが、赤彩された破片が目立つ。須恵器の甕や坏の破片には胎土に白色砂粒雲母粒が含まれるものが多い。

1・2は須恵器坏である。1は全体の3割の遺存である。復元口径は13.5cm、底径7.9cmである。底面は回転ヘラケズリ調整である。胎土中には白色砂粒が含まれる。焼成は良好で、硬質である。色調は灰色である。2は全体の5割弱の遺存である。復元口径は14.3cm、底径8.8cmである。底部および体部下端はヘラケズリ調整である。胎土には白色微砂粒が少量含まれ、雲母細粒がわずかに確認できる。色調はやや薄い灰色である。3は土師器坏の破片で、復元口径は13.5cm、底径7.1cmである。底部はほとんど遺存しない。底部に相当する部分が薄く、水平ではないので、高坏の坏部の可能性もある。外面は粗いヘラケズリ後ナデ、内面には粗いヘラミガキ痕がみられる。胎土自体赤褐色に発色している。胎土には各種微砂粒が中量含まれる。4は須恵器高台付坏の体部下端から底部破片で、復元高台径は10.8cmである。高台は付け高台である。胎土には白色微砂粒が少量含まれる。色調は灰色である。焼成は良好で、硬質である。5〜9は土師器甕で、7を除き常陸型甕と考えられる。5は全体の約5割の遺存である。復元口径は19.5cmである。胴部の張りは弱く細身である。口縁端部をつまみ屈曲させるが、あまり丁寧ではない。外面胴部上半には水平方向に3条単位の平行叩き目が残り、胴部下半はヘラケズリ調整を施すが、一部に縦方向のまばらなヘラミガキ痕も確認できる。内面はナデ調整である。胎土中には粗い白色砂粒が多量に含まれ、雲母細粒もみられる。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。6の口径は20.7cmである。胴部の張りは弱く、口縁端部のつまみ出しはやや雑である。内面は指圧痕やナデによる凹凸が著しい。外面はナデ調整である。胎土には各種砂粒と雲母粒が多く含まれる。焼成は良好で、にぶい褐色である。7は土師器甕の破片で、復元口径は15.3cmである。外面は全面縦方向の弱いヘラケズリ調整、内面はナデ調整である。胎土は非常に精緻で、他の遺物に比べ異質である。わずかに微砂粒と白色針状物質が含まれる。全体的に器厚があるが、丁寧な整形である。8は底部付近破片で、復元底径は10.0cmである。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整であるが、器面の剥落が著しい。胎土には細かい白色砂粒が目立つ。胎土・色調の類似から9と同一個体の可能性がある。9は他に比べ、胴部の張りが強い。復元口径は22.9cmである。外面肩部にはヘラの圧痕が、下方にはヘラミガキ痕が残る。内面はナデ調整である。胎土中には非常に多量の白色砂粒が含まれ、雲母細粒は微量確認できる。内面は被熱し器面が斑らに剥離している。色調は赤みを帯びた褐色である。10は鉄製刀子の茎部から刃部にかけての破片である。茎幅6 mm、刃部幅10mm、重量3.3 gである。11〜13は土玉である。平面は円形で径は約2.6cmでほぼ同規模である。側面形は滴状に上に延びる。穿孔して棒を引き抜いたときの粘土の貼り付きで、片側穿孔と考えられる。11はほぼ完形であるが、その他は半分程度の遺存である。胎土は砂っぽく、器面はざらつく。12は色調がやや赤みを帯びる。法量は第2表にまとめた。14は土製紡錘車で、全体の4割の遺存である。復元最大

径は5.1cm、最大厚は3.1cm、孔径は8mm、重量は30.4 gである。器面はヘラケズリ後、丁寧なナデ調整である。胎土には白色微砂粒が微量含まれ、焼成は良好である。15は土製支脚で最大長13.9cm、最大径8.4cm、重量720 gになる。被熱しボロボロになって崩れているが、出土時はほぼ完形であった。胎土にはやや大きめの砂粒が目立ち、赤褐色スコリアも含まれる。器面はやや雑なナデ調整である。

（2）SI−004（第24図、図版3・14） 17E−05グリッド周辺に位置する。平面形は長方形、四隅は直角でほとんど丸みがなく、4面の壁は直線的である。主軸方位がN − 28° − E、規模は主軸長5.32 m、幅は中央で3.8 m、確認面からの深さは約47cmである。北側壁が南側壁に比べ、50cmほど長い。床面からは周溝、柱穴は検出されていない。その床面はおおむね平坦だが、硬化面とみられるものもなかった。この遺跡にあって特異な形態の竪穴の一つである。カマドは北側壁のおおよそ中央部に付設され、煙道部が壁面をえぐるようにつくられている。両袖とも残りは極めて不良である。火床面の手前に床が被熱して変色した範囲がある。

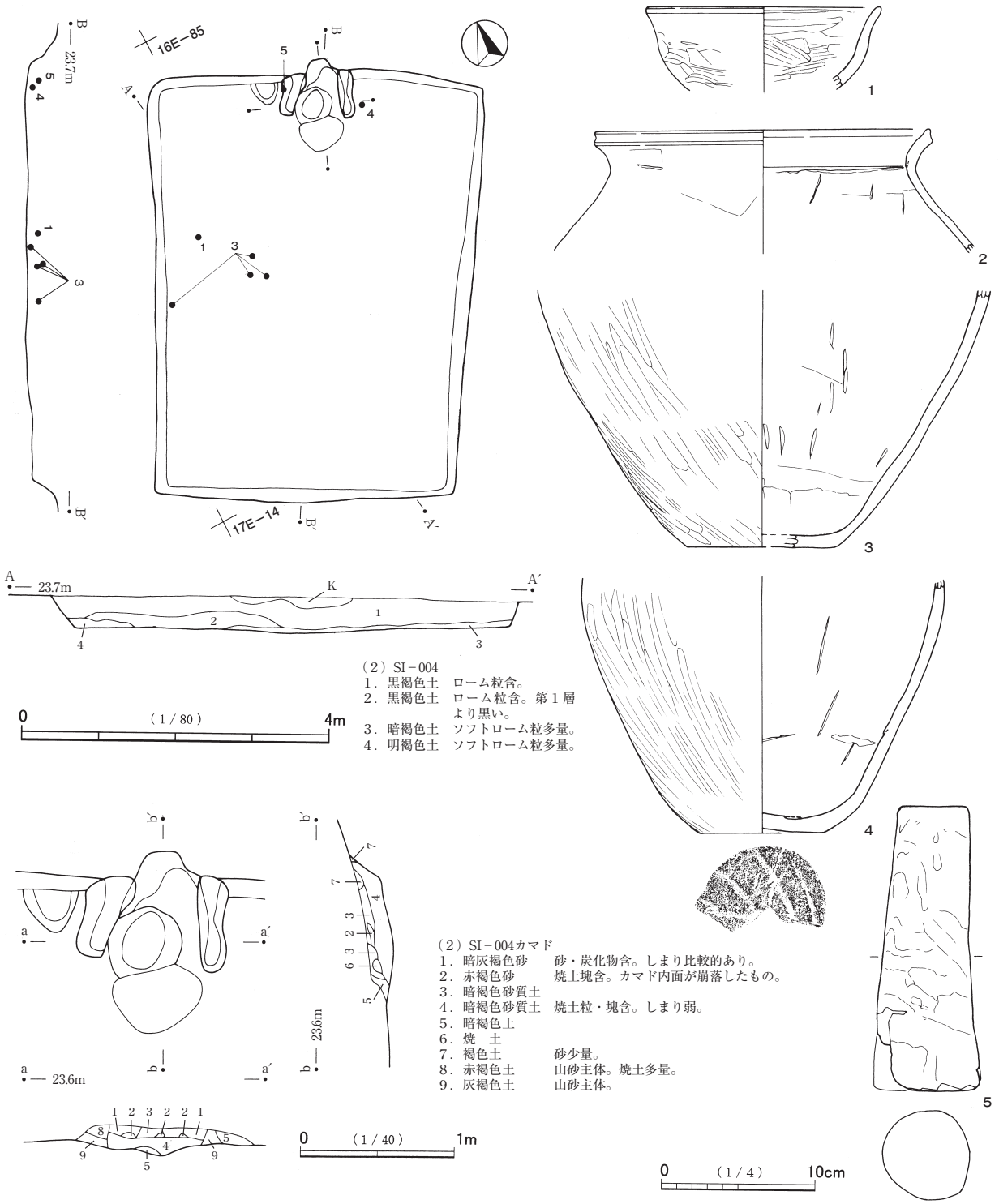
全体の遺物の出土は少量である。接合できた破片は少なく全体の器形がわかる個体はない。甕類はほとんどが常陸産の破片と考えられる。須恵器は小破片が3点のみで、千葉市域産の褐色系の個体は含まれな



第23図 （2）SI−003遺物

い。坏類は赤彩された破片が目立ち、ロクロ土師器片は少量である。

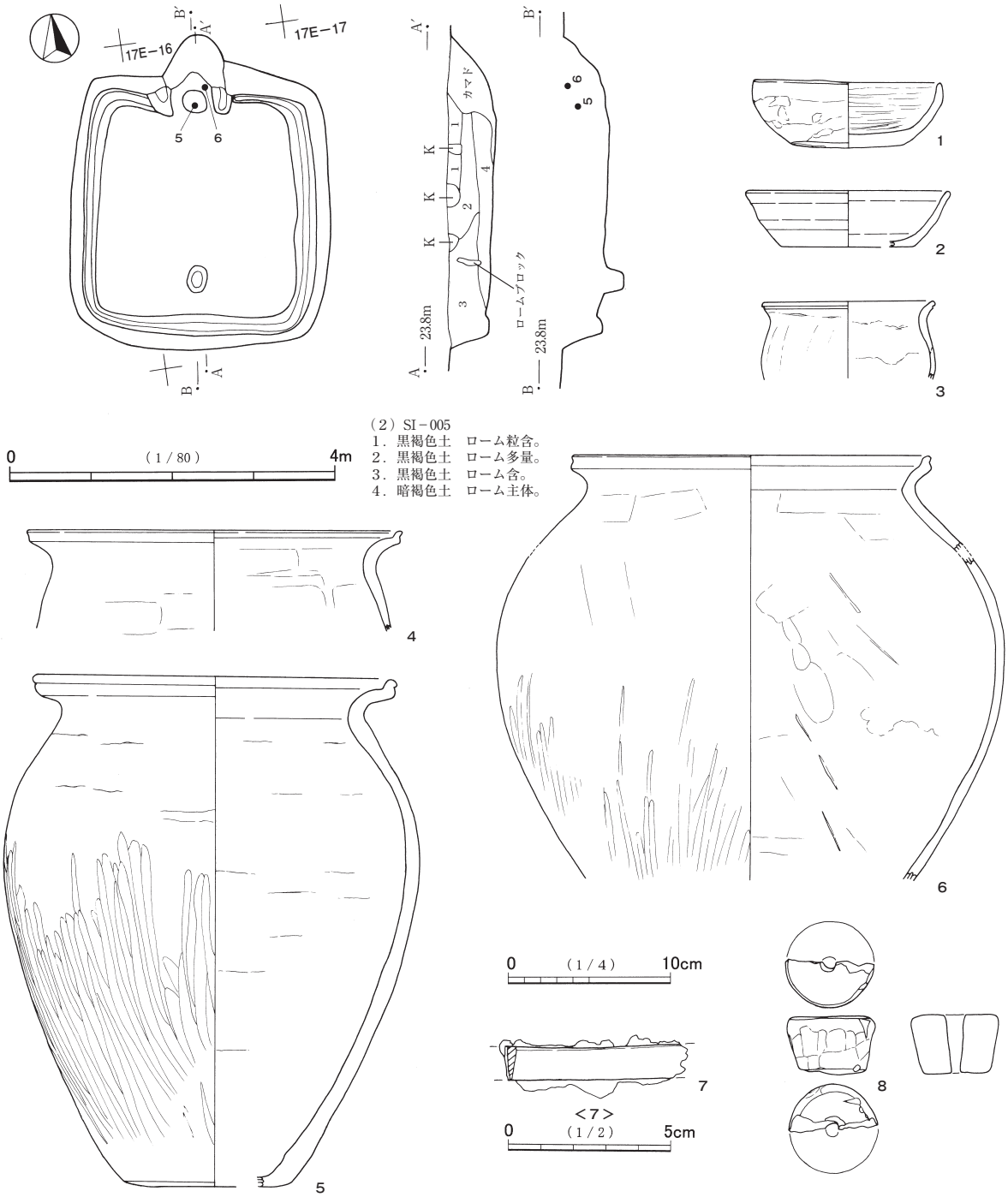
１は土師器坏の小破片である。口縁部が体部との境から緩やかに外反する。復元口径は 15.4cm である。外面はヘラケズリ後、口縁部も含めてヘラミガキ、内面全面もヘラミガキ調整である。胎土中にはあまり混和物は含まれない。器壁は厚いが硬質で、焼成は良好である。２～４は常陸型甕の破片である。胎土に白色砂粒、石英粒が多量に含まれる。胴部外面は幅のあるヘラミガキが施され、内面はヘラナデ調整を基本とする。２は口頸部で、復元口径22.0cm である。外面はヘラケズリ後ナデである。器面は橙色に発色する。



第24図　（２）SI−004

３は底部破片で、復元底径 9.7cm である。焼成は良好で、色調は灰黄褐色である。４は底径 8.0cm である。内面の一部に粘土紐接合痕、底面には木葉痕がみられる。焼成は良好で、色調は灰黄褐色である。５は細長い土製支脚で、ほぼ完全に近い状態でカマド左の床面上から出土した。法量は最大長 18.7cm、最大径 6.2cm、重量は 637 g である。胎土には各種微砂粒が中量含まれる。ナデ調整で、焼成は良好である。

（２）SI－005（第 25 図、図版３・14） 17E－26 グリッド周辺に位置する。平面形は方形で、主軸方位 N － 11° － E、規模は主軸長 2.98 m、幅 2.85 m、確認面から深さ約 55cm である。周溝は掘り込みが明瞭で、カマド部以外全周する。主柱穴はなく、出入口ピット１基が南壁面沿いに検出された。ピットの規模は長軸 34cm、短軸 24cm、深さ 23cm である。



第25図　（２）SI－005

竪穴の掘り込みはしっかりと遺存していたが、出土遺物は多くない。甕類は常陸型甕が主体である。薄手の甕破片も出土しているが、典型的な武蔵型甕ではない。坏類は非常に少なく、実測遺物を除くと小破片10点程度である。ロクロ土師器片が含まれる。須恵器は大型甕の肩部破片が1点出土したのみである。釉が付着し、胎土は精緻、焼成は良好で硬質である。

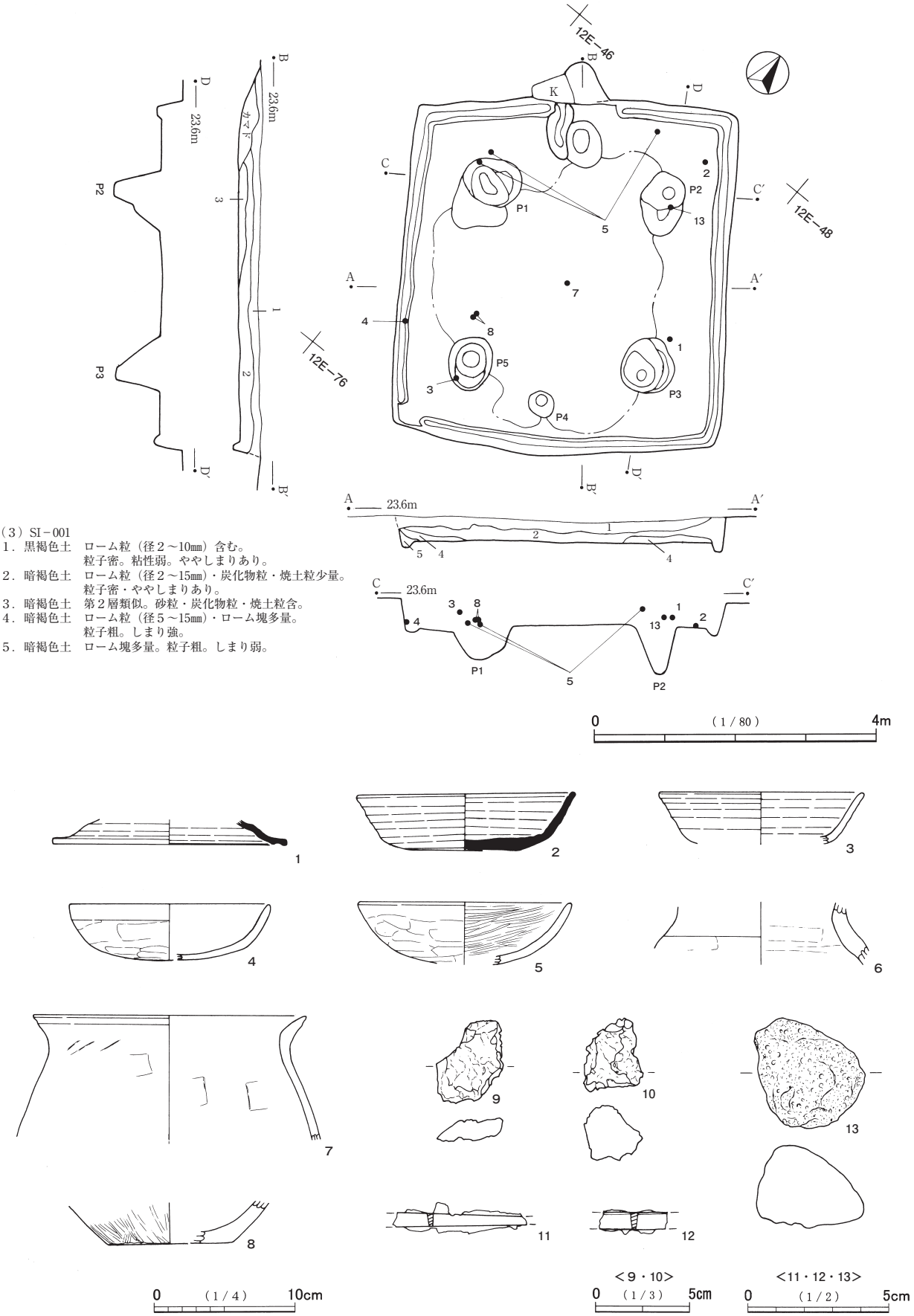
1は土師器坏で全体の約7割の遺存である。復元口径11.3cm、底径7.1cm、器高3.9cmである。胎土にはスコリアと微細な白色砂粒が含まれるが、精緻である。外面は、底面を含めて粗いヘラケズリで、底部が比較的厚い。内面は丁寧なヘラミガキ調整である。色調は暗い灰黄褐色である。2はロクロ土師器坏の小破片である。復元口径12.4cm、底径8.0cm、器高3.5cmである。胎土には白色微砂粒が微量含まれる。底面と体部下端は回転ヘラケズリが施されていると思われる。色調は内外面とも灰黄褐色であるが、断面は煉瓦色である。3は器壁の薄い土師器の小型甕である。復元口径は10.4cmである。胎土中に白色微砂粒が少量含まれる。焼成はやや不良、器壁が被熱により脆くなっている。外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整である。4～6は常陸型土師器甕である。胎土に大きめの白色砂粒が多く、雲母細粒も含まれる。口縁端部は短く立ち上げ、屈曲する。4は口縁部破片で、復元口径は22.9cmである。色調はにぶい黄褐色で、焼成は良好である。5は全体の約8割の遺存である。口径21.7cm、復元底径10.2cm、器高31.3cmである。口縁端部は丸みを持ちシャープさに欠ける。胴部上半に最大径をもち、底部に向かい直線的にすぼまる。底部周辺は使用のためか丸みを帯びる。外面は胴部に縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整である。焼成は良好で、硬質である。6は接点がないが口縁部と体部を図上で合成復元したものである。復元口径は21.8cmである。胴部下半外面には縦方向のヘラミガキ、内面は指圧痕とヘラ圧痕がみられる。色調はにぶい黄褐色である。焼成は良好で、硬質である。7は鉄製刀子の刃部破片である。刃部幅1.0cm、厚さ2.5mm、重量は8.3 gである。8は土製紡錘車である。最大径5.5cm、最小径3.9cm、厚さ3.6cm、孔径9 mm～10mm、重量49.7 gである。側面はやや粗いヘラケズリで、それ以外はナデ調整である。胎土には各種微砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。

（3）SI－001（第26図、図版3・15） 12E－57グリッド周辺に位置する。平面形は方形で、主軸方位N－32°－W、規模は主軸4.86 m、幅4.53 m、床面までの深さ約35cmである。周溝は南端コーナーを除いて確認された。主柱穴は4本と、南壁沿いに出入口ピットを1基検出した。柱穴は何度かの柱の建て替えがあったようで、複数の掘り方が確認された。4本の柱穴と出入口ピットを結ぶ範囲の内側で床面の硬化が顕著であった。北壁中央にカマドを付設する。撹乱によりカマドの遺存は不良である。

遺物には床面に近い位置の出土や遺存の良好な個体は2を除いてない。坏類は実測遺物以外ほとんどなく、土師器の常陸型甕の破片が主体で、甕類で在地産と思われる破片は微量である。

1は須恵器坏蓋の口縁部破片である。復元口径16.5cmで、2の蓋のサイズになり得る。返りはわずかに膨らむ程度になっている。胎土中には多量の白色砂粒と雲母が含まれる。焼成はやや不良で、全体に器面が摩滅している。色調は浅黄色に発色している。2は北東隅の床面から出土した須恵器坏で、全体の約3/4が遺存している。口径15.3cm、底径8.9cmである。底径の割に器高は低く、体部下端は斜めにヘラケズリにて面をつくる。口唇内部直下は沈線がめぐるように強いナデが施される。底面には粗い手持ちヘラケズリ痕を残す。胎土・色調・焼成は1と同様である。3はロクロ土師器坏の口縁から体部の小破片である。復元口径は14.4cm、胎土中には赤褐色スコリアが目立つ。焼成は良好で、色調は橙色に発色する。4・5は土師器坏の破片である。ほぼ同形状、同整形で、内面は丁寧なヘラミガキ、外面はヘラケズリ痕がはっ

（3）SI－001
1．黒褐色土　ローム粒（径２～10㎜）含む。
　　粒子密。粘性弱。ややしまりあり。
2．暗褐色土　ローム粒（径２～15㎜）・炭化物粒・焼土粒少量。
　　粒子密・ややしまりあり。
3．暗褐色土　第２層類似。砂粒・炭化物粒・焼土粒含。
4．暗褐色土　ローム粒（径５～15㎜）・ローム塊多量。
　　粒子粗。しまり強。
5．暗褐色土　ローム塊多量。粒子粗。しまり弱。



第26図　（3）SI－001

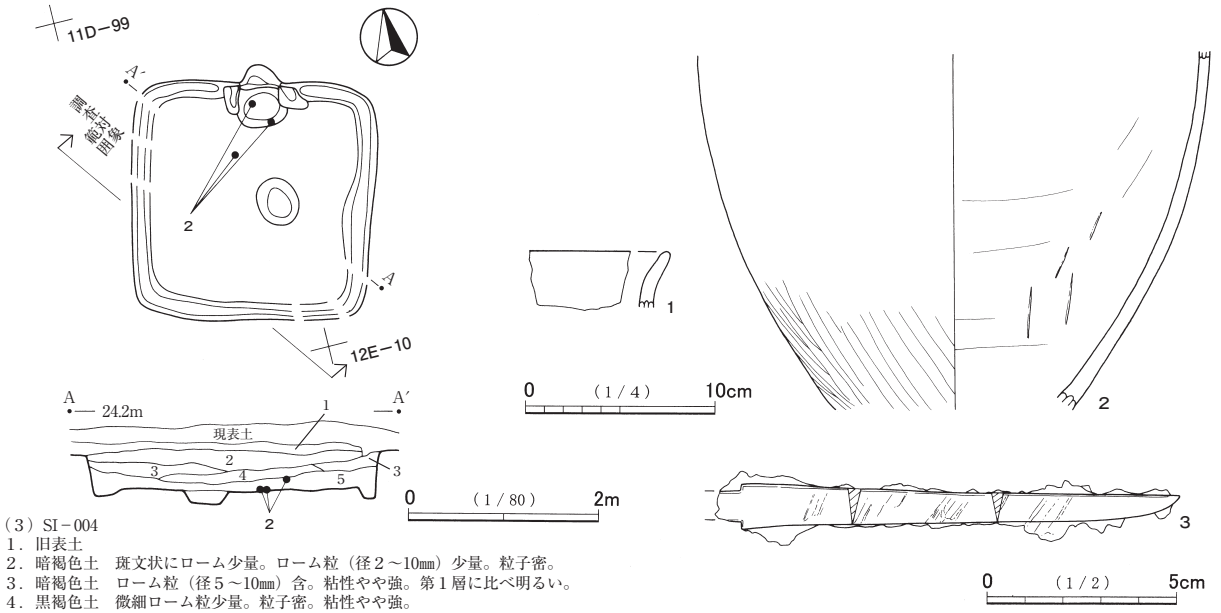
きりしている。胎土には各種砂粒が含まれ、焼成は良好である。４は復元口径14.2cm、器高4.0cm、５の復元口径は15.0cmである。６は土師器の壺の肩部破片と考えられる。器厚があり、胎土も他の個体と違い、時期が異なる可能性がある。肩部の稜線から下位には粗いヘラケズリ痕が残る。色調は赤みが強い橙色である。７は常陸型土師器甕の口縁から肩部の破片である。口縁端部は薄く短く外側につまみ出している。復元口径は19.4cm、胎土中には多量の白色砂粒、雲母粒が含まれる。内外面とも薄くヘラナデの痕跡を残す。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。８は常陸型土師器甕の底部片で、復元底径9.0cm、胎土中には多量の白色砂粒、雲母粒を含まれる。外面はヘラミガキで、内面は器面が剥離して調整痕が残っていない。９・10は鉄滓である。９は薄い破片で、重量20.5ｇ、10は白く発泡し、重量11.8ｇである。11・12は厚みのない棒状鉄製品の破片である。11は最大幅５mm、厚さ２mm、重量2.8ｇ、12は最大幅６mm、厚さ３mm、重量1.4ｇである。13は軽石である。色調は白みが強く、各面とも使用の痕跡がみられる。幅3.8cm、厚さ2.8cm、重量は10.2ｇである。

（３）SI－004（第27図、図版４・15）　＜印西市教育委員会：第８地点６号住居＞

12E－00グリッド周辺に位置する。南西側半分は印西市教育委員会で調査済みである。平面形は小規模な方形、主軸方位はＮ－16°－Ｅ、規模は一辺2.43ｍ、床面までの深さ約40cmである。主柱穴を伴わないが、床面やや東寄りにピットが１基検出された。掘り込みが比較的深くしっかりした周溝が全周する。カマドは北壁中央に付設される。遺存は不良で、左右両袖とも基底部付近で若干残っている程度である。

出土遺物は非常に少なく、印西市教育委員会調査区でも実測個体は存在しない。坏類は須恵器坏口縁破片が１点で、土師器坏はほとんどみられない。他は常陸型甕の破片が主体である。

１は土師器甕の口縁部小破片で、全面ヨコナデ調整である。胎土には各種砂粒が微量含まれ、焼成は良好である。２は常陸型土師器甕の胴部下半で、カマド前面の床近くから出土した。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデおよびヘラナデ調整である。底部付近は強い横方向のナデが施される。胎土中には白色砂粒が多量含まれるが、雲母細粒はあまり目立たない。３は鉄製刀子である。刃部は完存し、茎部の一部を欠損する。両関である。刃部には刃とは方向の違う木質状のものが付着する。刃部幅９mm、重量11.1ｇである。



（３）SI－004
１．旧表土
２．暗褐色土　斑文状にローム少量。ローム粒（径２～10㎜）少量。粒子密。
３．暗褐色土　ローム粒（径５～10㎜）含。粘性やや強。第１層に比べ明るい。
４．黒褐色土　微細ローム粒少量。粒子密。粘性やや強。
５．暗褐色土　斑文状にローム含。ローム粒（径５～10㎜）少量。ややしまりあり。

第27図　（３）SI－004

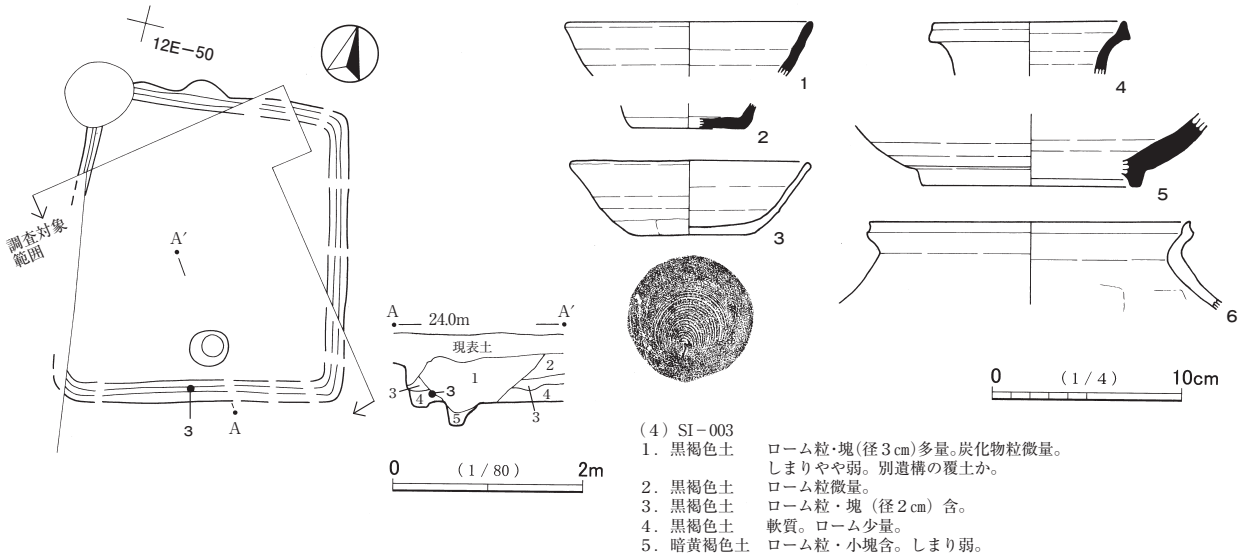
（4）SI−003（第 28 図、図版５・15）＜印西市：第９地点７号竪穴住居跡＞

12E−60 グリッド周辺に位置する。調査範囲北端の楔状にはさまる地点から検出されたため、ごく一部の調査である。印西市教育委員会により北側の一部が調査された。周溝と南壁際から出入口ピットと考えられるピットを１基検出した。主軸方位は推定でＮ − 10° − Ｗ、規模は主軸長 3.1m、深さは確認面から 50cm である。床面は調査した範囲内は全面硬化していた。周溝は幅 15cm ～ 25cm、深さ約５cm で、明瞭な掘り方である。土層断面を東側で観察したが、他の遺構と重複するようにみられた。

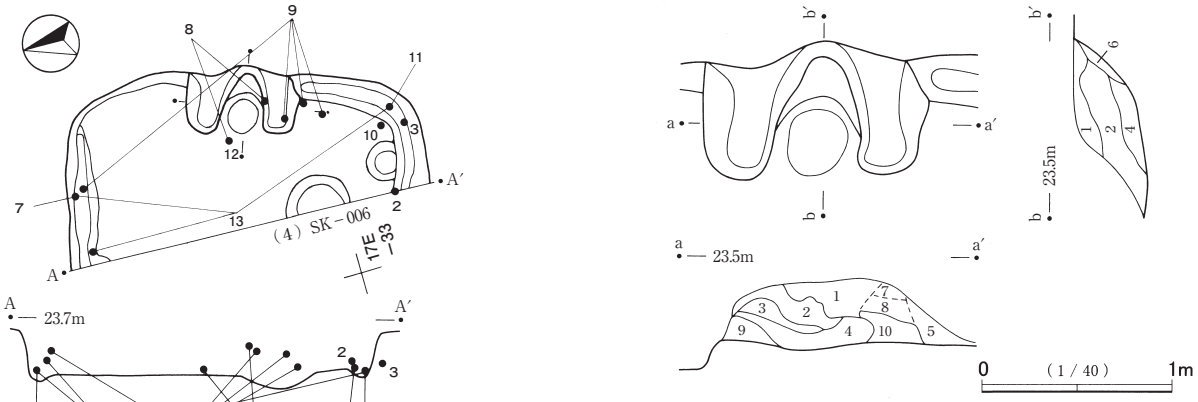
調査範囲は狭く遺物総量も非常に少ない。実測個体以外では、坏破片は少なく、常陸型甕の破片が目立つ。

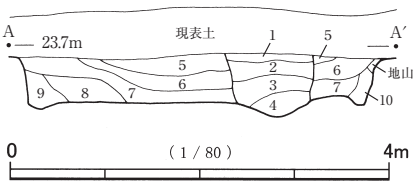
３以外の遺物は覆土中の一括遺物の小破片である。１は須恵器坏の口縁部破片で、復元口径 12.9cm である。胎土にガラス質の細砂粒がやや目立つ。色調は灰黄褐色である。２は須恵器坏の底部破片で、復元底径は 6.0cm である。底面と体部下端は手持ちヘラケズリ調整である。底部内面の見込み部分ははっきりしていて沈線状になっている。胎土中には白色微砂粒が含まれる。焼成は良好で、色調は灰色である。３は床面近くから出土したロクロ整形の土師器坏である。遺存は全体の 80％程度である。口径は 12.8cm、底径 6.8cm である。ややゆがみがある。底部は回転糸切りで、周囲および体部下端は回転ヘラケズリ調整である。胎土は緻密で、雲母細粒・白色針状物質が微量含まれる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。４は東海系の須恵器瓶類の口縁部破片で、復元口径は 10.0cm である。胎土は緻密、焼成は良好で硬質である。色調は黄褐色に発色し、自然釉が付着している。５は須恵器で大型の瓶類か鉢の底部の破片である。復元高台径は 11.5cm である。胎土中に雲母細粒が含まれる。高台は付け高台である。焼成は不良で、器面が摩滅気味である。色調はにぶい黄橙色である。６は常陸型甕の口縁部破片で、復元口径は 16.4cm である。口縁端部の稜はしっかりしており、端部をつまみ出して立ち上げている。胎土に白色砂礫が多く、雲母細粒も含まれる。印西市教育委員会調査地点での出土遺物は、重複する住居の完掘後、存在が明らかとなったため、帰属の明確なものはなく、出土平面位置から、常陸型甕の口縁部破片（印西市 27）が該当する可能性がある。６の土器形状と近似する破片である。

（4）SI−004 （第 29 図、図版５･15） 17E−23 グリッド周辺に位置する。事業路線西際に位置するため、竪穴の東側半分のみの調査である。竪穴の北東および南東の隅は平面形が角張らず大きく弧を描く。主軸方位はＮ − 102° − Ｅ、規模は推定幅 3.6 m、確認面からの深さは約 50cm である。住居跡の床面はほぼ全



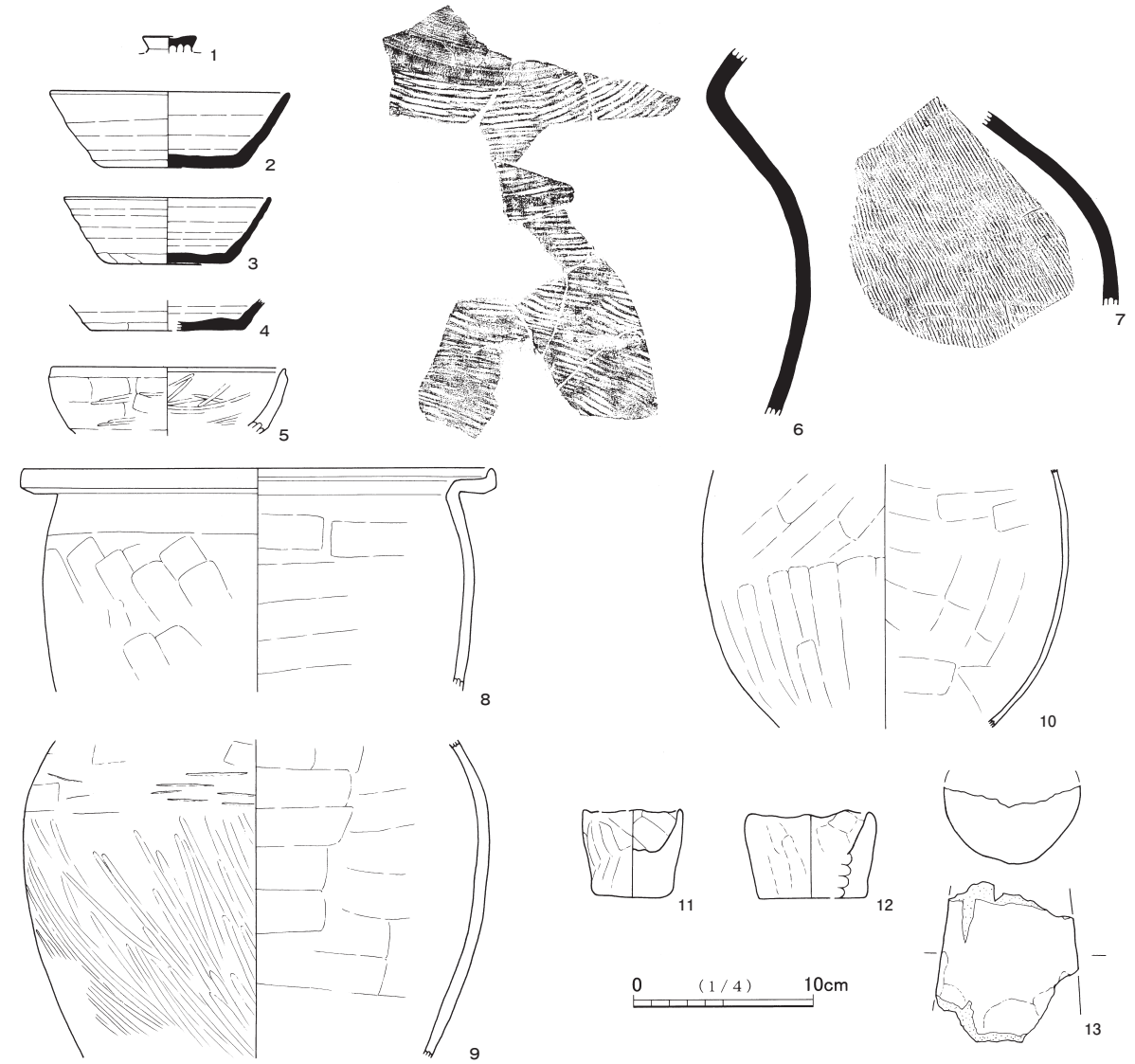
第28図 （4）SI−003





(4) SI－004（第1層～4層は(4) SK－006覆土）
1．暗黄褐色土　ローム粒・塊多量。しまり弱。
2．暗黒褐色土　ローム粒極微量。しまりあり。
3．暗黒褐色土　ローム粒・小塊多量。しまりあり。
4．暗黒褐色土　ローム粒少量。しまりあり。
5．黒褐色土　ローム粒・焼土粒含。
6．暗黒褐色土　ローム粒・焼土粒少量。
7．暗黒褐色土　ローム粒含。しまりあり。
8．褐色土　ローム大塊含。しまりあり。
9．褐色土　ローム粒・小塊含。しまりあり。
10．黒褐色土　ローム塊・焼土粒含。しまり弱。

(4) SI－004カマド
1．暗灰褐色土　砂質土含。
2．黒色土　ローム粒・焼土粒少量。砂質。
3．灰褐色土　カマド構築材砂質土。
4．暗赤褐色土　被熱砂含。
5．黒褐色土　カマド構築材含。
6．暗黄褐色土　ローム多量。
7．灰黄褐色砂
8．赤褐色砂
9．灰黄褐色砂　粘土含。
10．黒色砂



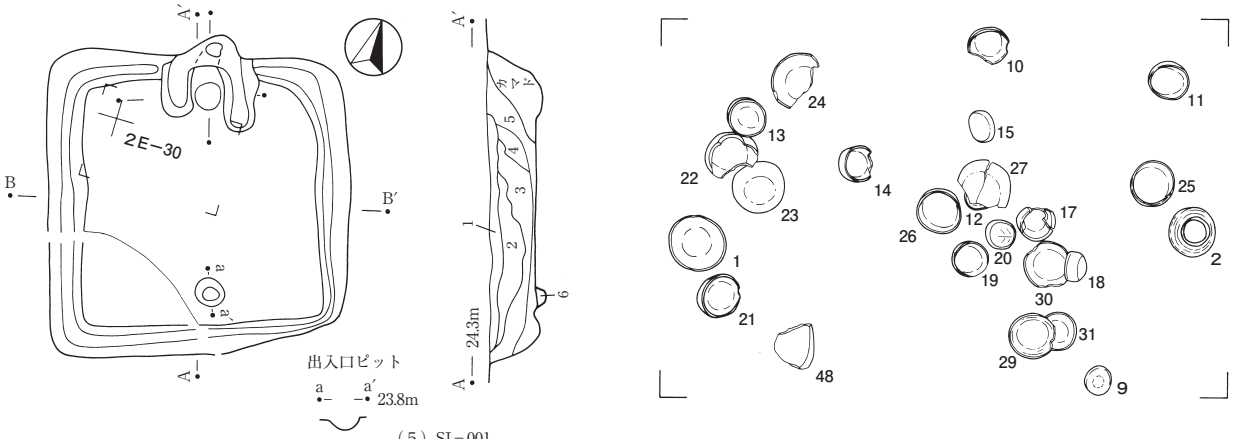
第29図　(4) SI－004

面が硬化していた。床面には周溝がめぐり、南東隅には浅いピット（深さ４cm）が検出された。東側壁中央にはカマドが付設される。山砂の大きな塊がカマド前面にあり、両袖とも基底部から約 15cm は遺存していたが、それ以外は完全に崩れていた。火床面の掘り込みは浅いものの、赤褐色に被熱し、硬化していた。カマドが人為的に壊されたかは不明である。なお、土層断面を観察する段階で、住居跡床面上に円形の落ち込み（（４）SK－006）が確認された。

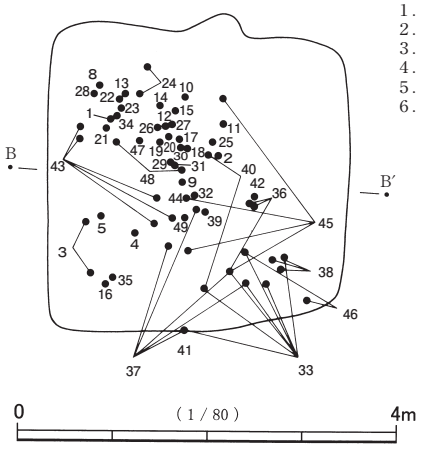
遺物は覆土中からの出土が多く、床面直上のものは少ない。実測遺物以外では、常陸型甕の破片が主体である。土師器の坏類はわずかで、ロクロ土師器片も含まれる。須恵器の坏類はほとんどが胎土に白色砂粒が含まれる。接合できた個体は少なく、ほとんどが破片で、復元実測である。

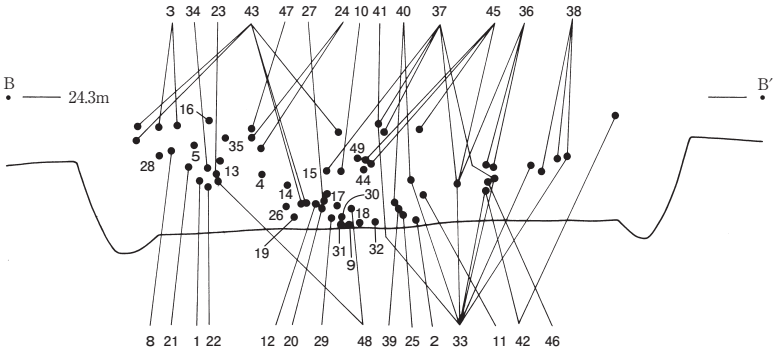
１は須恵器坏蓋のボタン状のつまみの破片で、直径 3.0cm である。色調は濃い灰色で、胎土中には白色砂粒が目立つ。２～４は須恵器坏である。２・３は比較的遺存がよく、口縁の欠けは破面が古く、意図的な打ち欠きの可能性がある。２・３とも胎土に多量の白色砂粒と雲母粒が含まれる。ロクロ目が強く、底面は一方向の手持ちヘラケズリである。体部下端はヘラケズリされるが、摩滅して丸みをもつ。底部内面の見込みはしっかりとおさえている。色調は白みの強い灰白色である。２は口径 13.3cm、底径 8.0cm である。３は口径 11.5cm、底径 6.8cm である。４は底部破片で、復元底径は 8.5cm である。底面は手持ちヘラケズリ調整である。胎土中には白色微砂粒が目立つ。色調は濃い灰色で、硬質である。５は土師器坏の口縁から体部小破片である。口縁端部を強くつまんで整形される。復元口径は 12.9cm である。外面は粗いヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整である。６・７は須恵器甕である。６は頸部から胴部にかけての破片である。胎土中に多量の白色砂粒が含まれるが、雲母粒はほとんど含まれない。外面には粗い叩き目が、内面にはナデ痕がみられる。７に比較して焼成はやや甘い。７は肩部片で、外面には極めて細かい平行叩き目が明瞭であるが、内面は最後にナデ調整を受けているため当て具痕が不明瞭である。胎土中に砂粒は含まず、緻密で極めて硬質に焼けしまっている。外面にはわずかに自然釉が付着している。特徴から東海産の可能性が高い。８・９は胎土に白色砂粒が目立つ土師器甕である。８の頸部はほぼ直角に開き、口縁端部を短く垂直につまみ上げている。復元口径は 26.0cm である。外面はヘラケズリ後のナデ、内面はヘラナデ調整である。明褐色に焼けしまっている。９の外面胴部下位は縦方向のヘラミガキが特徴的である。内面はヘラナデ調整を施す。明褐色に焼けしまっている。10 は武蔵型甕の胴部片で、復元最大胴径は 20.2cm である。器壁は非常に薄く、胎土中には多量の赤褐色スコリアや白色微砂粒が含まれる。外面はヘラケズリ痕が明瞭で、内面はヘラナデ調整である。色調はにぶい赤褐色である。11・12 は坏形の手捏ね土器である。11 は口径 5.4cm、底径 4.0cm、12 は口径 6.8cm、底径 6.0cm である。円柱状の粘土塊を手のひらに持ち、回転させながら、内面を強く指頭で押して整形している。口縁端部も再調整はしていないため波打つ。胎土には微砂粒が少量含まれる。焼成は良好である。13 は土製支脚片である。先端部に近い方は被熱で、色調が白みを帯びる。胎土には赤褐色スコリアが目立ち、焼成は良好で硬質である。

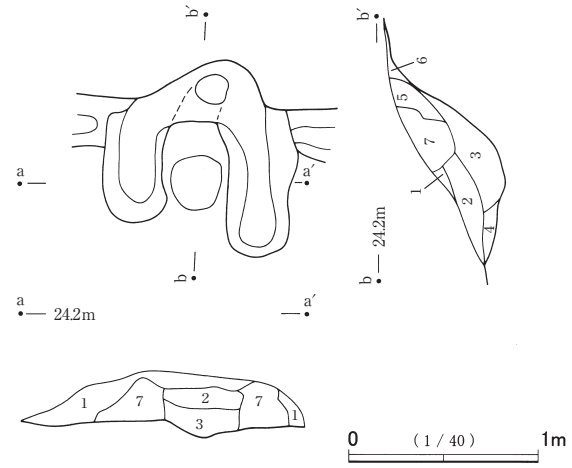
（５）SI－001（第 30 ～ 33 図、図版６・15・16） 24E－30 グリッドに位置する。南側が（５）SI－002（弥生時代後期）と重複する。確認時には（５）SI－002 を含めた範囲で土師器片が全面的に分布し、落ち込みが大きく一つに確認できたので、奈良時代の規模の大きい竪穴として掘り始めた。途中からプランが明瞭となり、２軒の住居としてセクションポイントを再設定した。平面形はほぼ正方形、主軸方位はＮ－78°－Ｗ、規模は主軸長 2.85 m、幅 2.86 mである。住居跡の床面は平坦で、確認面からの深さは約 50cm である。床面は全体的に硬化していたが、住居の重複していた部分は貼り床で軟弱であり、周溝を含めしっ



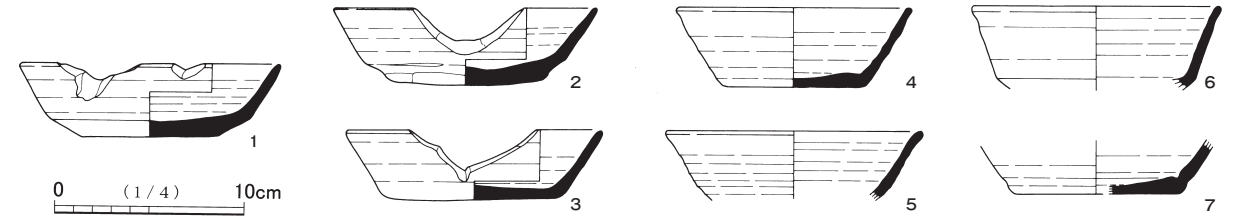
（5）SI－001
1．黒色土　　しまりややあり。ローム粒子・焼土粒子少量
2．暗褐色土　　しまりやや弱。特に遺物が多く含まれる層。焼土塊少量。
3．黒褐色土　　しまりやや弱。焼土小塊中量。ローム粒子少量。
4．暗灰褐色土　しまりやや弱。カマド構築材粘土含。
5．暗褐色土　　しまりやや弱。ローム塊中量。
6．暗褐色土　　しまりやや弱。ローム塊少量。（出入口ピット）





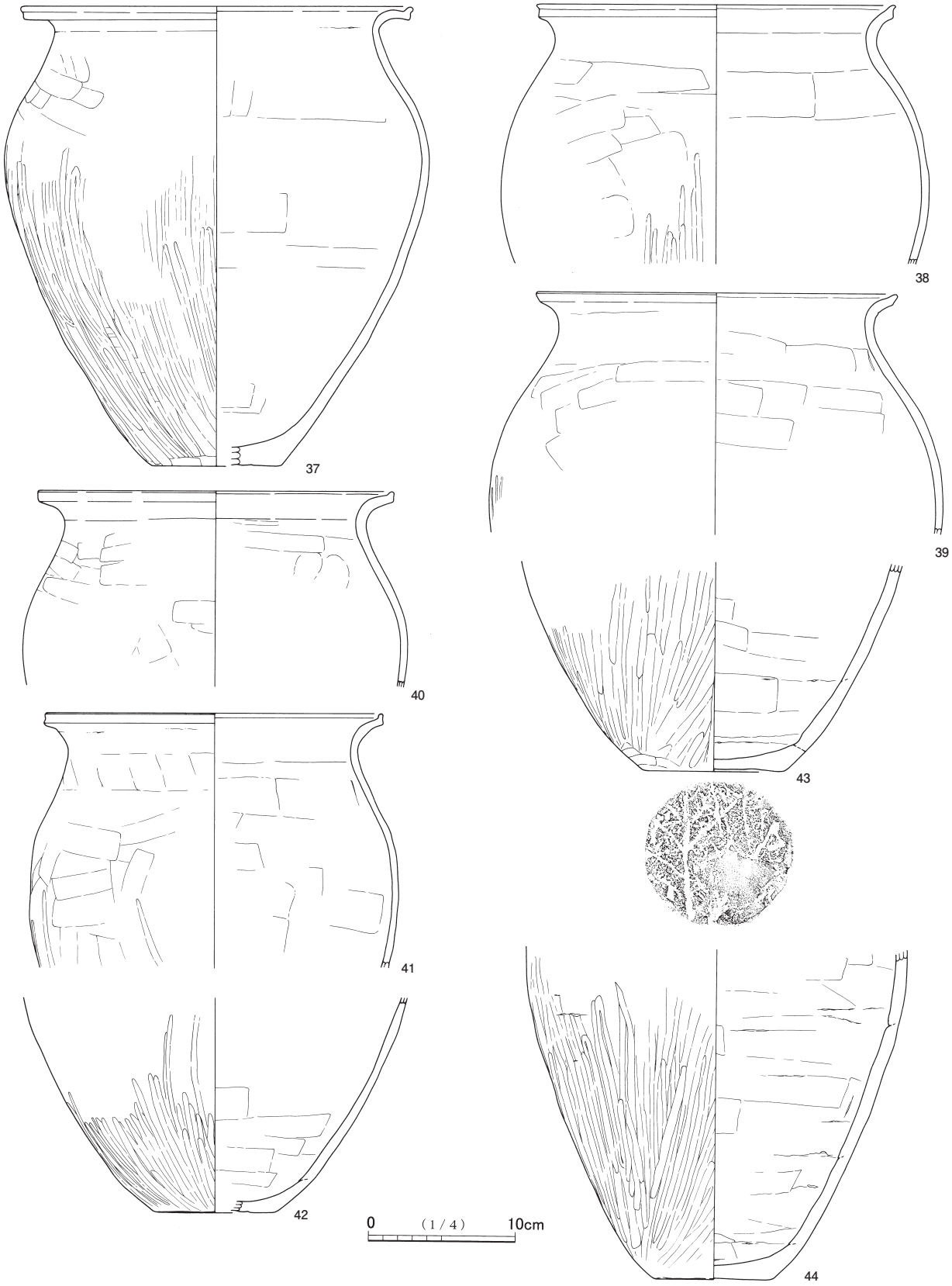


（5）SI－001カマド
1．暗褐色土　　しまりやや弱。粘土粒子少量。
2．黒褐色土　　しまり弱。焼土小塊少量。
3．暗褐色土　　しまり弱。焼土塊多量。
4．黒褐色土　　しまり弱。焼土塊少量。
5．暗灰褐色土　しまりやや弱。煙道部覆土。粘土粒子・炭化粒子・焼土少量。
6．灰褐色土　　しまりあり。粘土多量。カマド奥壁部
7．灰褐色土　　しまりあり。粘土。



第30図　（5）SI－001（1）

第31図　（5）SI－001（2）

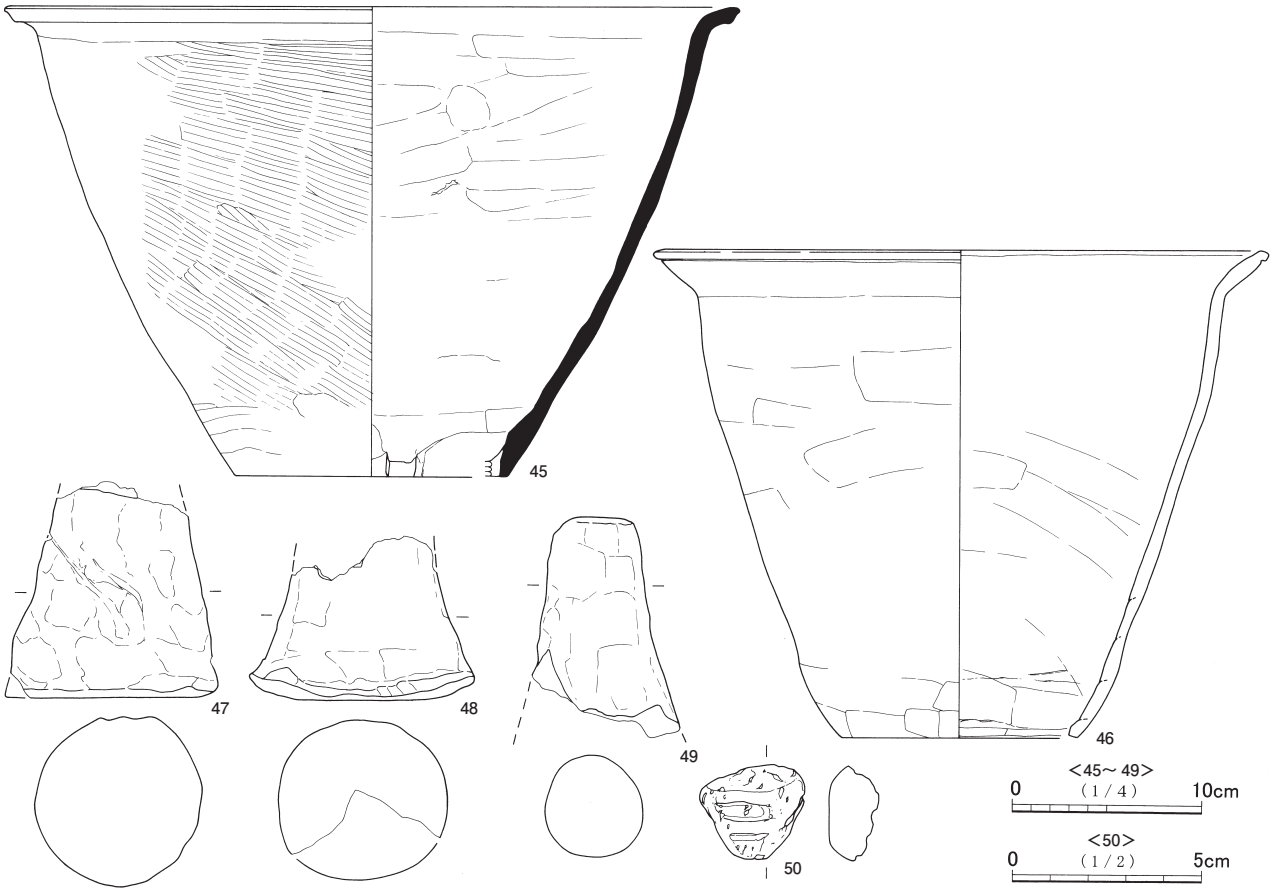


第32図　（5）SI－001（3）

かりと検出することができなかった。壁下には幅 20cm ～ 30cm、深さ 10cm の周溝がめぐる。竪穴北壁中央にカマドが付設される。遺存は良好で、掛け口、煙道部の位置が断面でも把握できた。主柱穴は検出されず、南側壁付近で出入口ピットが１基（径 33cm、深さ 14cm）検出された。

遺物は遺構確認段階から出土し、覆土上層から床面に至るまで非常に多く出土した。特にカマドの上から前面にかけて遺存度の高い坏類がまとまって出土した（第 30 図）。その中の半数程度に口縁部に意図的な打ち欠きの土器が含まれる。出土遺物はほとんどが土器で、土製品などは非常に少ない。土師器甕類は常陸型甕が圧倒的に多い。坏類は遺存度の高い個体が多く、非掲載資料はわずかで、ロクロ土師器はほとんどない。非掲載資料では赤彩された浅い坏の破片が目立つ。須恵器坏破片は比較的多く出土した。色調は様々であるが、胎土に白色砂粒を多く含むものが主体である。

１～７は須恵器坏である。１～３は口縁部が打ち欠かれている。１はにぶい黄橙色を呈する。底部を回転ヘラ切りし、その周囲をヘラケズリにより角度をつけている。胎土は比較的精緻で、雲母は含まれない。２の色調は薄い灰色であるが、１とほぼ同型で胎土も近い。底面は回転ヘラ切り後雑なヘラケズリ、ナデつけが施される。３は胎土に多量の白色砂粒と雲母細粒が多量に含まれる。焼成はやや不良のため、器面が磨滅している。底面は手持ちヘラケズリである。４～７は破片のため復元実測である。４は底面を回転ヘラ切り後、周囲を手持ちヘラケズリしている。５・６の胎土には雲母粒が目立つ。７の胎土には白色砂粒が目立つ。５は色調がやや白みを帯び、口縁部が弱く外反する。６は体部が直立気味に立ち上がり、体部下端に角度がつく。７は他に比べやや底径が大きく、体部がわずかに内湾気味に立ち上がり、別器種の



第33図　（５）SI－001（４）

可能性もある。８～22は通常用途用の土師器坏ではなく、粘土紐接合痕が残る個体もあるが、手捏ね状に製作するミニチュアの坏形土器である。８～11・14・18・22は口縁の一部を意図的に打ち欠かれている。形態は大きく半球状の丸底のもの（８～11)、平底で口縁が直立気味に立ち上がるもの（12～15)、平底でやや開きながら口縁の立ち上がりが短いもの（16～21）に分かれる。丸底のものは外面をヘラケズリ、平底のものはナデ調整が主体である。22だけは大型で、外面が縦方向のヘラケズリを大胆に施している。基本的に平底のものは木葉を敷いて製作している。23～32は通常の土師器坏である。全体的には口径が小さいものである。器高は埦状に高いものと、低いものに分かれ、低いものには平底化したものが含まれる。調整は外面がヘラケズリ後ナデ・ミガキで、内面はミガキ調整である。27は赤彩、32は炭素吸着による内面黒色処理が施される。土師器甕は多量に出土したが、全形を復元できたものは２点のみである。胎土に砂粒の含有量の違いがあるものが確認できるが、口縁端部がつまみ出され、胴部下半に縦方向のヘラミガキが施される常陸型甕がほとんどであり、実測個体についてはすべて常陸型甕（33～44）である。器形は肩部の張りは弱く、直線的に底部へつながるものが主体である。口縁端部のつまみ上げはそれほど丁寧ではない。34の肩部には籾の圧痕が確認できる。39･41は器壁が比較的薄くつくられている。45･46は甑である。45は灰黄色の須恵器で､外面は平行の叩き痕が明瞭である。胎土に砂粒が微量含まれ、焼成はやや不良である。底部から直線的に大きく開いて立ち上がり口縁端部が大きく外反する。底部は多孔式である。46は土師器で、１孔である。口縁端部の外面には沈線状にくぼみがめぐる。胎土に白色砂粒が目立ち、雲母粒がわずかに確認されるため、甑も常陸産の可能性がある。47～49は土製支脚である。いずれも焼成は良好で硬質である。48の平坦面には木葉痕がみられる。50は軽石である。２本の筋状痕がみられ、全体的に摩滅している。重量は2.6ｇである。

第２表　土玉計測表

（　　）内数値は推定

挿図	No.	遺物No.	最大径（mm）	最大厚（mm）	孔径（mm）	重量（g）	色調
第22図	33	（２）SI－002－66	19.0	15.0	上 5.0 下 5.5	5.2	にぶい褐色 7.5YR 5/4
第22図	34	（２）SI－002－94	17.0	13.0	上 5.0 下 5.0	3.3	明褐色 7.5YR 5/8
第22図	35	（２）SI－002－23	19.0	15.0	上 6.0 下 5.0	4.7	明褐色 7.5YR 5/6
第22図	36	（２）SI－002－87	20.0	12.0	上 4.0 下 5.0	3.8	赤褐色 5YR 4/8
第22図	37	（２）SI－002－22	21.0	13.0	上 6.5 下 3.5	5.5	赤褐色 5YR 4/6
第22図	38	（２）SI－002－65	17.0	15.0	上 3.0 下 3.0	3.8	赤褐色 5YR 4/8
第22図	39	（２）SI－002－64	16.0	12.0	上 4.0 下 4.5	2.4	明赤褐色 5YR 5/6
第22図	40	（２）SI－002－89	14.0	12.0	上 5.0 下 5.5	1.8	橙色 5YR 6/6
第23図	11	（２）SI－003－13	27.0	27.0	上 6.5 下 6.0	14.4	にぶい黄橙 10YR 6/4
第23図	12	（２）SI－003－1	25.0	22.0	上 5.8 下 5.7	6.1	にぶい黄橙 10YR 5/4
第23図	13	（２）SI－003－1	(26.0)	23.0	上 7.0 下 8.0	4.8	にぶい黄橙 10YR 5/4

2　掘立柱建物跡・ピット群

（4）SB−001（第 34 図、図版６） 17E−36 グリッド周辺に位置する。（２）SI−005 と北側で重複する。その新旧関係は不明である。P1 より北側には連続するような柱穴が確認できないことから、２間×２間の掘立柱建物跡と考えられる。柱穴列が正方形に整然と並ばないので、軸方位が明確にしにくいが、南北方向を主軸方位とすると、N − 23° − E である。建物の四隅にあたる P1・P3・P5 は掘り方が大きくしっかりとした掘り込みを持つが、その間の柱穴は概して浅く小型である。P5 からは断面で柱痕が確認できたが、他の柱穴には明瞭な痕跡はみられない。P3 と P5 の中心間の距離は 2.85 m、P1 と P3 は 2.88 mである。

出土遺物は極めて少量である。１は P3 から出土した土師器坏の破片である。ロクロ整形で、復元口径は 12.7cm である。胎土に白色微砂粒を多量に含み、器面がざらつく。色調は赤みの強い明褐色である。他の出土遺物は常陸型甕の底部小破片と武蔵型甕の可能性のある器壁の薄い小破片が２点のみである。

（4）SB−002（第 34 図、図版７） 17E−09 グリッド周辺に位置する。北側に大きく撹乱を受けているが、２間×２間の掘立柱建物跡と考えられる。南北方向を主軸方位とすると、主軸はほぼ南北である。建物の四隅にあたる P1・P3・P6・P9 は掘り方がしっかりとしており大きいが、その他の掘り込みは概して浅く小型である。柱痕を確認できたのが P1・P3・P4・P6・P7・P9 である。そのうち P7 の柱痕には灰褐色の砂と焼土粒・ローム粒が混入していた。P1 と P3 の中心間の距離は 3.70 m、P3 と P4 は 1.75 m、P4 と P6 は 1.75 m、P6 と P7 は 1.75 m、P7 と P9 は 2.05 mとなる。

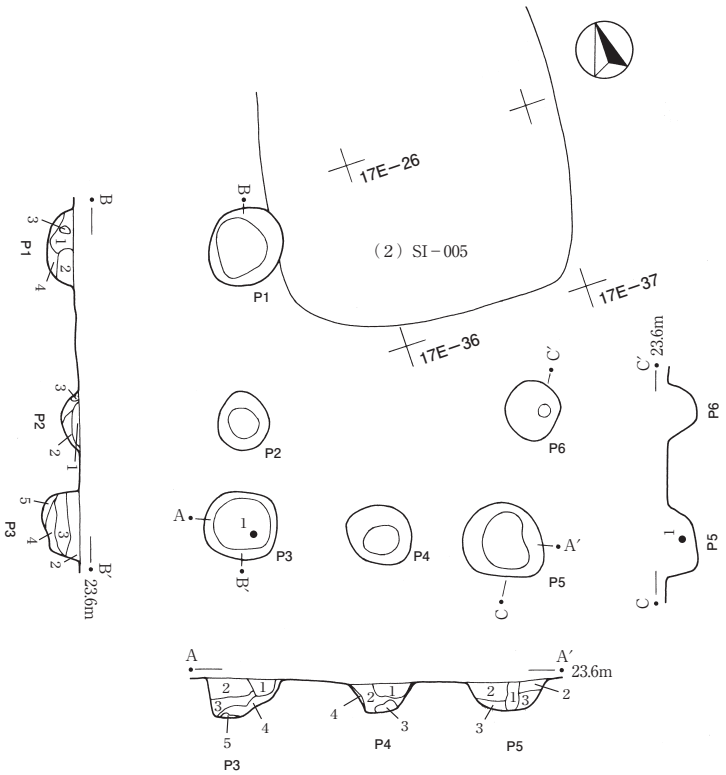
遺物はいずれも柱穴の覆土中から出土した小破片である。１はロクロ土師器坏の口縁部破片である。胎土中にはスコリアと白色微砂粒が含まれる。焼成は良好で、色調は橙色である。２は土師器坏の底部破片で回転ヘラケズリ痕が外面と底面に残る。内面は丁寧なヘラミガキで、黒色処理される。３は土師器甕の底部破片である。内面は被熱して器面が著しく剥離しており、調整痕は残っていない。外面にはヘラケズリ痕が残る。４は大型の土師器台付き鉢の高台部破片と考えられる。復元底径は 19.5cm で、胎土中にスコリアと雲母細粒が多量に含まれる。やや焼成不良で器面が摩滅している。他の出土遺物は弥生土器１点、須恵器１点、土師器片が少量である。土師器は胎土に白色砂粒が目立ち、雲母粒が含まれる個体が多い。

（5）ピット群 （第 35 図、図版７） 14E−55 グリッド周辺に位置する。（４）SI−001 の南西に隣接し、P2 が平面的に（４）SI−001 より新しいことが明らかであった。６基のピットで構成されるが、深さは一定せず、整然とは並ばない。埦形滓が P2 は覆土中位、P3 は覆土上層から出土した。いずれも打ち割られた状態である。ピットの覆土や周辺には焼土などは含まれず、直接鍛冶に関連する遺構ではないと考えられる。他には P1・P4・P5 の覆土中から土師器破片が各１点出土している。時期は特定しにくい。

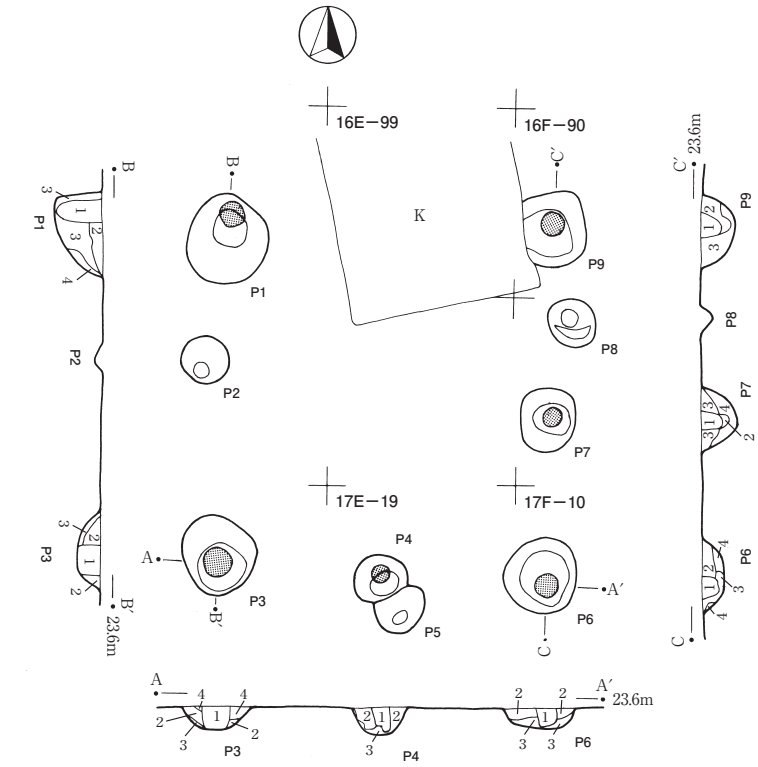
3　土　坑

（3）SK−001（第 36 図、図版７） 13E−08 グリッドに位置する。平面は楕円形で、規模は上端で 92cm × 70cm、底面は南西側が一段低い。深さは最大 32cm である。覆土にはソフトロームが多く含まれる。出土遺物には土師器甕の小破片と土師器皿の口縁と思われる薄く硬質の土器片が出土している。

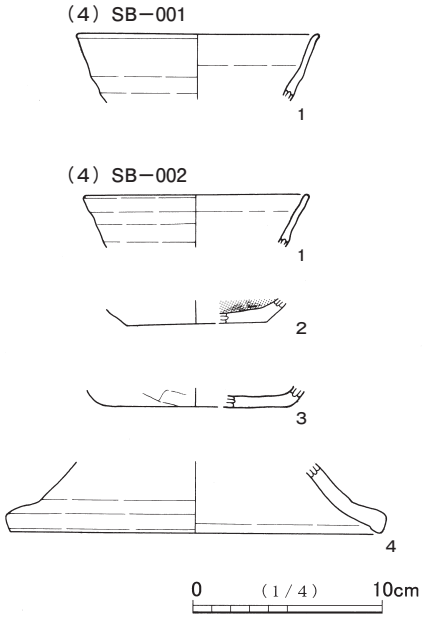
（3）SK−002（第 36 図、図版７） 12E−24 グリッドに位置する。南東部端が撹乱されている。平面形は楕円形で、規模は上端で推定 120cm × 90cm、深さ約 20cm、底面は船底状である。覆土にはローム粒・ローム塊が含まれる。



（4）SB−001



（4）SB−002



（4）SB−001

P1
1．黒色土　ローム粒微量。しまりあり。
2．黒褐色土　黒色土と黄褐色ローム（塊）含。しまりあり。
3．黄褐色土　ロームブロック含。しまりあり。
4．黄褐色土　ソフトローム主体。黒色土微量。しまりあり。

P2
1．黒色土　ローム微量。軟質。
2．黄褐色土　ローム塊と褐色土含。
3．黒色土　軟質。
4．黒褐色土　ローム粒微量。

P3
1．黒色土　軟質。ローム含まない。
2．黒褐色土　ローム少量。
3．暗黒褐色土　ローム粒微量。軟質。
4．黒色土　ローム極微量。軟質。
5．暗黄褐色土　ローム小塊含。軟質。

P4
1．黒褐色土　ローム粒含。
2．暗黒褐色土　ローム粒含。第1層よりローム少量。
3．黄褐色土　ローム主体。軟質。
4．黄褐色土　ローム主体。崩れやすい。

P5
1．暗黒褐色土　細かなローム粒を含む。しまりふつう。柱痕
2．黒褐色土　ローム粒・小塊含む。しまりあり。
3．黒色土　ローム粒若干含む。しまりあり。

（4）SB−002

P1
1．黒褐色土　焼土粒・ローム粒・カマド砂含。砂質。柱痕。
2．黄褐色土　ローム主体。しまりやや弱。
3．黒色土　ローム微量。しまりあり。
4．黄褐色土　崩れたソフトローム。

P3
1．黒色土　ローム微量。柱痕
2．黒色土　しまりあり。
3．黄褐色土　ソフトローム・黒色土含。
4．黄褐色土　ローム・黒色土含む。

P4
1．黒褐色土　ローム微量。柱痕。
2．褐色土　ローム・黒色土含む。
3．暗黄褐色土　ローム主体。

P6
1．黒褐色土　ローム微量。柱痕。
2．暗黒褐色土　ローム・黒色土含。
3．暗黄褐色土　ローム主体。
4．黄褐色土　ローム主体。

P7
1．灰褐色土　カマド砂・焼土・ローム粒微量。砂質。柱痕。
2．褐色土　砂質。しまりやや弱。柱痕。
3．暗黄褐色土　ローム微量。
4．黒褐色土　ローム微量。

P9
1．灰褐色土　カマド砂・焼土・ローム粒微量。砂質。柱痕。
2．黒褐色土　ロームほとんど含まれない。
3．暗褐色土　ローム粒・塊微量。

第34図　（4）SB−001・002

（3）SK−003（第 36 図、図版 7） 12E−14 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は直径約 40cm、深さ 12cm である。覆土にはローム粒が含まれる。

（3）SK−004（第 36 図、図版 7） 12E−24 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は直径約 40cm、深さ 12cm で、（3）SK−003 とほとんど同形である。

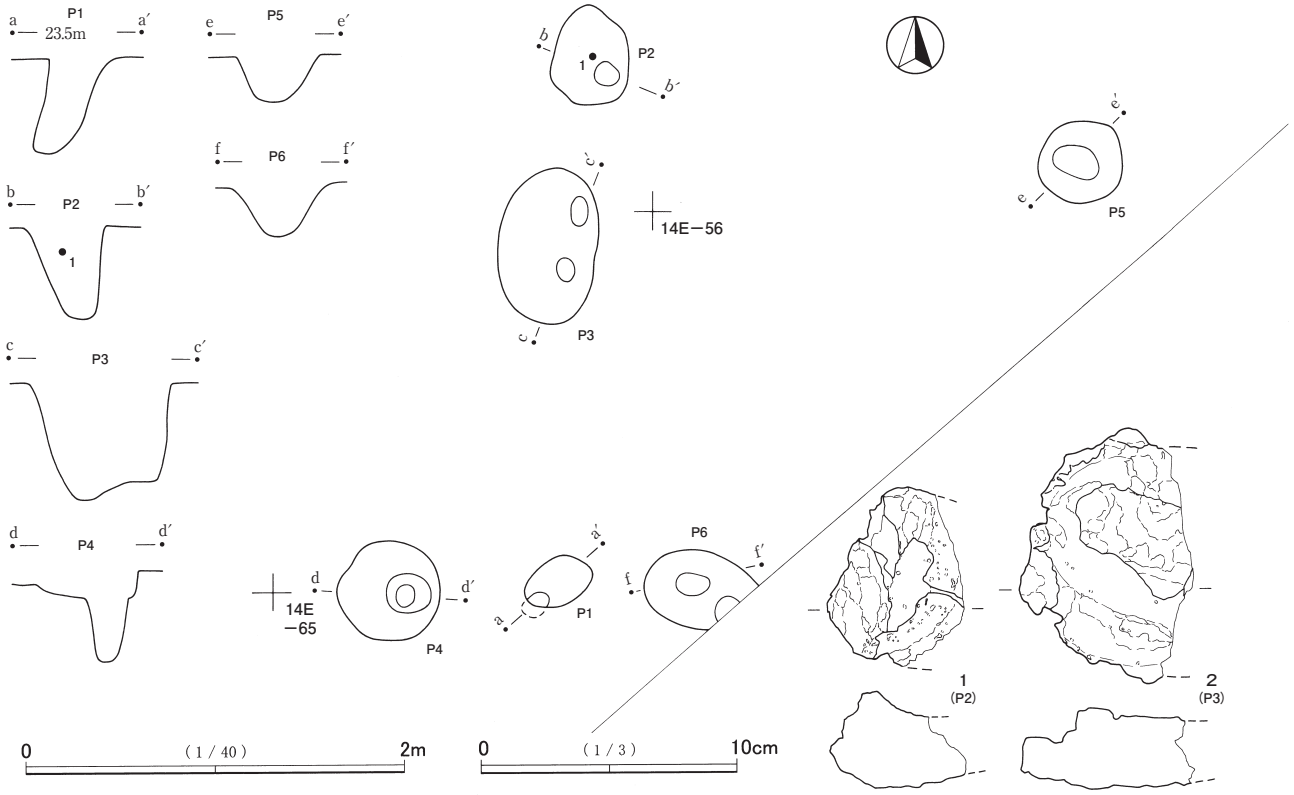
（3）SK−005（第 36 図、図版 8） 11E−92 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、直径 58cm ～ 60cm、深さ 14cm である。底面はおおむね平坦で、北東側に小ピットが 1 基ある。覆土にはソフトローム・ローム塊が含まれる。

（4）SK−002（第 36 図、図版 8） 12E−81 グリッドに位置する。平面形は東西方向に細長い落花生状で、壁面は緩やかに立ち上がる。長軸で 126cm、直交する中央軸で 52cm である。覆土は底面近くが黒色土で、確認面近くではソフトロームの大きな塊が含まれる。全体にしまりがある。遺物は少量の出土で、縄文時代中期の土器、弥生土器、土師器の破片である。土坑の時期は特定できない。

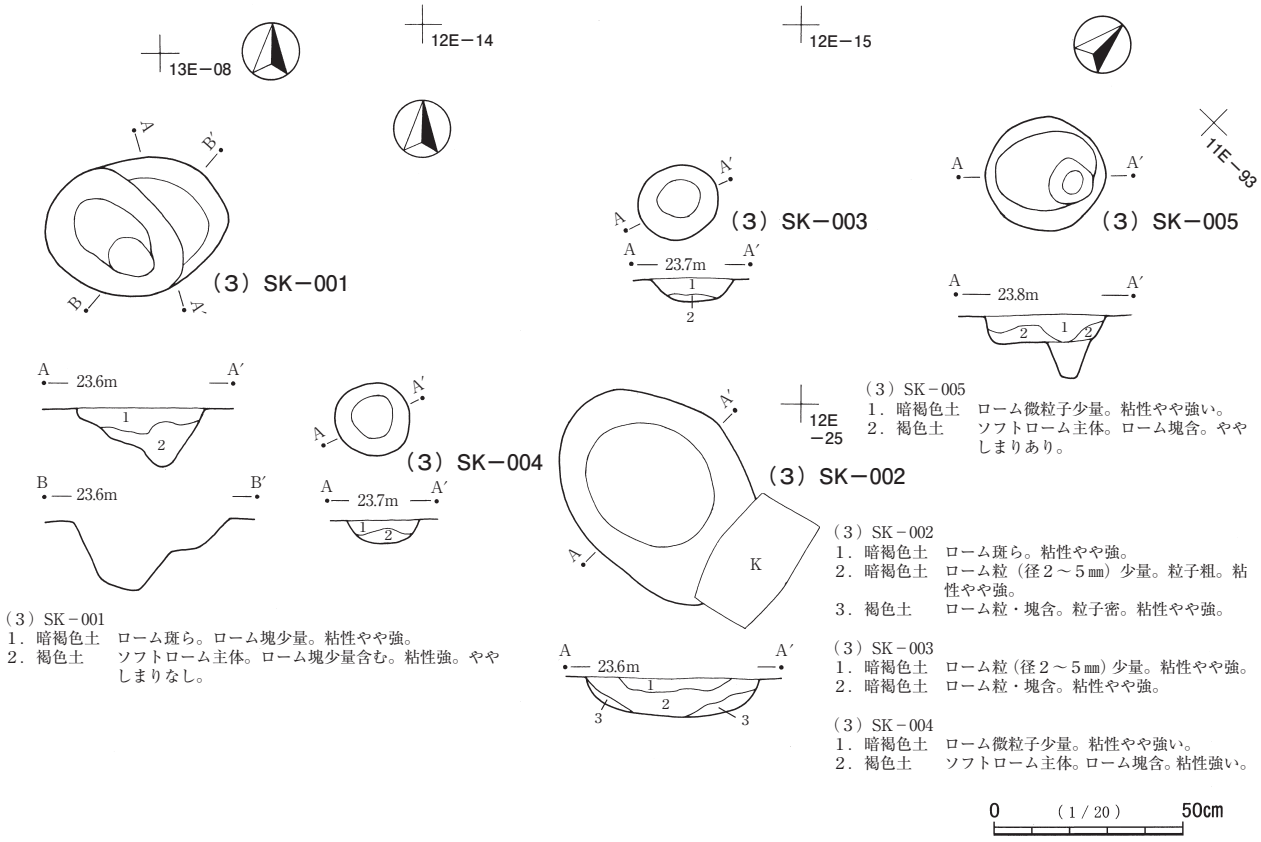
（4）SK−003（第 36 図、図版 8） 13E−00 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は上端で直径 69cm ～ 78cm、深さは約 23cm である。壁面は緩やかに立ち上がる。覆土中に黒色のしまりの強い層がみられる。

（4）SK−004（第 36 図、図版 8） 13E−62 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は上端で直径 68cm ～ 71cm、深さは約 25cm である。底面はやや丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土最上層にはローム粒・焼土粒が含まれる。

（4）SK−005（第 36 図、図版 8） 13E−82 グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は上端で直径 63cm、深さは約 25cm である。底面は平坦であるが、硬化した面はない。



第35図 （5）ピット群



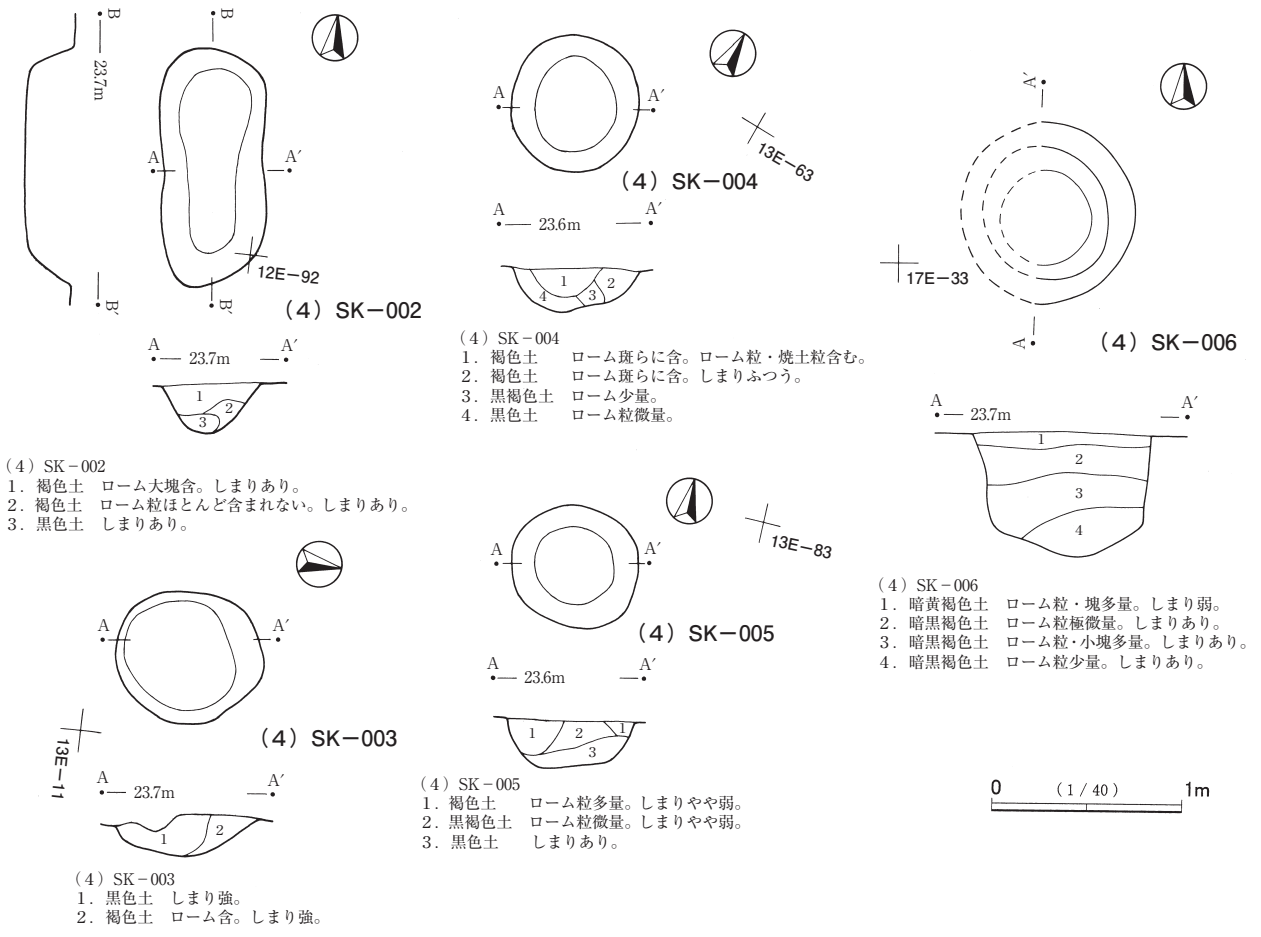
（3）SK−001
1．暗褐色土　ローム斑ら。ローム塊少量。粘性やや強。
2．褐色土　ソフトローム主体。ローム塊少量含む。粘性強。やや しまりなし。

（3）SK−005
1．暗褐色土　ローム微粒子少量。粘性やや強い。
2．褐色土　ソフトローム主体。ローム塊含。やや しまりあり。

（3）SK−002
1．暗褐色土　ローム斑ら。粘性やや強。
2．暗褐色土　ローム粒（径２～５㎜）少量。粒子粗。粘性やや強。
3．褐色土　ローム粒・塊含。粒子密。粘性やや強。

（3）SK−003
1．暗褐色土　ローム粒（径２～５㎜）少量。粘性やや強。
2．暗褐色土　ローム粒・塊含。粘性やや強。

（3）SK−004
1．暗褐色土　ローム微粒子少量。粘性やや強い。
2．褐色土　ソフトローム主体。ローム塊含。粘性強い。



（4）SK−002
1．褐色土　ローム大塊含。しまりあり。
2．褐色土　ローム粒ほとんど含まれない。しまりあり。
3．黒色土　しまりあり。

（4）SK−004
1．褐色土　ローム斑らに含。ローム粒・焼土粒含む。
2．褐色土　ローム斑らに含。しまりふつう。
3．黒褐色土　ローム少量。
4．黒色土　ローム粒微量。

（4）SK−006
1．暗黄褐色土　ローム粒・塊多量。しまり弱。
2．暗黒褐色土　ローム粒極微量。しまりあり。
3．暗黒褐色土　ローム粒・小塊多量。しまりあり。
4．暗黒褐色土　ローム粒少量。しまりあり。

（4）SK−005
1．褐色土　ローム粒多量。しまりやや弱。
2．黒褐色土　ローム粒微量。しまりやや弱。
3．黒色土　しまりあり。

（4）SK−003
1．黒色土　しまり強。
2．褐色土　ローム含。しまり強。

第36図　土坑＜奈良・平安時代以降＞

（4）SK−006（第 36 図、図版５） 17E−23 グリッド周辺にある平安時代の（４）SI−004 竪穴住居跡内に位置する。竪穴が埋まりきってから掘り込んでいる。調査区際のためほぼ半分の調査である。平面形は円形と想定され、規模は直径 68cm、深さは 68cm である。底面は平らでなく、中央部が低い。

4　溝状遺構

出土遺物が少なく、いずれの溝状遺構も時期の特定が困難である。

（1）SD−001・（4）SD−001（第 37 図、図版８） 調査年度が異なるが、同一遺構である。19E ～ 20F グリッドにかけて検出された。N − 28° − W 方向に一直線に延びる。現在の道の延長部分にあたる。幅は 0.6 m ～ 0.8 m で、深さは遺構確認面から最深部までは 15cm で、極めて浅い。覆土は少量のローム粒や塊を含む黒褐色土である。出土遺物には加曽利Ｅ３～４式の縄文土器片４点と土師器破片２点がある。

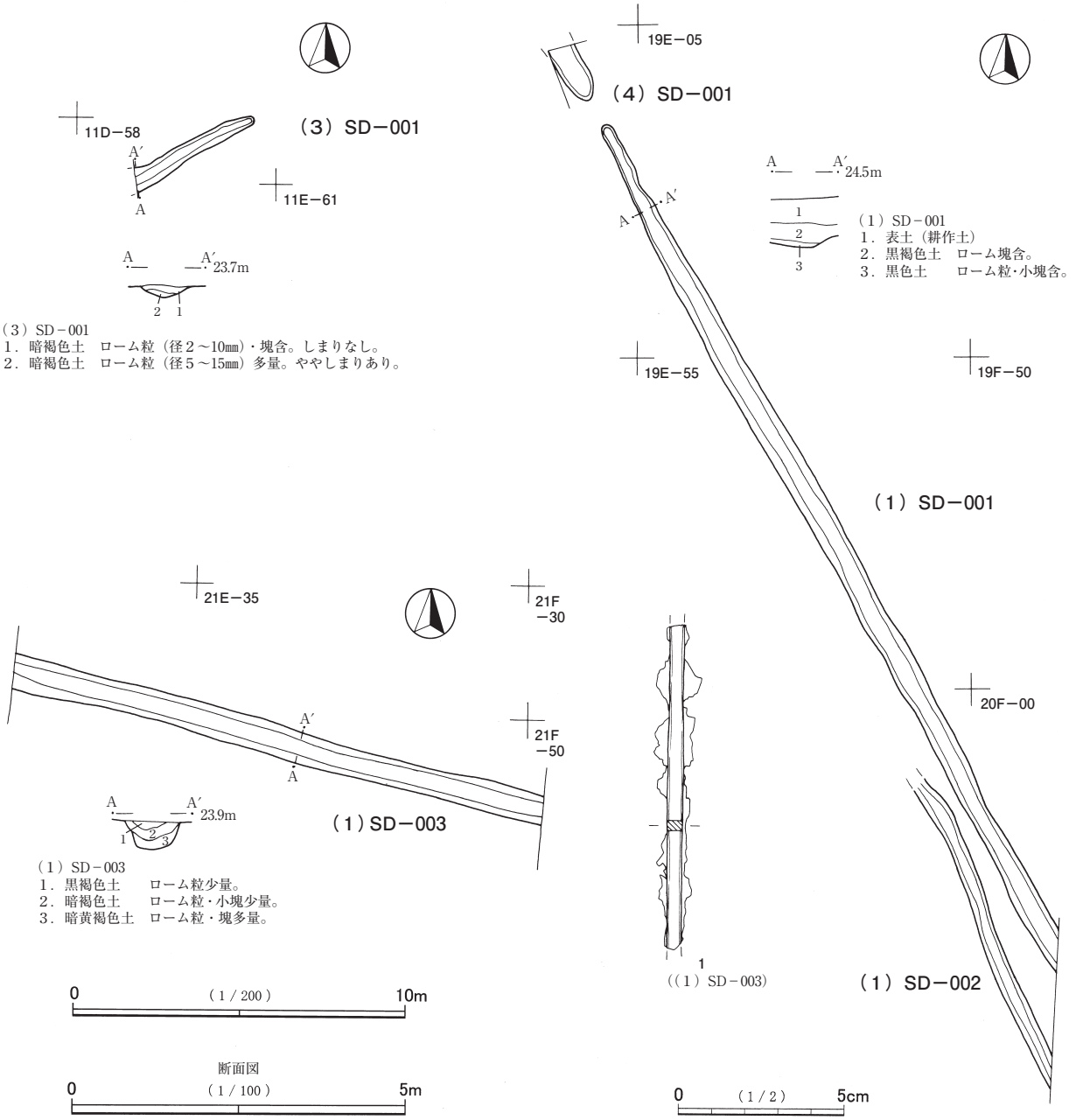
（1）SD−002（第 37 図、図版８） 20E グリッドに位置し、（１）SD−001 の西側に添うように延びるが、20E−08 グリッドから北側への掘り込みは確認できなかった。（１）SD−001 が一直線であったのに比べ、この溝にはわずかに曲折がみられる。幅は約 0.5 m で、深さは 15cm と浅い。覆土は少量のローム粒や塊が含まれる黒褐色土である。出土遺物には、奈良・平安時代と思われる７点の土師器破片がある。

（1）SD−003（第 37 図、図版８・16） 21E グリッドに位置し、調査区を N − 75° − W 方向に一直線に横切る。幅は 0.8 m、長さは 16 m 以上、深さは確認面から 40cm である。覆土は少量のローム粒・塊が含まれる黒褐色土を主体とする。遺物は棒状の鉄製品１点が出土した。両端を欠損しており、厚みはなく、棒状の工具か長頸鏃の頸部と考えられる。幅５mm、厚さ 3.5mm、重量 6.3 g である。

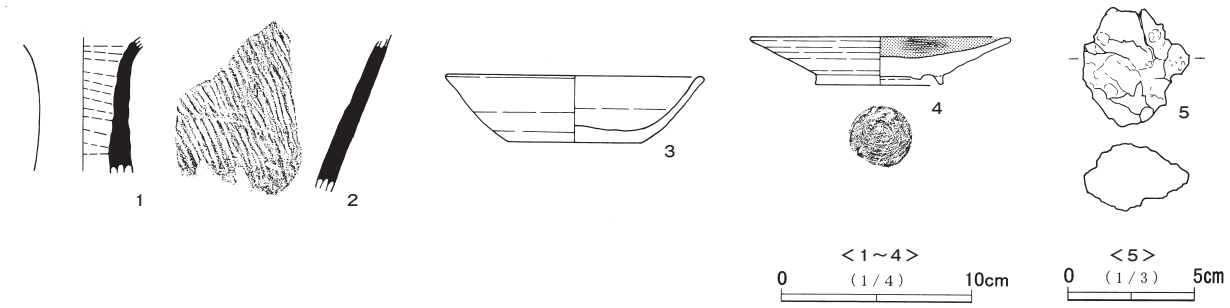
（3）SD−001（第 37 図） 11D ～ 11E グリッド周辺、北側の台地縁辺部で調査区西端に位置し、東西方向に約４m 検出された浅い溝である。印西市教育委員会調査（第８地点）２号溝と同一で、弥生時代の遺構より新しく、付近に分布する奈良･平安時代の遺構の主軸と直行する方向に延びる。断面形は半円形で、浅く弧を描く。幅は 0.96 m、確認面からの深さは最深部で約 25cm である。覆土はローム粒・塊が含まれる暗褐色土を主体とする。

5　遺構外出土遺物（第 38 図、図版 16）

１は須恵器壺瓶類の頸部破片である。（１）地点調査時の表採資料である。胎土は緻密であるが、やや砂っぽい。白色微砂粒が微量含まれる。外面と内面に灰釉が残る。焼成は良好で、色調は灰オリーブ色である。２は須恵器甕の胴部片で、底部に近い部位と考えられる。（４）地点調査時の出土である。外面は平行叩き目で、内面には指圧痕が残る。胎土中には白色砂礫と雲母微砂粒が含まれる。色調は灰色で、焼成はやや不良である。３は弥生時代後期の（４）SI−001 の覆土中から出土した土師器坏である。復元口径 13.6cm、底径 7.0cm、器高 3.5cm である。ロクロ整形で底面と体部下端は回転ヘラケズリが施される。胎土には雲母細粒とスコリア、白色針状物質が含まれる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。４は（２）地点調査時に出土した土師器高台付皿である。復元口径 13.7cm、高台径 6.7cm、器高 2.5cm である。ロクロ整形で、内面はヘラミガキ調整である。底面は回転糸切り離し後、高台を付けている。内面は黒色処理されていたようで、薄く黒みを帯びる。５は縄文時代の（１）SI−001 の覆土中から出土した鉄滓である。最大長 4.5cm、最大幅 4.1cm、厚さ 2.1cm、重量は 43.7 g である。大きさの割に重量がある。鉄塊系遺物（含鉄鉄滓）の可能性がある



第37図　溝状遺構＜奈良・平安時代以降＞



第38図　遺構外出土遺物＜奈良・平安時代＞

第3章　総　括

天神台遺跡は台地全体が遺跡範囲という広大な面積（50万㎡以上）を有する。今までの調査成果から縄文時代から平安時代前半にかけて集落が営まれていたことが判明している。竪穴住居跡以外にも縄文時代の貝塚（天神台貝塚）や古代の寺院（木下別所廃寺）、北側の斜面部には瓦窯跡・鍛冶製鉄遺構も展開しており、長期的に安定した集落が営まれるような生活環境が良好な環境であったことが改めて判明した。

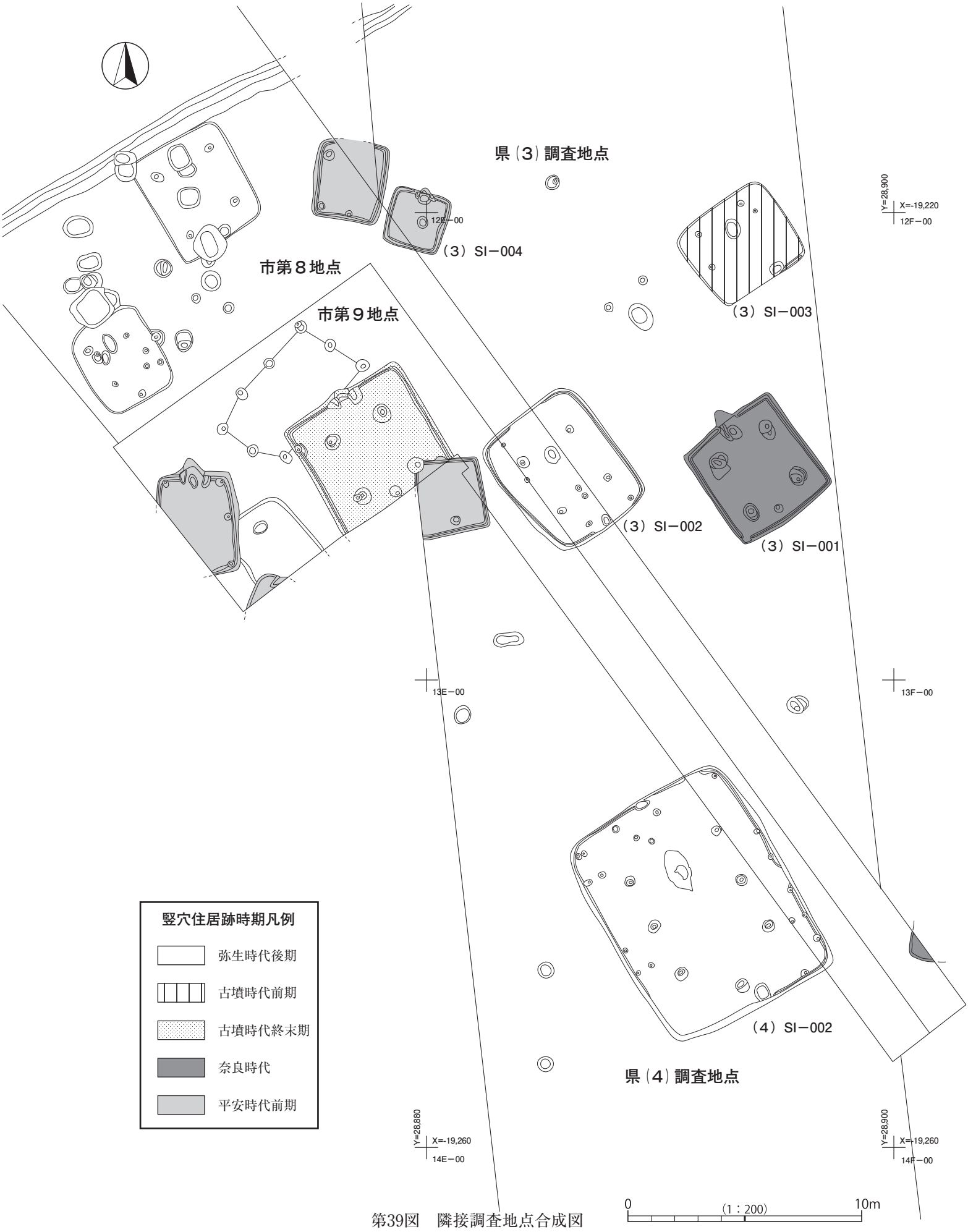
第1節　時代毎の成果概要　（第39図）

旧石器時代では立川ロームⅣ層下部～Ⅴ層に相当する層位から栃木県の高原山産と考えられる黒曜石の剥片石器が2点出土した。周辺を拡張調査したが、追加出土はなく、確認調査で終了した。

縄文時代では中期の竪穴住居跡1軒・土坑4基が検出された。（1）SI－001竪穴からは遺存の良好な深鉢形土器とともに器台と石器がまとまって出土した。一部撹乱部分があるが、床面からの出土がほとんどであり、貴重な資料群である。ほかに遺構外からは各時期の土器片が出土したが、遺構群と同じ加曽利E式の後半が主体である。

弥生時代後期から古墳時代前期では竪穴住居跡を7軒検出した。弥生時代後期の時期が主体である。天神台遺跡では周辺のほとんどの既調査地点で弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。住居跡は重複することなく、遺構密度は濃くないものの、広範囲に当時の集落域が展開していることが想定される。特に今回の調査区北側周辺に竪穴住居跡の分布の集中がみられ（第39図）、その中の（4）SI－002は床面積が74㎡を超え、突出して規模が大きく、印西市でも最大級の規模を誇る。しかし、今回の調査による出土遺物は土器がほとんどで、特殊遺物は出土していない。出土土器[1]は折返し口縁が比較的幅広で、下端に刻み、胴部に附加条縄文・結節文が施文されたものが主体を占める。古相とされる櫛描文系の土器は少なく、逆に後期最終段階に特徴的な口縁下端に貼り瘤をもつ個体は（4）SI－002に限り確認されるため、集落は後期中頃を中心とする時期と想定される。古墳時代前期の竪穴住居跡は調査区の北側に2軒分布する。そのうち、1軒はごく一部の調査で成果は少ない。（3）SI－003はやや幅広の隅丸方形の竪穴住居跡で、覆土が浅かったものの、土器は比較的豊富に出土した。緩やかに内湾する高坏、胴部下半にふくらみを持つ小型壺、台付甕の形状から前期でも前半の資料[2]といえる。小型の袋状不明土製品も伴出しており、用途については今後の類例を待ちたい。なお、古墳時代中期・後期については遺物も含め、検出されていない。周辺の既調査地点でも遺構の検出は他時期に比べ非常に少ない。

奈良・平安時代では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡2棟、土坑9基と溝を検出した。今回の調査区で主体となる時期である。遺物は土器類がほとんどであるが、瓦片や土玉などの土製品、鉄製刀子、鉄滓（椀形滓）が少量出土した。北側に隣接する曽谷窪遺跡では鍛冶遺構が検出されており、台地の縁辺部に関連遺構が存在している可能性がある。今回の調査で出土した瓦は全て平瓦で、凸面に正格子叩き目が施される。周辺において瓦の出土がみられた竪穴住居跡は（2）SI－002・第8地点5号住・第9地点1号住である。いずれも9世紀中頃を前後する時期[3]と考えられ、他の出土遺物には高台付坏・墨書土器・鉄製品が共通するという特徴がみられる。中世以降の遺物はほとんど出土していない。溝については近世まで下るものが含まれるかもしれない。



第39図　隣接調査地点合成図

第40図　周辺調査地点と成果

第３表　天神台遺跡など調査履歴一覧表

遺跡名	地点名	調査年度	調査面積（㎡）	主な時代					主　な　遺　構	文　　献
				縄　文	弥　生	古　墳	奈良	平安		
天神台遺跡	第１地点	1985	（確認）300	■			■	■	縄文竪穴１，奈良・平安竪穴９	1987『天神台遺跡発掘調査保告書』（財）印旛郡市文化財センター第 13 集
天神台遺跡	第２地点	1985	4,500		■				弥生竪穴４，	1987『天神台遺跡発掘調査保告書』（財）印旛郡市文化財センター第 13 集
天神台遺跡	第３地点	1985	380	■	■			■	縄文竪穴１・炉跡１，弥生竪穴４，平安竪穴３	1987『天神台遺跡発掘調査保告書』（財）印旛郡市文化財センター第 13 集
天神台遺跡	第４地点	1989	400	■	■		■		縄文炉穴４・土坑２，弥生竪穴７，奈良竪穴２	1991『天神台・ヤジタ遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
天神台遺跡（天神台呑内）	第５地点	1993	1,789	■	■	■	■	■	縄文土坑 28，弥生竪穴３，古墳竪穴１，奈良・平安竪穴 16・掘立 17・土坑 13	1994『年報 10 －平成５年度－』（財）印旛郡市文化財センター
		1995	（確認）250				■	■	奈良・平安竪穴８・土坑１	1997『年報 12 －平成７年度－』（財）印旛郡市文化財センター
天神台遺跡	第６地点	1994	（確認）106		■	■	■	■	弥生竪穴２，古墳竪穴１，奈良・平安竪穴１	1996『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－平成６年度－』千葉県教育庁文化課
天神台遺跡	第７地点	1998	690	■	■	■			縄文竪穴１・土坑１，弥生竪穴４，古墳後掘立１	2000『天神台遺跡』（財）印旛郡市文化財センター第 160 集
天神台遺跡	第８地点	1999	375		■			■	弥生竪穴４，平安竪穴３・掘立１・土坑	2001『印西市内遺跡発掘調査報告書－平成 11 年度・平成 12 年度－天神台遺跡（第８地点）』印西市教育委員会
天神台遺跡	第９地点	2001	162		■	■	■	■	弥生竪穴３，古墳竪穴１，奈良・平安竪穴３・掘立１	2003『印西市内遺跡発掘調査報告書－平成 14 年度－天神台遺跡（第９地点）』印西市教育委員会
天神台遺跡	第 10 地点	2001	（確認）58			■	■	■	古墳竪穴２，奈良・平安竪穴４・掘立１	2003『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－平成 13 年度－』千葉県教育庁文化財課
天神台遺跡	第 11 地点	2002	165	■	■				縄文土坑３，弥生竪穴３	2004『天神台遺跡（第 11 地点）発掘調査報告書－不特定遺跡発掘調査助成事業－』印西市教育委員会
天神台遺跡	第 12 地点	2002	（確認）550		■	■	■	■	弥生竪穴１，古墳竪穴３，奈良・平安竪穴１	2004『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－平成 14 年度－』千葉県教育庁文化財課
天神台遺跡	第 13 地点	2003	（確認）47						－	2004『平成 15 年度印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会
天神台遺跡	第 14 地点	2008	（確認）210			■			古墳竪穴４・土坑２	2014『平成 17 年度～平成 24 年度　印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会
天神台遺跡	第 15 地点	2010	（確認）62						－	2014『平成 17 年度～平成 24 年度　印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会
天神台遺跡	(1) ～ (5) 地点	2011 ～ 2015	1,737	■	■	■	■	■	縄文竪穴１・土坑４，弥生竪穴５，古墳竪穴２，奈良・平安竪穴 10・掘立２・土坑 10	本報告書
木下別所廃寺	第一次・第二次	1977・1978	（確認）				■	■	７Ｃ後葉基壇３，奈良・平安竪穴８	1978『木下別所廃寺第一次発掘調査概報』千葉県教育委員会ほか 1979『木下別所廃寺第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会ほか
曾谷ノ窪瓦窯跡	（第１地点）	1979	（確認）				■		７Ｃ後葉瓦窯２・灰原１	1980『曾谷ノ窪瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会　曾谷ノ窪瓦窯調査会
曾谷ノ窪瓦窯跡	第２地点	2002	140				■	■	奈良・平安竪穴１・土坑３	2002『曾谷ノ窪瓦窯跡（第２地点）』（財）印旛郡市文化財センター
曽谷窪遺跡	（郡市調査地点）	1992	5,320	■			■	■	縄文炉穴５，奈良・平安竪穴１・鍛冶炉２	1995『曽谷窪遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
曽谷窪遺跡	（県調査地点）	2010	610		■		■	■	弥生竪穴５，奈良・平安竪穴４・土坑３	2011『印西市曽谷窪遺跡』（財）千葉県教育振興財団
天神台貝塚	Ａ～Ｇ地点	1960		■					縄文地点貝層７	1961『印旛手賀』早稲田大学考古学研究室報告第８冊

第２節　遺構の分布と遺物の検討（第 39 ～ 43 図、第３～５表）

今回の調査区は遺跡の北西側、現在の印西中学校の東側の台地平坦部にあたり、幅約 20 m、南北方向 275 mと細長く、広大な遺跡の北半分に南北方向の確認トレンチを入れたような形ともいえる。今回の調査区を含め、これまで周辺の調査成果をまとめることにする（第 40 図・第３表）。

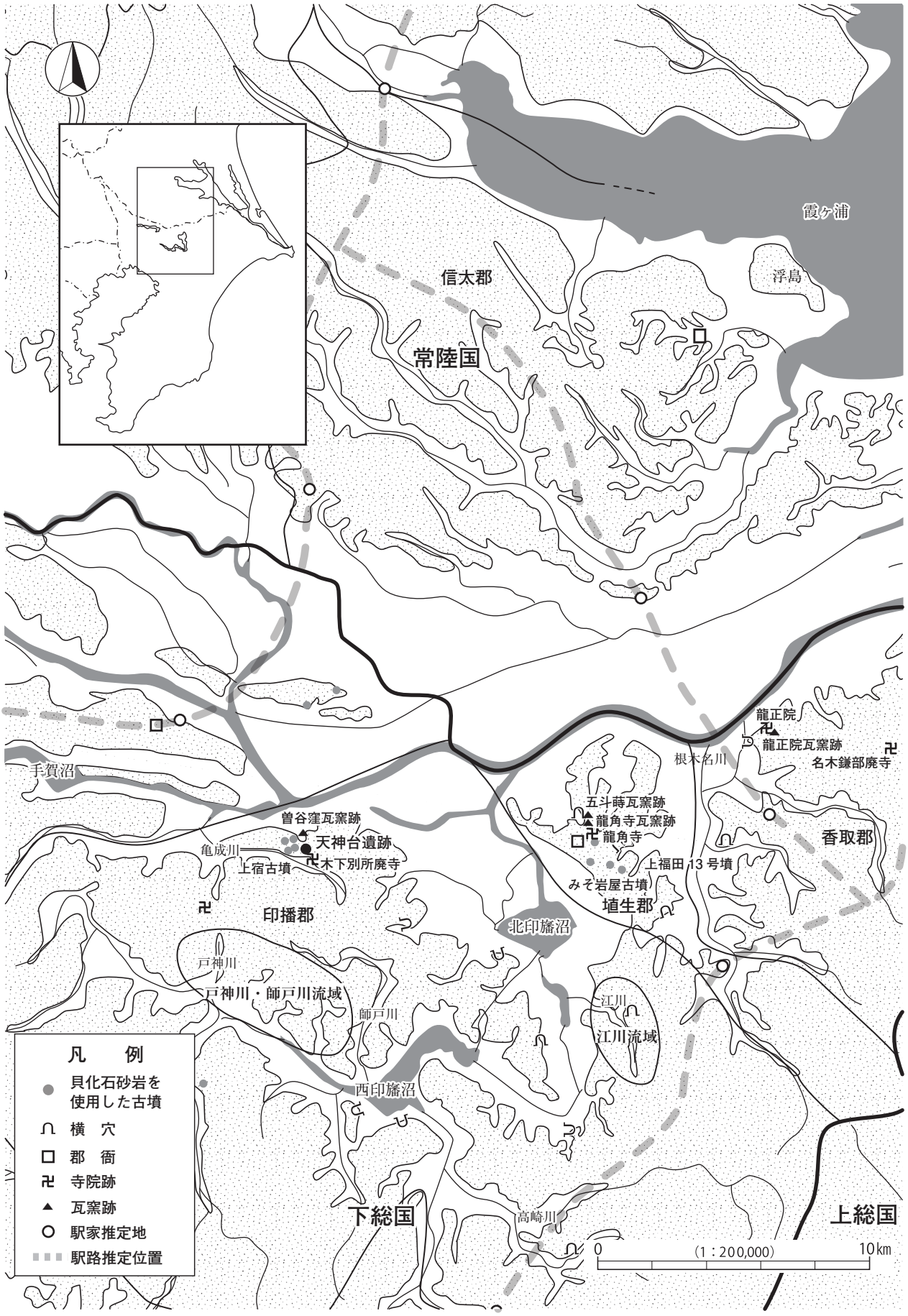
旧石器時代については、今回の調査区で２点出土したのみで、上層の遺構の覆土に含まれる形での出土報告もなく、調査成果に乏しい状況である。

縄文時代では台地北東部に中期及び後・晩期とされる天神台貝塚が所在することもあり、各調査地点で遺構・遺物の分布がみられる。しかし、貝塚周辺には調査地点はなく、一番近接する第 12・14 地点からは該期の遺構は検出されず、直接貝塚に関連する集落の様相については明らかではない。今までに検出されている縄文時代の竪穴住居跡はすべて中期・加曽利Ｅ式期のものである。遺構は台地中央から西に張り出す部分の付け根付近にかけてやや分布の集中がみられる。中期以外では早期と考えられる炉穴が台地の縁辺に近い調査地点（第４地点・曽谷窪遺跡など）から複数検出されている。後・晩期については遺物は一定量出土するものの遺構の存在は明らかになっていない。

弥生時代では、多くの調査地点から竪穴住居跡が検出されている。最も古いもので第 11 地点で中期末葉に位置づけられる壺形土器の出土がある。確認調査のみで報告書の未完の調査地点もあり具体的な時期が判明しないものが多いが、ほとんどが後期に属し、特に後期前葉から中葉の時期が主体と考えられる。各地点での遺物の出土量は多くなく、重複関係のある遺構もないため、時期的に連続性のある大集落が展開しているというよりは、中小規模の集落が台地上に分布している状況がうかがえる。なお、第４地点においては遺構の密集度が高く、小さく張り出した台地全体に集落が展開している可能性が高い。今回調査区北側と第８・９地点（第 39 図）においても比較的遺構が密集し、主軸の方向がほとんど同じで、その中に大規模な竪穴住居跡も存在していることから、当時の集落の中心域に相当すると思われる。

古墳時代では、前期の住居跡が今回調査区と第 10・12 地点で散在的に確認されている。確実に中期と判断できる遺構は検出されていない。後期以降の竪穴住居跡は少ないながら台地の中央から東側の調査地で点在する。第５地点の遺構の時期は未報告のため明確でないが、規模の大きい住居跡が検出されており、該期の資料が比較的まとまっている可能性がある。今後、第５地点の本報告と本事業の南半分の発掘調査が実施されれば、南東にある木下別所廃寺との関連を含めてより具体的な様相が明らかになるはずである。終末期古墳については天神台遺跡内では確認されていないが、同台地の西、手賀沼側に細く伸びた先（第 41 図[4)]）に貝化石砂岩を使用した横穴式石室を有する上宿古墳が造営される。墳形や規模、副葬品が明らかになっていないが、貝化石砂岩のみで筑波石を使用していない点や横穴式石室の構造がみそ岩屋古墳・上福田 13 号墳と類似し、時期的には７世紀中頃以降と考えられる。周辺にも遺存は不良であるが後庵山２号墳、森内古墳、大森古墳など内部主体に同石材を使ったとされる後期以降の古墳が集中する。これらの古墳群と木下別所廃寺との時期・立地状況が、従来から指摘があるように印旛沼をはさんだ対岸の龍角寺古墳群における終末期古墳（方墳）の造営と龍角寺の創建との関連に類似し興味深い。

奈良・平安時代の遺構は、台地西側（第２・11 地点）を除いてほとんどの調査地点で検出されている。特に、今回の事業範囲に沿った調査地点に分布のまとまりがみられ、その北側（県（２）～（４）地点）と、南側（第５地点）で竪穴住居跡と掘立柱建物跡がセットで検出されていることから、集落の中心域と想定され、この時期の集落が大きく台地の北側と南側に展開している可能性が高い。天神台遺跡（曽谷窪



第41図　印旛沼周辺の古墳と集落分布

遺跡含む）と周辺の遺跡群で調査され、時期の判明している竪穴住居跡の時期別軒数を第42図[5]に示した。現状では天神台遺跡の集落は７世紀末から９世紀の後半にかけて比較的安定的に継続していたと考えられる。同じ印旛沼の西側、手賀沼寄りに位置する戸神川・師戸川流域の遺跡群とは７世紀代の竪穴住居跡が少ない点で共通し、９世紀代に集落が大きく展開する点が異なる。一方、印旛沼の東岸南部に位置する江川流域の遺跡群とは各時期安定的に集落が継続する点で共通し、古墳時代後期から継続する遺跡が多い点が異なる。天神台遺跡の集落時期については、木下別所廃寺出土瓦の年代観との問題がある。瓦の年代は軒丸瓦の文様から龍角寺式軒丸瓦の系譜とされ、７世紀後葉が与えられているが、現状では天神台遺跡だけでなく、曽谷ノ窪瓦窯跡や木下別所廃寺からもその時期に該当する遺構・遺物の出土に乏しい。成田市の名木鎌部遺跡と名木鎌部廃寺[6]でも同様で、寺院に隣接した集落遺跡を広範囲調査したにもかかわらず、瓦の想定年代に近い遺構・遺物は検出されていない。木下別所廃寺との関連については前述のとおり、天神台遺跡の立地する台地南側の発掘成果が明らかになる今後に期待したい。

この時期の印旛郡内の遺跡から出土する土器には、常陸地域からの搬入が多いことが近年指摘されている[7]。今回調査区の竪穴住居跡出土土器について全破片を分類し、土器の種別ごとに重量を計測した（第４表・第43図）。土器全体では60％を常陸産と考えられる土師器甕が占め、坏類も含めると約65％が常陸産の土器が搬入されていることが明らかとなった。武蔵産と考えられる土器の出土量は非常に少ない。８世紀後半に常陸産の土器の占める割合が特に多く、土師器甕に限れば９割近くが常陸型甕であった。在地産甕のほとんどが小型甕に分類され、在地での土器の作り分けが行われていたと考えられる。これらの土器の様相からみて、天神台遺跡の集落では手賀沼・印旛沼の水運を利用し、常陸国と活発な交易が行われていたことが想定される。

天神台・曽谷窪ほか

時期	天神台・曽谷窪ほか
7 世紀後半	1
7 世紀末葉～8 世紀初頭	3
8 世紀第 2 四半期～中頃	4
8 世紀中頃～末	4
8 世紀末～9 世紀第 1 四半期前	
9 世紀第 1 四半期後～9 世紀中葉	5
9 世紀中葉～後葉	3
9 世紀後葉～10 世紀初	1
10 世紀初～中葉	1

江川流域

時期	台方周辺※1	公津の杜周辺※2	飯仲金堀 A	伊藤白幡 A～C	総計
7 世紀後半	14	21		8	43
7 世紀末葉～8 世紀初頭	16	42		8	66
8 世紀第 2 四半期～中頃	25	41		3	69
8 世紀中頃～末	17	65	5	5	92
8 世紀末～9 世紀第 1 四半期前	4	57	2	3	66
9 世紀第 1 四半期後～9 世紀中葉	15	65	2	10	92
9 世紀後葉～10 世紀初	26	7		12	45
10 世紀初～中葉	7			2	9

※1　台方周辺（台方下平Ⅰ・台方宮代・船形手黒遺跡）
※2　公津の杜周辺（大袋台畑・大袋塔之下・大袋山王２・大袋腰巻・腰巻 11 次・大袋小谷津・飯田町南向野遺跡）

戸神川～師戸川流域

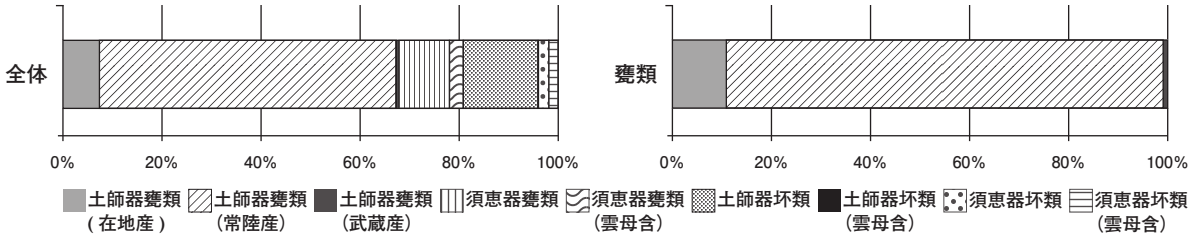
時期	船尾白幡	鳴神山	南西ヶ作	北の台	油免２次	前戸＋東海道	松崎	東場	総計
7 世紀後半						7			7
7 世紀末葉～8 世紀初頭	3	6			3	9			21
8 世紀第 2 四半期～中頃		16				3		8	27
8 世紀中頃～末	1	25			2			6	34
8 世紀末～9 世紀第 1 四半期前	17	37	3	2	1	2	8		70
9 世紀第 1 四半期後～9 世紀中葉	8	68	6	1	5	2	5	3	98
9 世紀中葉～後葉	15	29	10				1		55
9 世紀後葉～10 世紀初	23	24	2						49
10 世紀初～中葉	2	2	2						6

第42図　時期別竪穴住居跡軒数比較

第４表　奈良・平安時代土器種類別重量表

単位：ｇ

遺構No.	総重量	時　期	土師器甕類（在地産）	土師器甕類（常陸産）	土師器甕類（武蔵産）	須恵器甕類	須恵器甕類（雲母含）	土師器坏類	土師器坏類（雲母含）	須恵器坏類	須恵器坏類（雲母含）
（１）SI－002	1,379	A	239	353	0	341	0	327	0	119	0
（２）SI－002	12,451	C	1,758	2,709	0	4,460	1,081	2,270	37	88	48
（２）SI－003	6,382	B	936	4,045	248	138	318	304	0	250	143
（２）SI－004	2,296	A	122	2,041	0	34	0	99	0	0	0
（２）SI－005	5,210	B	342	4,416	0	117	81	233	0	12	9
（３）SI－001	737	A	56	264	0	0	0	198	0	32	187
（３）SI－004	1,442	C	159	1,280	0	0	0	0	0	3	0
（４）SI－003	553	C	82	225	0	27	76	140	0	3	0
（４）SI－004	2,459	B	90	1,356	130	189	310	16	11	26	331
（５）SI－001	33,636	B	1,073	23,271	0	1,433	0	6,474	19	873	493
合計	66,545	A ～ C	4,857	39,960	378	6,739	1,866	10,061	67	1,406	1,211
全　体　比　率			7.3%	60.0%	0.6%	10.1%	2.8%	15.1%	0.1%	2.1%	1.8%
全体 種類別 比率			10.7%	88.4%	0.8%	78.3%	21.7%	99.3%	0.7%	53.7%	46.3%
A（７世紀末～８世紀前）		種類別比率	13.6%	86.4%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	44.7%	55.3%
B（８世紀中～後半）		種類別比率	6.8%	92.1%	1.1%	72.6%	27.4%	99.6%	0.4%	54.3%	45.7%
C（９世紀）		種類別比率	32.2%	67.8%	0.0%	79.5%	20.5%	98.5%	1.5%	66.2%	33.8%



第43図　出土土器重量比率

注１）弥生時代後期の土器編年については下記文献を参考とした。

1999 髙花宏行「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について」『奈和』第 37 号

2000『東日本弥生時代後期の土器編年』第９回東日本埋蔵文化財研究会

2015 小林 嵩「下総の弥生時代後期土器編年」『考古学論攷Ⅱ　柳澤清一先生退職とともに』千葉大学文学部考古学研究室

２）古墳時代前期の土器編年については下記文献を参考とした。

2000 加藤修司ほか『研究紀要 21　房総地方における前期古墳の展開』（財）千葉県文化財センター

2001 髙花宏行「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『研究紀要２』（財）印旛郡市文化財センター

３）奈良・平安時代の土器編年については下記文献を参考とした。

2004 郷堀英司「土器の編年－奈良・平安時代」『千葉県の歴史』資料編 考古４

2007『四街道市小屋ノ内遺跡（３）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』千葉県教育振興財団調査報告第 586 集

４）第 41 図は下記文献を主に参考にして作成した。

2009 山路直充「寺の成立とその背景」『房総と古代王権　東国と文字の世界』高志書院

2009 小牧美知枝「集落の移りかわり」『房総と古代王権　東国と文字の世界』高志書院

５）第 42 図は小牧（2014）文献をベースにその後の調査成果を追加して作成した。

2014 小牧美知枝「印播郡東部と埴生郡の遺跡」『下総国戸籍　遺跡編』市川市史編さん事業調査報告書

６）名木鎌部廃寺出土山田寺式丸瓦について沼澤氏は周辺の遺構・遺物の年代から８世紀後半での使用の可能性も想定している。

1998 沼澤 豊「名木鎌部廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古３（奈良・平安時代）』千葉県

2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 13 －成田市名木鎌部遺跡－』千葉県教育振興財団調査報告第 672 集

７）2014　小林信一「人々のくらしと集落の展開」『佐倉市史』考古編　佐倉市史編さん委員会・佐倉市

2016『印西市東場遺跡・馬見台遺跡』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 12 集

写　真　図　版

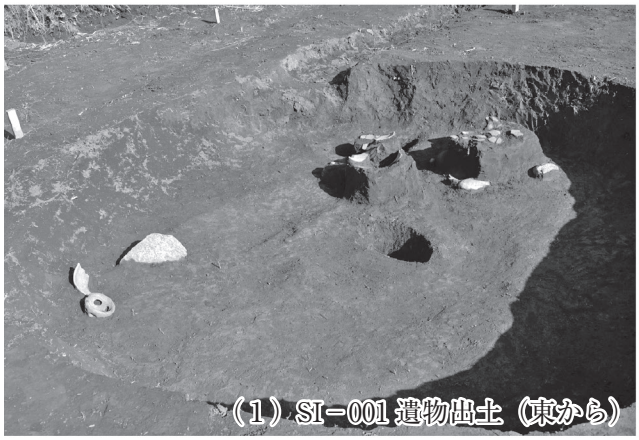
航空写真（S＝約 1/10,000）

調査前（北から）

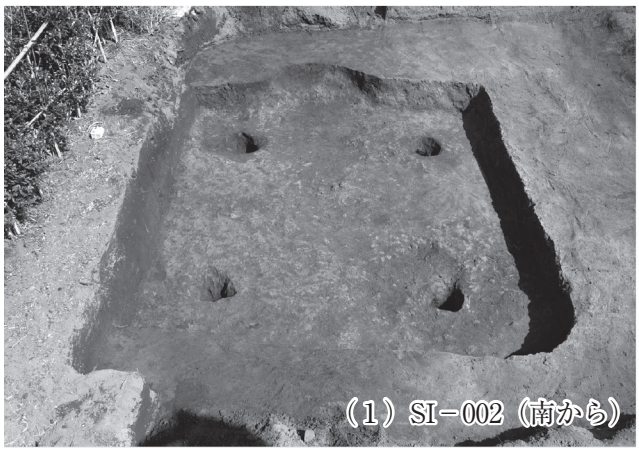
確認調査状況（南から）

19E－37 断面（南から）

15E－54・63（北東から）

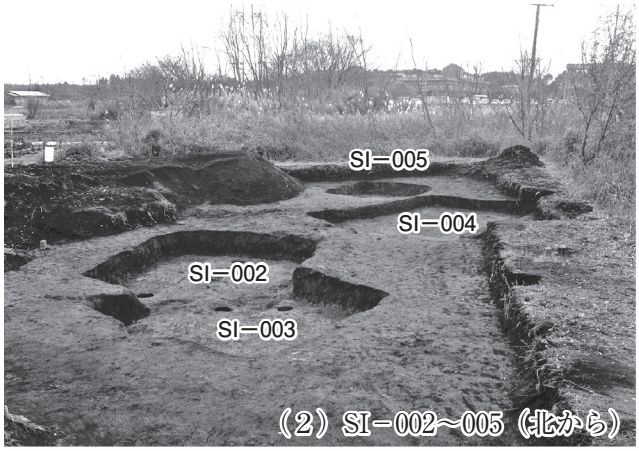

（1）SI－001 遺物出土（東から）

（1）SI－001（北東から）


（1）SI－002（南から）

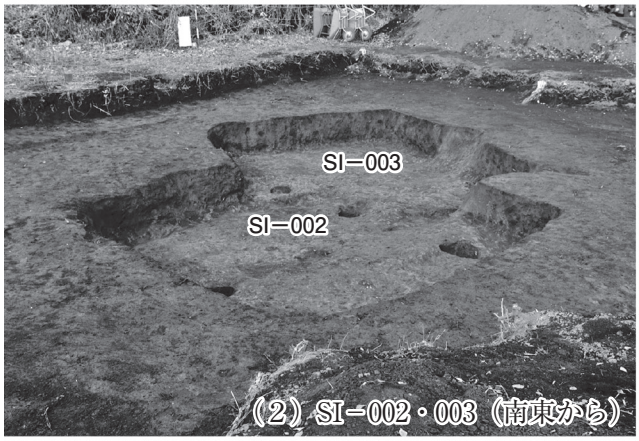
（2）SI－001（南東から）

調査前･確認調査･旧石器･竪穴住居跡（1）



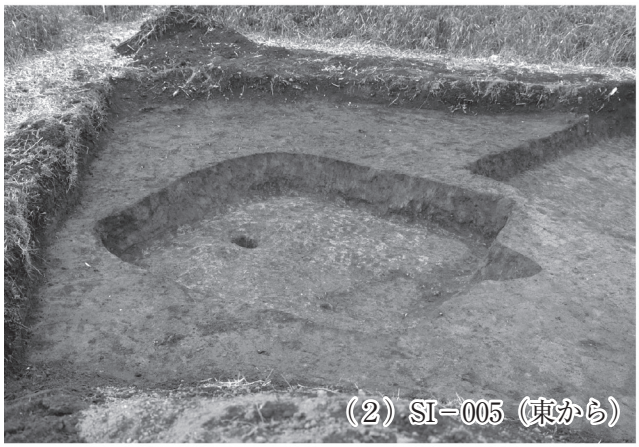
（2）SI−002〜005（北から）

（2）SI−003 カマド（南西から）



（2）SI−002・003（南東から）

（2）SI−004（東から）


（2）SI−005（東から）

（3）SI−001 遺物出土（南東から）

（3）SI−001（南東から）

（3）SI−002（南東から）

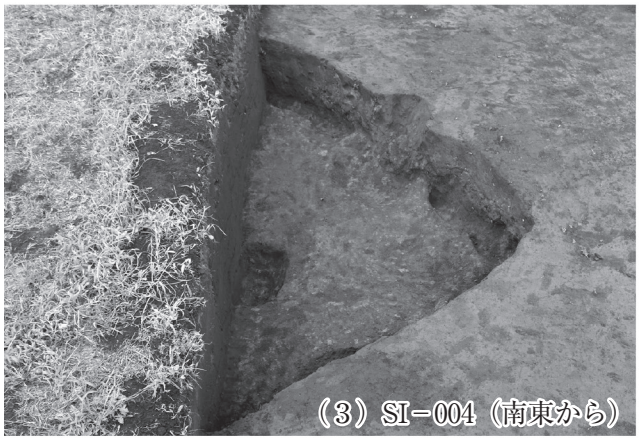
竪穴住居跡（2）

（3）SI－003 遺物出土（南から）

（3）SI－003（南から）

（3）SI－004 カマド（南西から）

（3）SI－004 遺物出土（南西から）

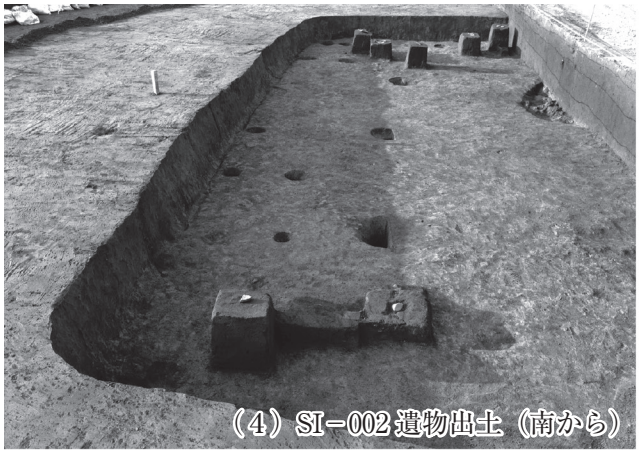

（3）SI－004（南東から）

（4）SI－001＜南側＞遺物出土（東から）

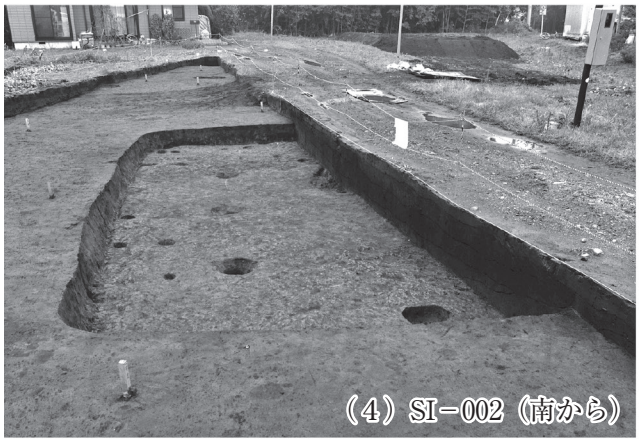
（4）SI－001＜北側＞（西から）

（4）SI－001＜南側＞（南西から）

竪穴住居跡（3）


（4）SI－002 遺物出土（南から）

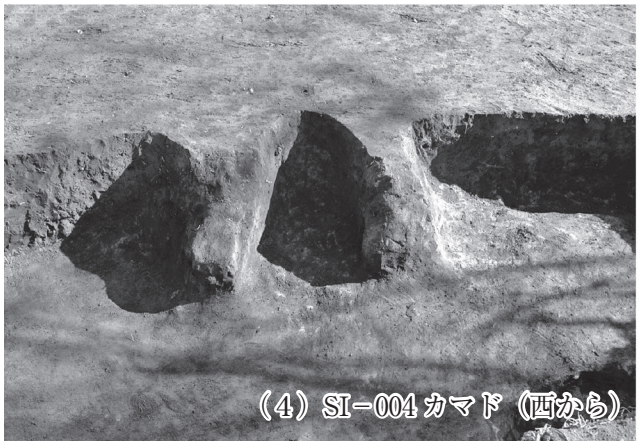
（4）SI－002（北から）


（4）SI－002（南から）

（4）SI－003 遺物出土（北西から）

（4）SI－003（西から）

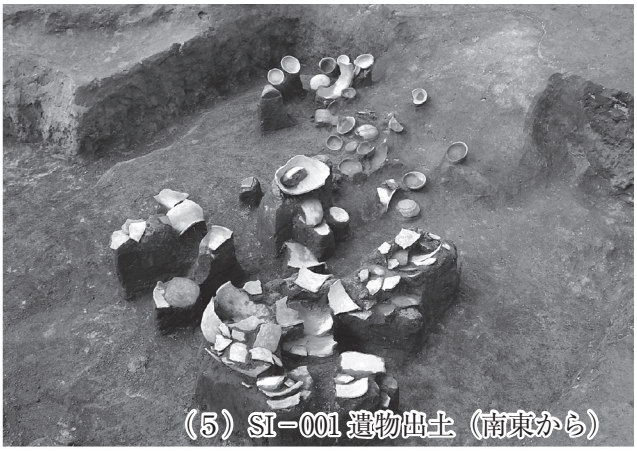
（4）SI－004 遺物出土（北から）


（4）SI－004 カマド（西から）

（4）SI－004（東から）

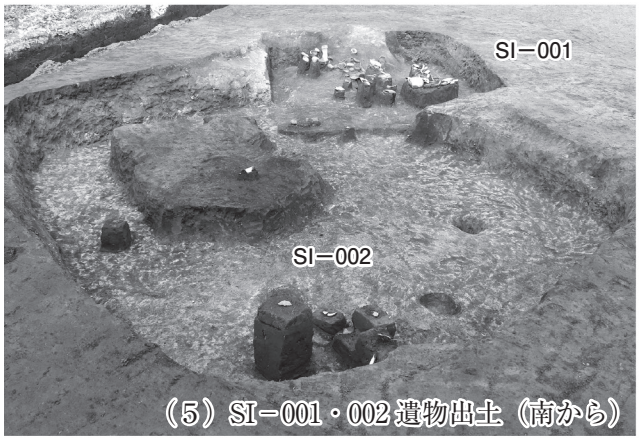
竪穴住居跡（4）

（5）SI－001 上層部遺物出土（西から）

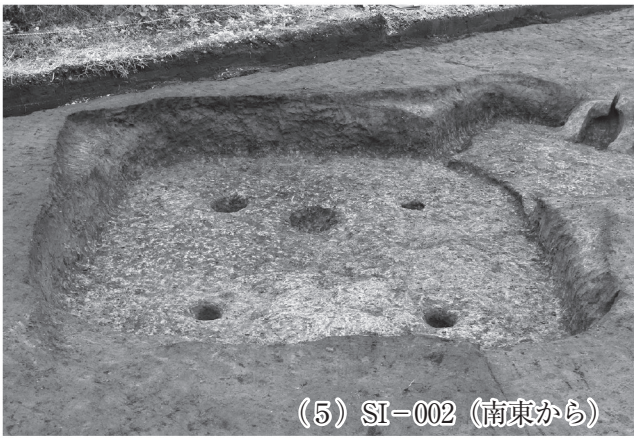

（5）SI－001 遺物出土（南東から）

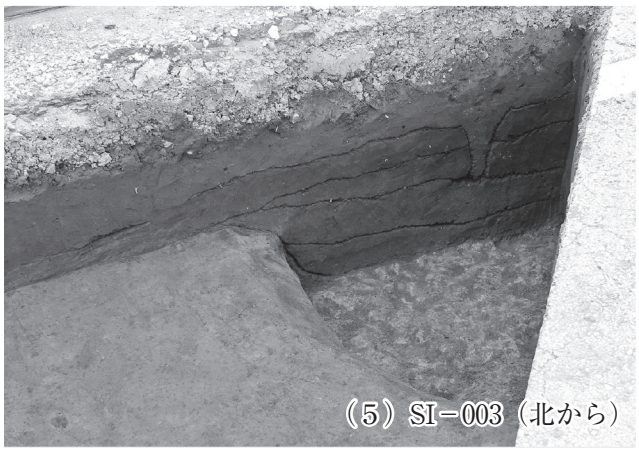
（5）SI－001 カマド（南から）

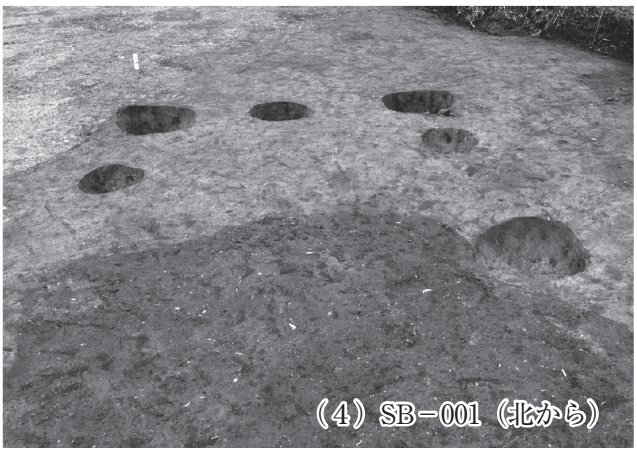
（5）SI－001（南から）



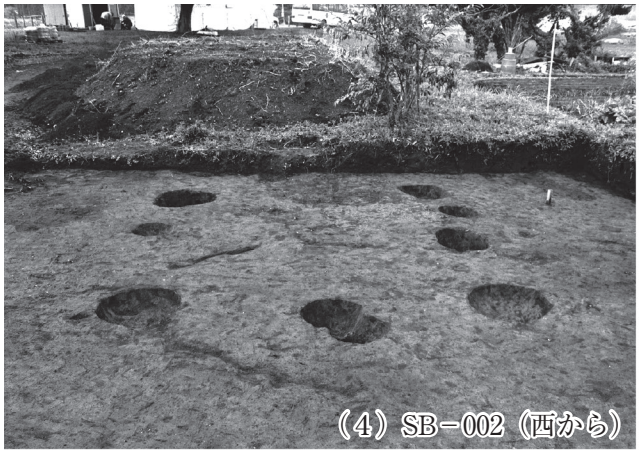
（5）SI－001・002 遺物出土（南から）


（5）SI－002（南東から）


（5）SI－003（北から）

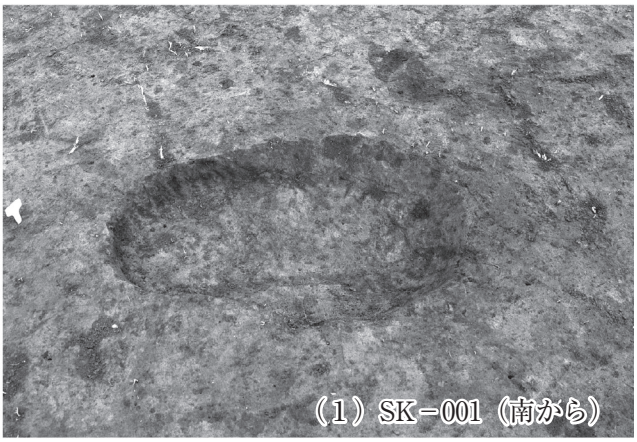

（4）SB－001（北から）

竪穴住居跡（5）・掘立柱建物跡（1）

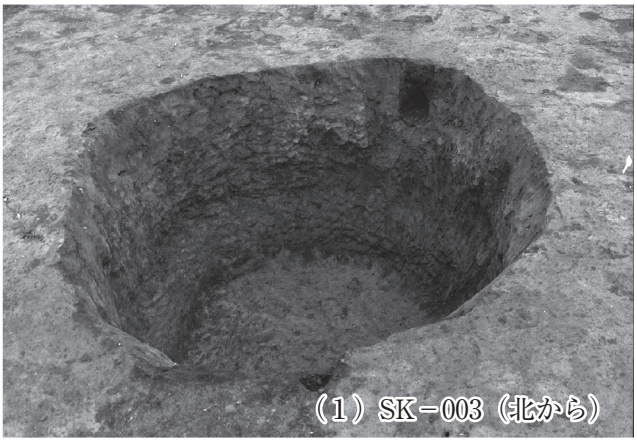

（4）SB－002（西から）

（5）ピット群 遺物出土（東から）

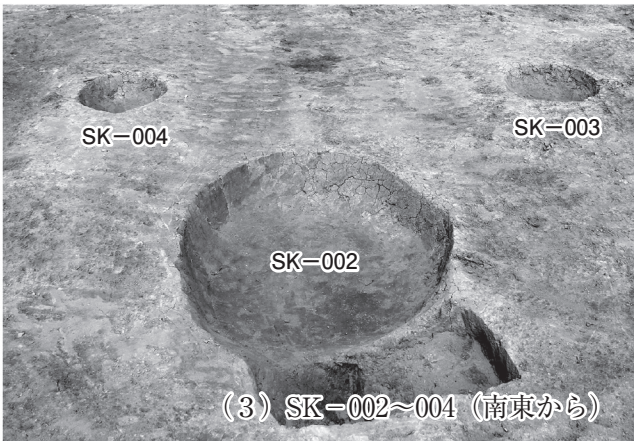
（1）SK－001 遺物出土（南西から）


（1）SK－001（南から）

（1）SK－002（南から）


（1）SK－003（北から）

（3）SK－001（西から）



（3）SK－002～004（南東から）

掘立柱建物跡（2）・ピット・土坑（1）

（3）SK－005（西から）

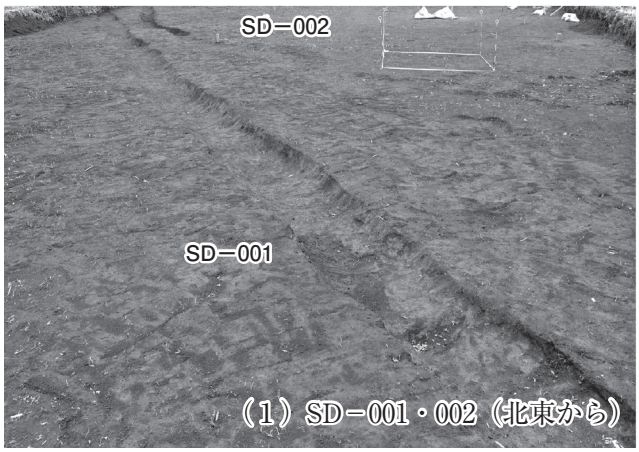
（4）SK－001（北西から）

（4）SK－002（北西から）

（4）SK－003（北東から）

（4）SK－004（東から）

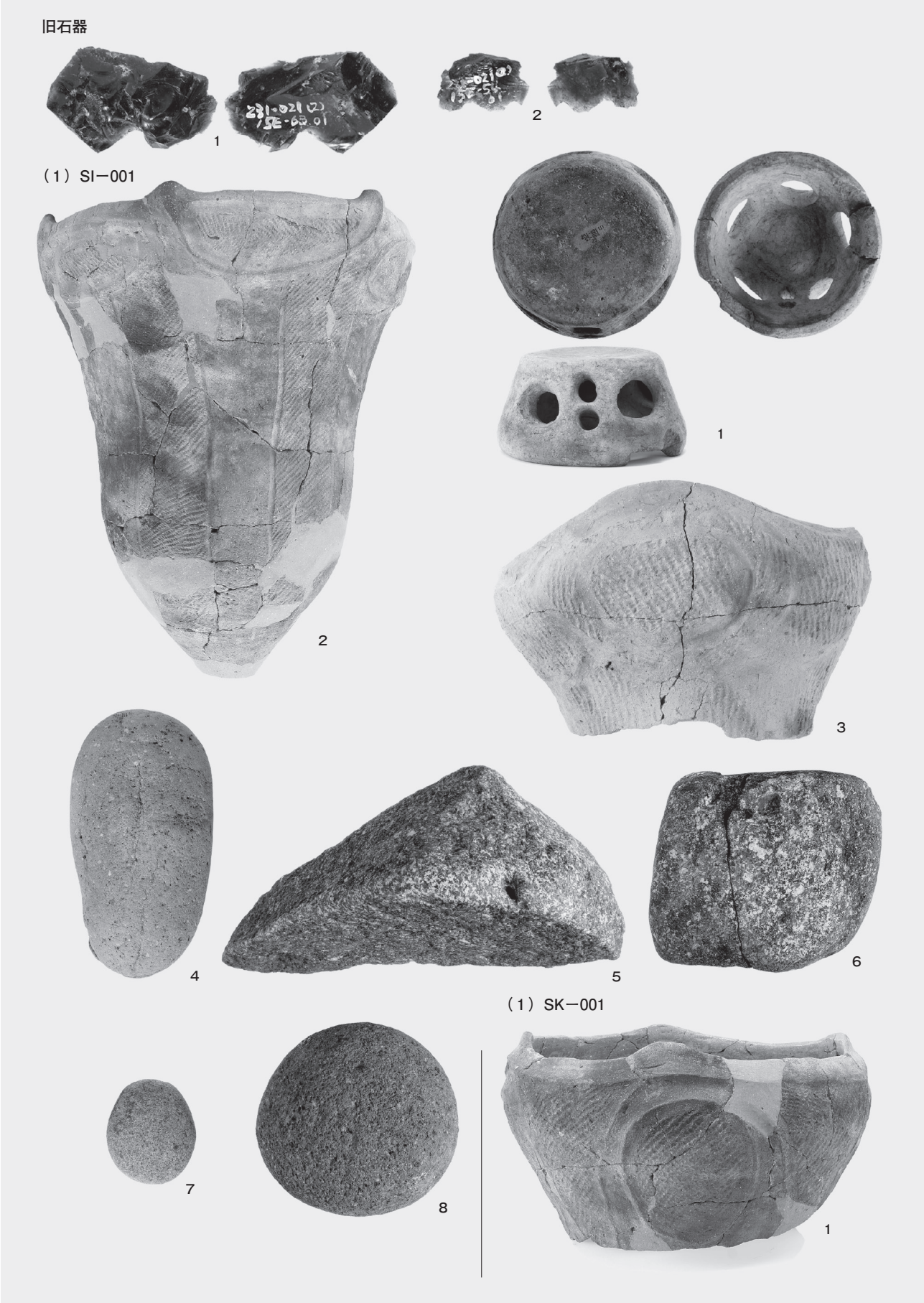
（4）SK－005（東から）



（1）SD－001・002（北東から）

（1）SD－003（西から）

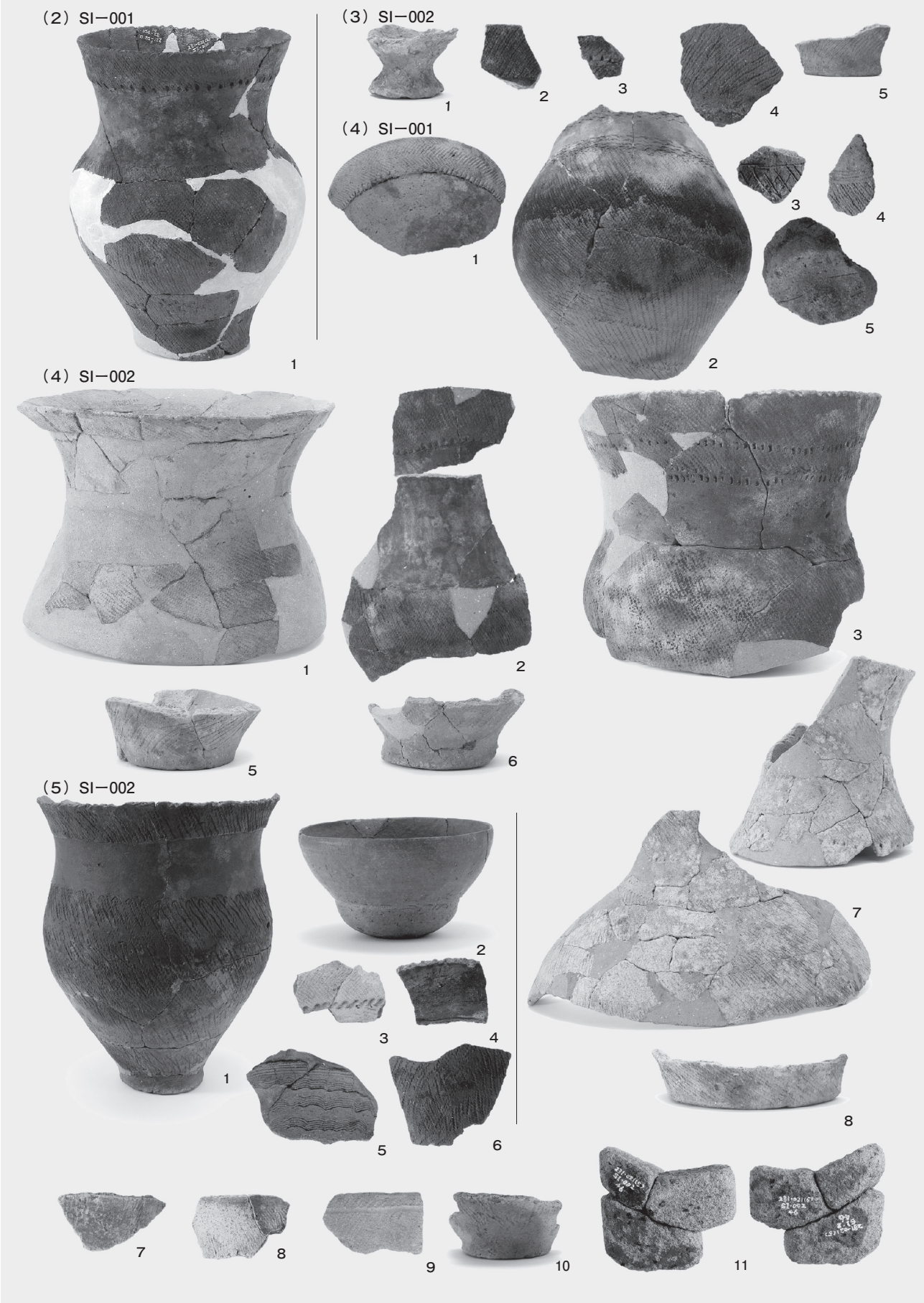
土坑（2）・溝



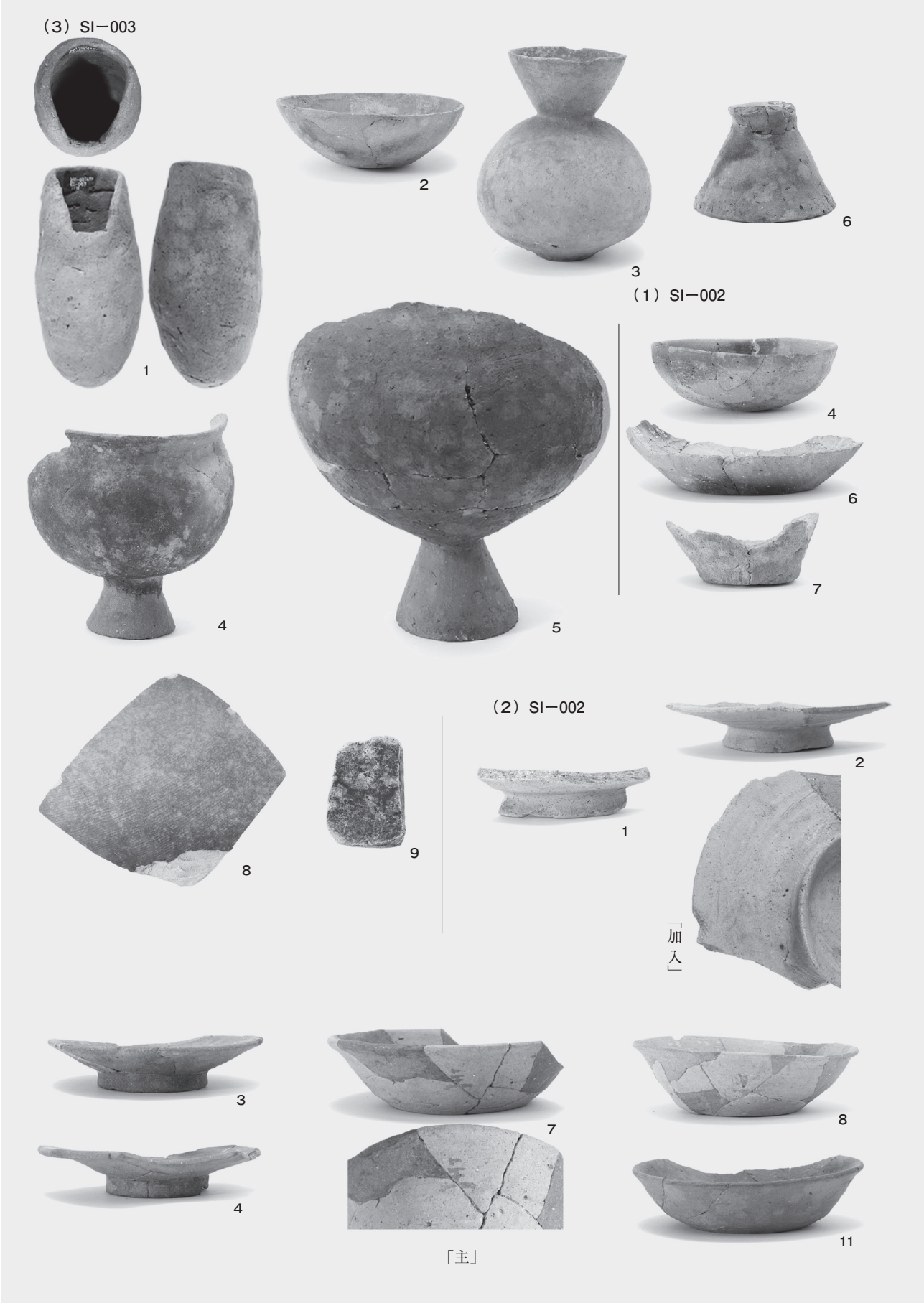
旧石器・縄文時代遺物（1）

（1）SK－002
1
2
3
4
5
6
7
（1）SK－003
1
2
3
4
5
6
7
8
9
遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

縄文時代遺物（2）


（2）SI−001
1
（3）SI−002
1
2
3
4
5
（4）SI−001
1
2
3
4
5
（4）SI−002
1
2
3
5
6
（5）SI−002
1
2
3
4
5
6
7
8
7
8
9
10
11

弥生時代遺物

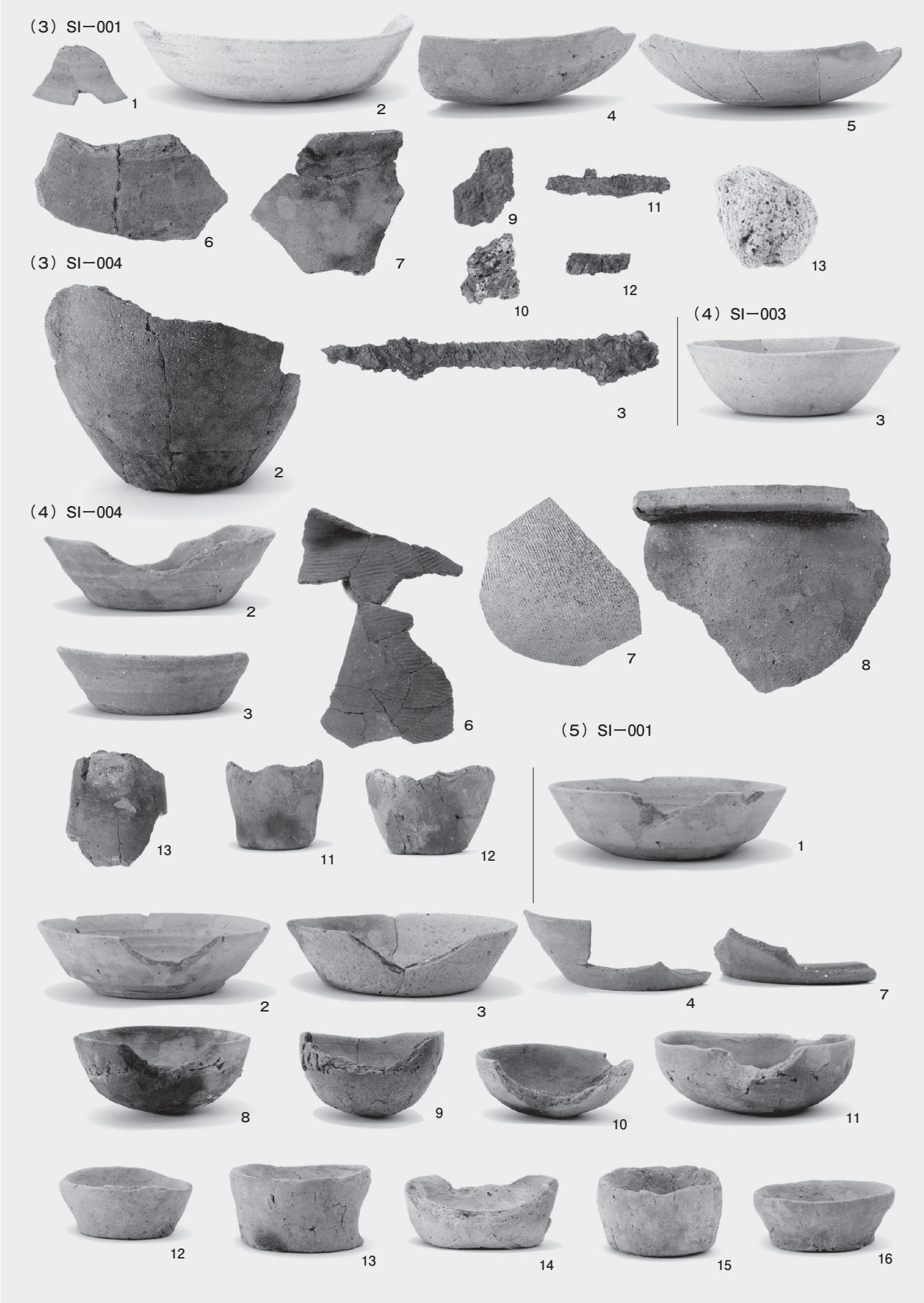


古墳・奈良・平安時代遺物（1）

（2）SI−002
12
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

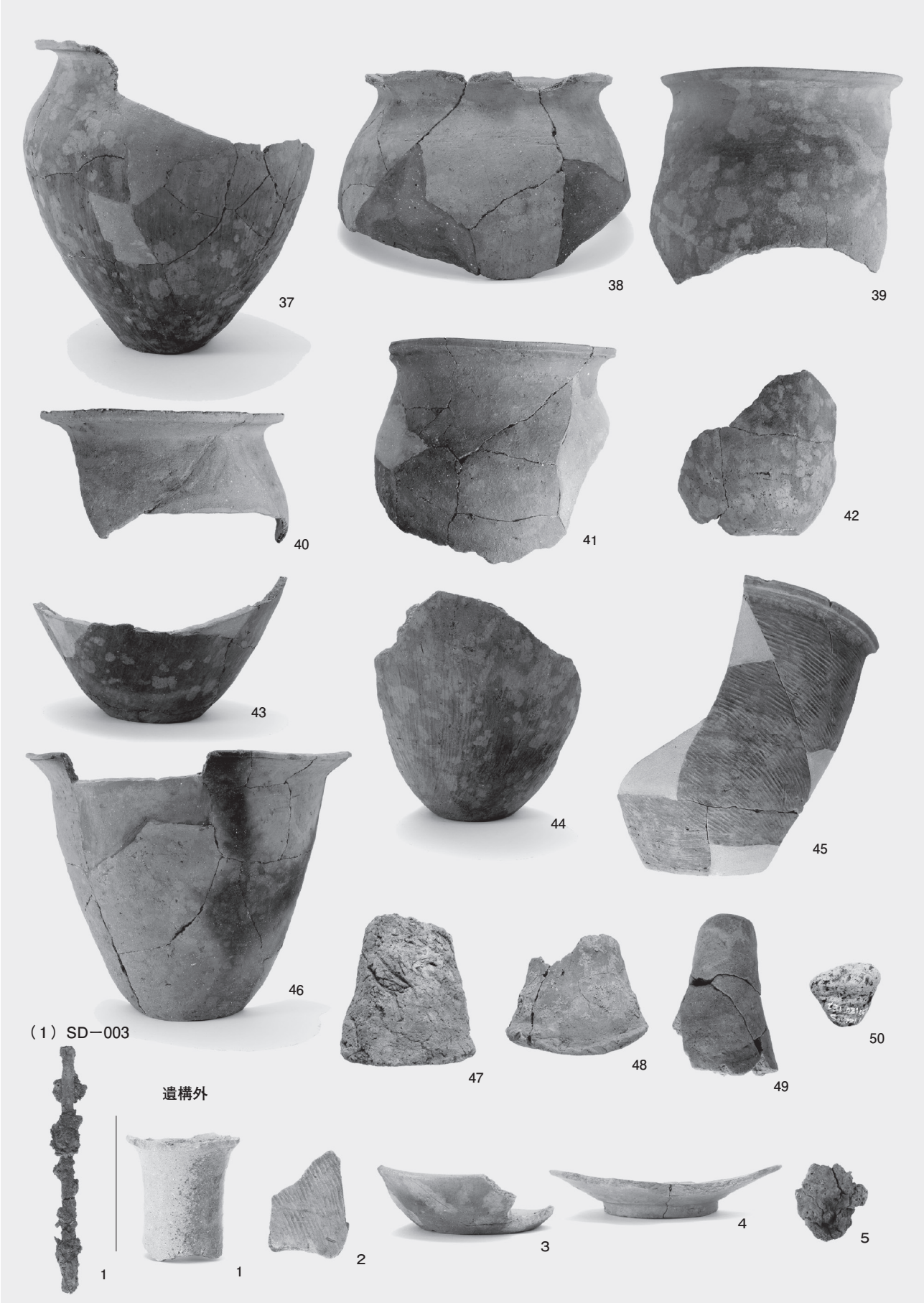
奈良・平安時代遺物（2）

奈良・平安時代遺物（3）


（3）SI－001
1
2
4
5
6
7
9
11
13
10
12
（3）SI－004
2
3
（4）SI－003
3
（4）SI－004
2
3
6
7
8
（5）SI－001
13
11
12
1
2
3
4
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

奈良・平安時代遺物（4）

奈良・平安時代遺物（5）



奈良・平安時代遺物（6）

報告書抄録

ふりがな	いんざいしてんじんだいいせき
書名	印西市天神台遺跡
巻次	
副書名	主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第17集
編著者名	鳴田浩司　黒沢 崇
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260－8662　千葉県千葉市中央区市場町1－1　TEL043－223－4129
発行年月日	西暦2016年12月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
天神台遺跡（てんじんだいいせき）	印西市大森（いんざいしおおもり） 2,233－1ほか	12231	021	35度 49分 42秒	140度 08分 59秒	20110801 ～ 20110916 ほか	4,829.9㎡	道路建設工事
				世界測地系 WGS84				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神台遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	石器出土地点 竪穴住居跡・土坑 竪穴住居跡 竪穴住居跡 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・ピット群・土坑・溝	旧石器 縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器・土製品 土師器・須恵器・鉄製品・石製品・土製品・瓦・鉄滓	弥生時代後期の大型の竪穴住居跡（床面積約74㎡）を検出

要約

主要地方道千葉竜ヶ崎線の道路改良工事に伴って発掘調査を実施した天神台遺跡の（1）地点から（5）地点の調査成果を収録している。

旧石器時代ではⅣ層下部からⅤ層相当の土層から黒曜石製の剥片石器が2点出土した。縄文時代では加曽利E式期後半の竪穴住居跡と土坑が検出された。弥生時代では後期の竪穴住居跡がまとまって検出され、なかでも床面積74㎡を超す大型の竪穴住居跡は当地域最大級と考えられる。古墳時代では、少数ながら前期の竪穴住居跡が検出された。奈良・平安時代の遺構は最も多く検出され、大規模で継続的集落が周辺に展開すると想定される。土器は常陸産のものが主体的に含まれる。その他の遺物では、瓦片や鉄滓が出土するなど周辺に分布する遺構群との関連が興味深い。

総括では天神台遺跡と周辺の遺跡の多次にわたって実施された調査成果をまとめた。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 17 集

印西市天神台遺跡

― 主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 28 年 12 月 26 日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１
印　　刷　株式会社正文社
千葉市中央区都町 1-10-6